

# 上　敷　遺　跡

昭和52年3月

栃木県教育委員会

## 序

栃木県の南部は関東平野の縁辺をなし、北部の山地から南流する大小の河川流域には、原始・古代の文化遺産が豊富に存在しており、また、下野國は古來上国として栄えてきたところあります。

近年、圃場整備事業が大規模に実施されておりますが、これら貴重な文化遺産の保護につきましては、開発との調整を図っているところであり、本地区につきましても事業計画が予定されて以来、県農務部と埋蔵文化財の保存について協議を重ねてきたところであります。

今回、栃木県埋蔵文化財報告書第19集として刊行するものは、昭和49年度に発掘調査を実施したものであり、古墳時代中期から平安時代にかけての貴重な資料を得ることができました。研究等にご活用いただければ幸いと存じます。

この報告書発刊にあたり、ご熱意をもって発掘調査を担当され、報告書作成にあたられた竹澤謙先生（今市高校教諭・前文化課指導主事）、山ノ井清人先生（作新学院教諭・前文化課調査員），また、調査に際しご協力をいただいた佐野市教育委員会、足利市教育委員会および県農務部に対して、深甚な謝意を表するものであります。

昭和52年3月

栃木県教育委員会教育長

渡辺幹雄

## 例　　言

- 1 本報告書は昭和49年11月から昭和50年2月まで栃木県教育委員会が足利市上敷、佐野市雜敷地区で実施した発掘調査の記録である。
- 2 調査に要した費用は県営農場整備事業「出流川沿岸地区」であるため、県農務部および足利市、佐野市の負担による。
- 3 本報告書の執筆は池田進一文化財調査係長、発掘調査担当者竹澤謙、石川均、山ノ井清人がそれぞれ分担した。
- 4 本報告書に使用した遺構に関する図面は各調査員の実測を石川が調整し、竹澤がトレース作成した。また、遺物に関する図面は遺構からの出土物は山ノ井が実測、トレースして作成した。
- 5 本報告書に使用した写真は各調査員の撮影によるものを山ノ井、柳川宏指導主事が現像、引伸しを行ない作成した。

## 目 次

### 序

#### 例言

第1章 発掘調査の経過と概要.....	4頁
〔1〕 発掘調査にいたる経過.....	4頁
〔2〕 発掘調査日誌抄.....	4頁
第2章 遺跡の立地と環境.....	8頁
〔1〕 地理的環境.....	8頁
〔2〕 歴史的環境.....	8頁
第3章 遺構と遺物について.....	9頁
〔1〕 調査の概要.....	9頁
〔2〕 A区の遺構と遺物について.....	11頁
1 第1号住居跡.....	11頁
2 第2号住居跡.....	20頁
3 第3号住居跡.....	24頁
4 第4号住居跡群と第5号住居跡.....	27頁
5 第6号住居跡.....	30頁
6 第7号住居跡.....	31頁
7 第8号住居跡.....	32頁
8 井 戸 跡.....	32頁
9 土 壤.....	34頁
〔3〕 B区の遺構と遺物について.....	36頁
1 第1号住居跡群.....	36頁
2 第2号住居跡.....	41頁
3 第3号住居跡群.....	46頁
4 第4号住居跡群.....	51頁
5 第5号住居跡.....	64頁
6 第6号住居跡群.....	65頁
7 第7号住居跡群.....	68頁
8 土 壤.....	76頁
9 溝.....	76頁
第4章 結 び.....	79頁

## 第1章 発掘調査の経過と概要

### 〔1〕調査に至る経過

佐野市の北西部、出流川沿岸に展開する水田地帯に、大規模な農業基盤整備事業が計画され、昭和48年度を初年度とする8か年計画により、栃木県農務部主体の事業が開始されていた。

ところが、昭和49年4月、県道赤見・塙米線ぞいの佐野市雜敷地区並びに足利市上敷地区にかかる圃場整備の実施中、土器類が出土したことで安足土地改良事務所から栃木県教育委員会文化課に通報があった。

文化課では、上記通報にもとづき、直ちに竹澤指導主事を派遣し、現地踏査を行った結果、古墳時代から奈良時代にかけての住居跡並びに上器類であることを確認したため、当該遺跡の保存策について、急きょ土地改良事務所、安足土地改良事務所、佐野市、足利市並びに地元土地改良区をまじえ、協議に入った。

再三に亘る話し合いと、遺跡の範囲確認のための調査を重ねた結果、遺跡が、今後の耕作により影響を受けることとなる部分の約9,000m<sup>2</sup>の面積について発掘調査をし、遺跡を記録として保存することで、協議が成立した。また、費用については、農業基盤整備事業側で負担することとし、調査の時期については、収穫後に実施することとした。

このため、文化課では、調査体制を整え、栃木県教育委員会の直管事業とし、地元、安足土地改良事務所等の協力を受けて、昭和49年11月14日より、昭和50年1月27日まで、発掘調査を実施した。

発掘調査担当者は次のとおりである。

発掘主体者 栃木県教育委員会

調査担当者 竹澤 譲（文化課）

山ノ井清人（〃）

石川 均（〃）

### 〔2〕発掘調査日誌抄

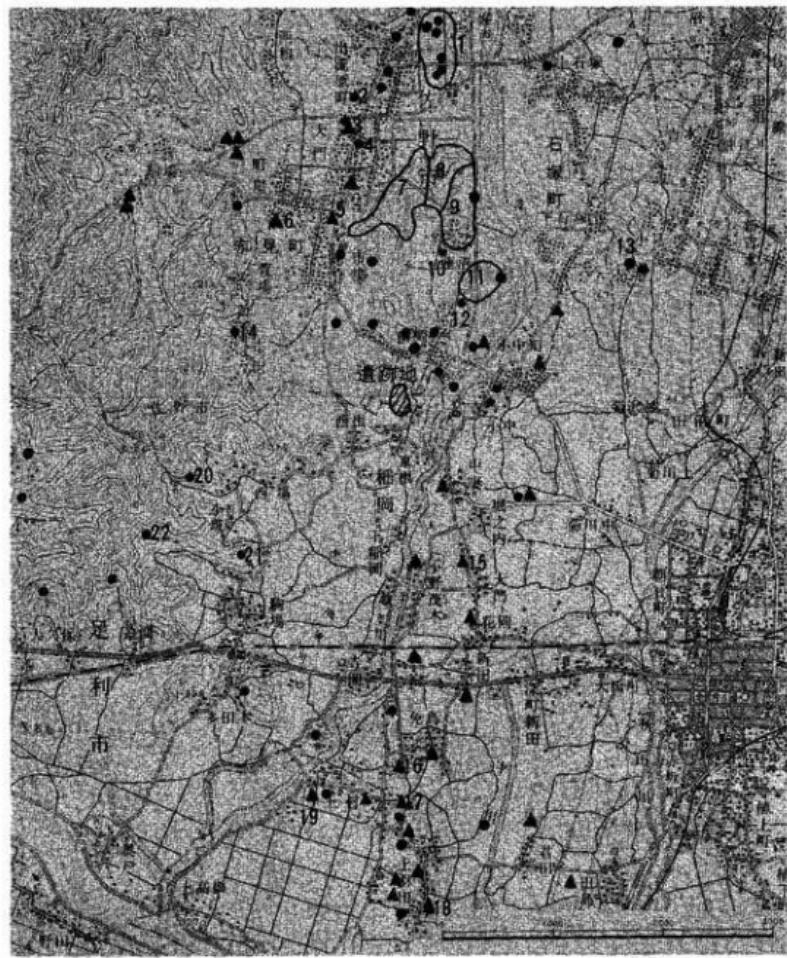
11月14日 昨日迄に器材運搬等準備はすべて整う。作業員に諸注意を行い発掘予定地の表土はぎを行う。

11月15日 昨日にひきつづき表土はぎ。強風。

11月16日 本日もひきつづき表土はぎ。

- 11月18日 A区の表土はぎが終了。ローム上面をきれいに出し落ち込みの確認。一部落ち込みを掘り下げる。
- 11月19日 A区全体の掘り下げを行う。B区南東隅にプレハブが建つ。
- 11月20日 A区の掘り下げを行う。付近の人がチラホラ見学に来る。
- 11月21日 A区の掘り下げを行う。3号住居がその大部分をあらわす。
- 11月22日 A区、1号・2号住居、遺物の面まで掘り下げ終了。3号、遺物出土状態の図面をとり取り上る。
- 11月25日 A区各住居の掘り下げ。
- 11月26日 A区1号西半分を掘り方まで出す。井戸、土壙、掘り上がる。課長、係長、土地改良事務所長、事業課長来訪。
- 11月27日 A区2、3、6号住居、土壤3、4の各写真を写す。B区に入り表土はぎを行う。
- 11月28日 A区2、3、6号住居平面図実測。B区表土はぎ。非常に土が硬く苦戦。
- 11月29日 A区1、2、3号住居の平面図実測。B区、2号-1、-2掘り下げる。2号-1は掘り下げ完了。B区にトレンチ設定。
- 11月30日 A区、1号住居、遺物取り上げ。B区、2号-2掘り下げ完了。2号-3掘り下げ。強風。
- 12月2日 B区2号-3トレンチ仕上り。2号-4トレンチ設定。夕刻より雨。
- 12月3日 B区2-4トレンチの掘り下げ。チョコレート色の土が硬くて、予想外に進まない。B区3-1トレンチ掘り上る。
- 12月4日 B区3-2、3-3トレンチ掘り上る。B区3-2トレンチの東で綠釉の耳皿出土。付近に内黒の土部あり。賃金支払い。
- 12月5日 B区1-1~13トレンチを掘り下げる。
- 12月6日 B区1-1トレンチ掘り上る。B区2、3号住居の輪郭を出す。
- 12月7日 B区2、3号住居の復土はぎ。遺跡遠景を西方の山より撮影。
- 12月9日 A区1号住居の遺物を実測後取り上る。B区2号住居掘り下げ。西南隅で切り合う。須恵器出土。4号~6号住居のプランの確認作業。
- 12月10日 A区1号住居、B区2、3-A、3-B住居の掘り下げ。3時過ぎ雨の為作業中止。
- 12月11日 A区1号住居、B区2号住居、3号住居-A、B、C、Dの掘り下げ。
- 12月12日 A区1号住居の掘り下げ。遺物、焼土が多く進まず。B区2号住居、3号住居の掘り下げ。
- 12月13日 A区1号住居、B区2号住居、3号住居の掘り下げ。
- 12月14日 A区1号住居のセクション実測。B区1号住居を拡張。4号住居の各グリッドの掘り下げ。

- 12月16日 B区1号住居の掘り下げ。4号住居の各グリッドの掘り下げ。
- 12月17日 A区1号住居の掘り下げ。B区4号住居はA～Dまで4軒が切り合う。それぞれを掘り下る。
- 12月18日 雨の為作業中止。
- 12月19日 A区1号住居の掘り下げ。B区1号住居、4号住居のA～Dを掘り下げる。
- 12月20日 B区1号住居の中に土壌が多く発見される。切り合い関係がむずかしく調査が難行。B区4号住居は遺物の出土状態の写真撮影と実測を行う。
- 12月21日 本日昭和49年の作業を終る。掘り足りないところが多いので、一応、シート等をかける。来年は風のふかないことを期待する。
- 1月 6日 作業再開。年末年始の休止期間中の事故はほとんどなし。
- 1月 7日 A区1号住居の掘り下げ。B区5号住居、6号住居を掘り始める。
- 1月 8日 昨日に引き続き各住居の掘り下げ。B区5号住居、6号住居の遺物撮影と実測を行う。  
午後、天候悪く、作業中止。
- 1月 9日 A区1号住居の掘り下げ。B区5号住居、6号住居の清掃と撮影。B区各トレチの清掃。
- 1月10日 A区1号住居の掘り下げ。B区各トレチの清掃。
- 1月11日 A区1号住居の写真撮影。B区1号住居、5号住居、6号住居が掘り上がる。写真撮影。
- 1月13日 B区7号住居のグリッドを掘り始める。午後天候悪く、作業中止。
- 1月14日 全員でB区7号住居付近を清掃。7号住居を掘り下げる。
- 1月16日 雪の為、作業中止。
- 1月17日 B区7号住居の掘り下げ。3軒の切り合いである。調査日程と遺構の保存可能性を討議した結果、これ以上住居跡は掘らないことに決定。
- 1月18日 B区7号の掘り下げ及び遺物の撮影、実測。B区各トレチの清掃を行い、遺構の数を確認する。
- 1月20日 雪の為、作業中止。
- 1月21日 B区7号住居完掘し写真撮影。本日で一応作業もなくなつて来たのでしばらく人夫の出動を停止。
- 1月22日～25日 調査員のみで遺物、遺構の平面図実測。
- 1月27日 本日で人夫の出動を停止。平面図実測を残すのみ。器材のかたづけを行う。作業終了後打上げを行う。
- 1月28日 平面図実測を行う。夜、稻岡地区で現地説明会を行う。
- 1月29日 平面図実測を行う。夜、山崎地区で現地説明会を行う。



▲ 土師集落跡・包含地

● 古墳

- 1. 四十八塚古墳群 2. 本郷古墳 3. 下ノギ遺跡 4. 大門一号墳 5. 松葉遺跡 6. 可屋南遺跡
- 7. 東山古墳群 8. 中山古墳群 9. 蓬沼古墳群 10. 十二天塚古墳 11. 五箇古墳群 12. 赤見山崎古墳 13. トコチ山古墳 14. 市の沢古墳群 15. 大門遺跡 16. 龍真寺南遺跡 17. 道場稻荷古墳 18. 上羽田東遺跡 19. 石橋遺跡 20. 西場古墳群 21. 山崎古墳群 22. 入駒場古墳群

第1図 上敷遺跡周辺の歴史的環境

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 〔1〕地理的環境

遺跡は栃木県の西南、佐野市山崎字雜敷及び足利市稻岡町字上敷に渡って所在する。大部分が足利市に所在するので、「上敷遺跡」と称する。遺跡地は両毛線佐野駅より北西、直線距離にして約4kmの地にある。南方の渡良瀬川までは約6km、東方の旗川及び西方の出流川までそれぞれ約0.5kmの地点で西に緩く傾斜した、田原ロームをのせる標高40m、比高2mの低い段丘にある。この地は土師器片が密に散布していた為、段丘の規模から集落跡と考えられていた。遺跡地の現状は水田、畑であり、範囲は詳かではないが南北1,000m、東西200mを越えるものと思われる。調査対象は表土の浅い100m×90mの地域に限定された。遺跡地の層位は調査前年の土地改良により若干の乱れがある。表土の状態は前記の為に良く判らないが約50cm、その下に層厚約50cmの田原ロームであり、主として黄褐色火山灰よりなり、上位は黒色土におおわれ、下部は、暗色帯上面をもつて宝木ロームと境する。宝木ロームは層厚約1.5m、最上部に層厚約20cmの暗色帶があり、上面より約40~50cm下位に点在的に鹿沼鉄石層を挟んでいる。宝木ロームの下半部は著しく粘土化が進んでいる。

### 〔2〕歴史的環境

上敷遺跡の周辺には多くの遺跡が存在しており、本県でも遺跡の比較的密な地域である。遺跡も縄文時代より中世に至るまで多様である。特に古墳時代より奈良時代にかけては、数量的にかなり増加している。

古墳の分布は旗川沿岸と、秋山川沿岸ぞいと、三杉川沿岸の洪積台地や低丘陵の裾部付近に多く分布している。

ことに旗川沿岸に分布するものが多く、それらの古墳は主に、旗川と出流川とにはさまれた赤見地区の出流原町と赤見町の低丘陵上と洪積台地上に多く群集している。形態的に分けると円墳64基、前方後円墳2基、方墳2基となっている。築造年代については大半が6世紀末から7世紀ころにかけて築かれた小円墳を主とする群集墳が最も多い。

古墳時代より奈良時代にかけての住居跡の分布も古墳の立地と同じ様に秋山川、旗川、三杉川、出流川などの諸河川の流域に集中している。洪積台地上にあるものが多く、その他丘陵裾部と沖積地にわざかに分布している。時期は5世紀から9世紀のころにかけてまちまちである。

## 第3章 遺構と遺物について

### 〔1〕調査の概要

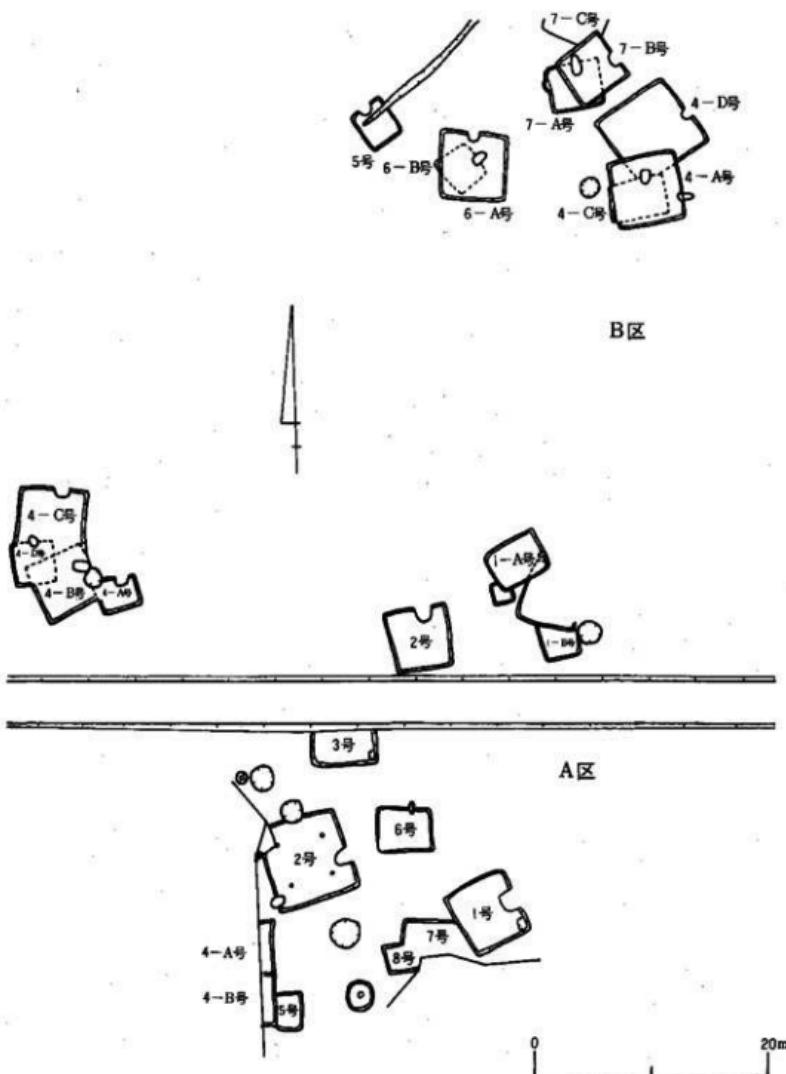
発掘調査は当該地東側の段丘崖付近を削ってつくられた南流する用水路の左側断面にあらわれた住居跡の底面と土地改良事業によって形成された現水田面とのレベルとを比較した結果、辛じて住居の床面が残存し、かつ今後の耕作の過程で破壊される可能性のある地域と思われる3枚の水田を対象地と決定した。

まず、既に動かされている水田の黒色土（耕作土）の部分をブルドーザーで剥ぎとる作業からはじめた。その結果、当該地の東側はロームのかなり深い部分まで既に破壊されていることと、逆に西側はローム直上にのるチョコレート色の硬い土壤の上面（ここから竪穴住居が掘り込まれているのであるが……）までしかブルドーザーが入っていないことも判明した。このため、ブルドーザーでローム直上まで全面的に剥ぎとることはやめて、人力によりレンチを掘り、今後耕作で破壊される可能性の強い東側に調査の重点を置くことに決定した。

調査は寒風ふきすきが冬季に飛柱とたかいたがながらすめられた。しかも、調査対象とした地域は今後、遺構が破壊される可能性の強い地域であるため、既にブルドーザーによって竪穴住居の壁の上部が失われ、かまどなども不完全にしか遺存していない。そのうえブルドーザーの往復により、遺物にひびが入って定形のまゝとりあげることのできないような最悪の状態の地域であるため、調査それ自体に不満の多く残るものであった。

しかし、調査結果をまとめると和泉期から鬼高、真間、国分期の各時期に該当する合計28軒の竪穴住居跡をそれぞれ検出し、鬼高峰期の食料であったと思われる「ひえ」の炭化物とその貯蔵の方法など多くの成果を得ることができた。また、遺物の面でも比較的古い須恵器の存在、縄文陶器などに多くの土師器を得ることができて、県南西部地方の古代史の解明に手がかりをつかむことができたことの意義は大きいものがある。

第2図 遺構配図図

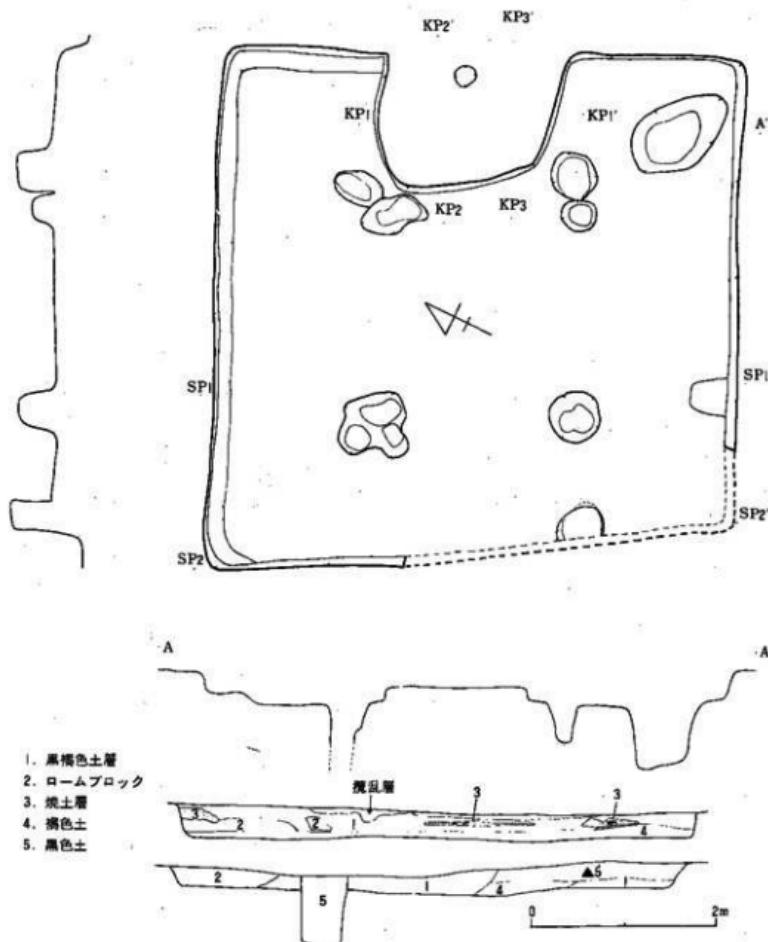


## 〔2〕 A区の遺構と遺物について

### 1. 第1号住居跡

第1号住居跡はA区最東南端にあり、すぐ東側は一段高い段丘である。

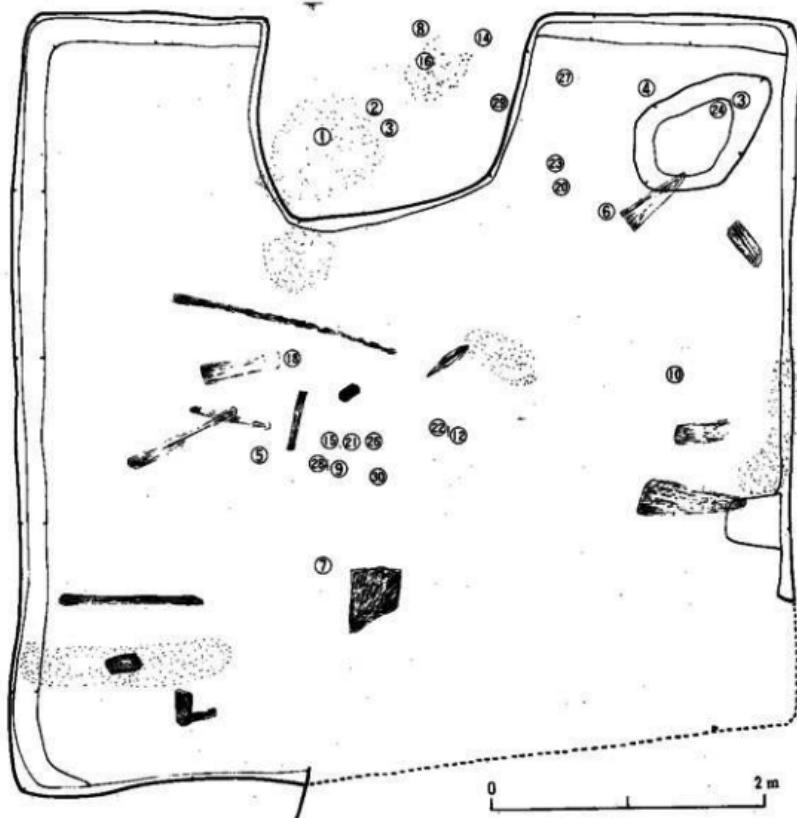
規模は $5.65m \times 5.70m$ のほぼ正方形であるが、西南部が第7号住居跡により切られている。かま



どを東側壁のはじ中央部にもっている。主柱穴は4本で、東側の2本には支柱穴がある。かまどの南側には貯藏穴がある。既述のとおり、土地改良事業のブルドーザーによりロームの上面が削平されているので完全な壁高を知ることはできないが構築基底面よりの現在高は約30cmである。

なお生活面は基底面上約10cmにあり、ロームと黒色土を混入させており、この面に多くの遺物が散在している。また、この住居は火災に遭遇しており、遺物とともに炭化材、焼土が検出された。

かまどは土師器の壺を芯にして、ロームと黒色土を用いて構築しており、焼土、灰が多い。貯藏穴は口辺部が不整長円で南北約1.2m、東西約0.7mであり、深さは約0.7mである。また、この貯藏穴内に埋没の過程において周辺部に置かれていたと思われる高壙やかまどの支脚などが転落しているのが検出された。



第4図 A区1号住居跡遺物出土位置図

## 第1号住居跡出土遺物

### 壺形土器（第5図1～8）

1、完形品である。外面は肩部に成形のさいの輪積み痕がみられる。口縁部には横ナデが施こされている。胴部は縦位あるいは斜位の窓削りを行なったのちに、胴部下半にのみ斜位の窓磨きを粗く施している。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の窓ナデが行なわれている。底部には木炭痕が残る。胴部下端は横位の窓磨きがみられる。胎土は普通であるが、焼成は粗悪であり、もろい。全体に焼土の付着が著しく、二次的加熱があったものと思われる。土器がもろいのは二次加熱の結果であろう。薄い赤茶色を呈している。

2（図版17—1）、完形品であるが、器面の剥落が著しい。外面は胴部に斜位の窓削りを施したのちに口縁部に横ナデを行なっている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の窓ナデが施されている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪く、もろい。色調は淡黄褐色を呈する。

3、ほぼ完形品である。外面は胴部に斜位の窓ナデまたは窓削りと思われる砂粒の移動痕がみられる。内面は口縁部には横ナデ、胴部には窓ナデが行なわれている。底面には放射状の窓ナデ痕がみられる。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成もきわめて悪く、もろいために磨耗が著しい。色調は淡橙色を呈する。

4（図版17—2）、ほぼ完形品である。外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部上半は斜位の窓ナデ、胴部下半は斜位の窓削りが施こされている。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部は上半に斜位の窓ナデ、下半に放射状と横位の窓磨きがそれぞれ施こされているが、成形のさいの輪積み痕が10段ほど消されずに残っている。胎土は普通であるが、焼成は比較的良好で茶褐色を呈する。

5（図版17—3）、肩部以下を欠損する。外面は口縁部から頸部にかけては横ナデを行ない、胴部には横位の窓ナデをほぼ全面に施こしている。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデが行なわれ、胴部は上半に横位の窓ナデが施こされている。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好であり茶褐色を呈する。

6（図版17—4）、胴部下半を欠損する。外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部上半には縦位の窓ナデがそれぞれ施こされている。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部上半には縦位の窓ナデが施こされている。胎土、焼成ともに不良であり、もろく軟弱である。色調は明茶色を呈する。

7、口縁部の約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、肩部は斜位の窓ナデがそれぞれ施こされている。内面は外面とほぼ同様の整形であるが肩部の窓ナデの方向が斜位の点に違いがみられる。胎土、焼成ともに比較的良好であり、白茶褐色を呈する。

8、カマドの煙道から倒立した状態で検出されたものであり、口縁部と胴部下半を欠損してい

る。外面は頸部には刷毛目を施したのちに横ナデを行なっている。肩部から胴部上半にかけては横位の箆削りを行なったのちに縦位および斜位の箆ナデを施している。内面は頸部には横ナデ、肩部から胴部上半にかけては横位の箆ナデがそれぞれ施されている。胎土は砂粒の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好であり明茶色を呈する。

#### 壺形土器（第6図9～11）

9（図版17—5），胴部を約3分の1ほど欠損する。外面は口縁部には横ナデ、胴部上半は斜位の箆削りのうちに斜位の箆磨き、下半は横位の箆磨きがそれぞれ施されている。底部周辺には箆削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデがそれぞれ施されている。肩部内面には口縁部と胴部との接合痕がみられる。胎土、焼成ともに良好であり明茶褐色を呈する。

10（図版17—6），口縁部から胴部上半にかけての約2分の1ほどが残存している。外面は器面の剥落が著しいが、口縁部には横ナデ、胴部上半には斜位の箆ナデがみられる。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部上半には斜位の箆ナデがそれぞれ施されている。胎土は良好であるが焼成が悪いために軟弱である。色調は白茶色を呈する。

11，肩部以下を欠損する。外面は口縁部に横ナデを施したのちに肩部以下に縦位の箆ナデを行なっている。内面は口縁部から肩部付近まで横ナデ、肩部以下には箆ナデが施されている。胎土、焼成ともに良好であり明茶色を呈している。

#### 小形壺形土器（第6図12～13）

12（図版18—1），胴部の一部分を欠損するが、ほぼ完形である。外面は器面の剥落が著しく、口縁部の横ナデ痕と胴部下端の横位の箆削り痕がみられるだけである。内面は口縁部から肩部にかけては横ナデ、胴部上半は横位の箆ナデ、胴部下半から底面にかけては乱雑な箆磨きがそれぞれ施されている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪い。外面は明茶色を呈し、内面は黒褐色を呈する。

13（図版18—2），貯藏穴の内部から高坏、支脚と共に出土した遺物である。完形品である。外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部には斜位の箆削りがそれぞれ施されている。底部には木葉痕がみられるが、成形の最後に環状の粘土紐を貼り付けているために周辺部がかくれている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には箆ナデがそれぞれ施されている。胎土は砂、小石等の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好であり、明茶色を呈する。全体に二次加熱の可能性がうかがえる。

#### 壺形土器（第6図14）

14（図版18—3），完形品である。外面は口縁部には横ナデ、胴部から底部にかけては横位の箆磨きが施されている。内面は全面に横ナデを行なったのちに胴下半部から底面にかけて放射状の箆磨きを施している。胎土、焼成ともにきわめて良好であり、茶褐色を呈する。

#### 瓶形土器（第7図15～16）

15（図版18—5），胴部下半を欠損しているが瓶形土器と思われる。外面は口縁部には横ナデ，胸部には縦位の笠削りのうちに部分的な縦位の笠磨きをそれぞれ施こしている。内面は口縁部には横ナデ，胴部には横位の笠ナデのうちに全面的な縦位の笠磨きがそれぞれ行なわれている。胎土，焼成ともに良好であり，淡黄褐色を呈する。

16，カマドの煙道からの出土である。約2分の1を欠損する。外面は口縁部には横ナデ，胴部は縦位および斜位の笠削りがそれぞれ施こされている。内面は口縁部には横ナデ，胸部には横位の笠ナデが施こされている。胎土，焼成ともに普通であり，淡茶褐色を呈する。

#### 坏形土器（第7図17～23）

17，全体の約3分の1を欠損する。外面は稜から上の口縁部には横ナデ，稜から下は底部をも含めて横位の笠削りがそれぞれ施こされている。内面は口縁部には横位の笠ナデ，体部には横位の笠ナデのうち放射状の笠磨きがそれぞれ施こされている。胎土は精撰されており，きわめて良好である。焼成も良好であり赤褐色を呈する。

18，全体の約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデ，体部には横位の笠削りが行なわれている。内面は口縁部に横ナデを施したのちに体部に放射状の笠磨きを行なっている。

19，全体の約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデ，体部には横位の笠削りが行なわれている。内面は剥落が著しく口縁部に横ナデ痕が若干みられるだけである。胎土，焼成ともに不良であり，淡黄褐色を呈する。

20（図版18—6），ほぼ完形である。外面は口縁部に横ナデを施したのちに体部に横位の笠削りを行ない，そのうちに横位の笠磨きを行なっている。内面は口縁部に横ナデを施したのちに体部全面に放射状の笠磨きを行なっている。胎土，焼成ともに良好であり明茶色を呈する。

21（図版18—8），ほぼ完形である。外面は口縁部には横ナデ，体部には横位の笠削りが施こされている。内面は口縁部に横ナデを施したのちに，体部に放射状の笠磨きを行なっている。胎土，焼成ともに良好であり，赤褐色を呈する。

22（図版17—7），完形品である。外面は体部に横位の笠ナデを施したのちに口縁部に横ナデを行なっている。また底部には木葉痕がみられるが，底部周辺の笠削りのために一部分が削りとられている。内面は口縁部から体部上半にかけての笠ナデのうちに，下半部から底面にかけて笠ナデを施こしている。胎土は砂粒の混入が若干みられるが普通である。焼成は悪く，もろい。全体に淡黄褐色を呈する。

23，全体の約3分の1ほどを欠損する。外面は全体に不統一方向の笠削りを行なったのちに口縁部に横ナデを施こしている。内面は口縁部には横ナデ，体部には笠ナデが施こされている。胎土は小石の混入がわずかにみられるが，比較的良好である。焼成も良好であり，明茶色を呈する。

#### 高环形土器（第7図24～29）

24（図版19-6），貯藏穴内より小形甕形土器（13）支脚とともに転落した状態で検出されたものであり，完形品である。外面は口縁部には横ナデ，体部には斜位の窓ナデが行なわれている。脚部は柱状部に縦位の窓磨きを施したのちに，裾部に横ナデを行なっている。内面は坏部では口縁部に横ナデを行なったのちに，底面を中心とする放射状の窓磨きを施している。脚部では裾部に外面と同様に横ナデ痕がみられる。胎土，焼成ともにきわめて良好であり，明茶色を呈する。

25，裾部を欠損する。内外面ともに磨耗と剥落が著しいが，外面では坏体部に横位の窓ナデが，また脚部には縦位の窓磨きがみられる。内面は坏体部に施した横位の窓磨きと，脚部に行なった横位の窓削りがみられる。胎土，焼成ともに不良であり，白茶褐色を呈する。

26，坏部のみが残存している。外面は口縁部には横ナデ，体部には横位の窓削りのうちに横位の窓磨きがそれぞれ施こされている。内面は口縁部に横ナデを施したのちに，横位の窓磨きが底面まで行なわれている。胎土，焼成ともに良好であり，明茶色を呈する。

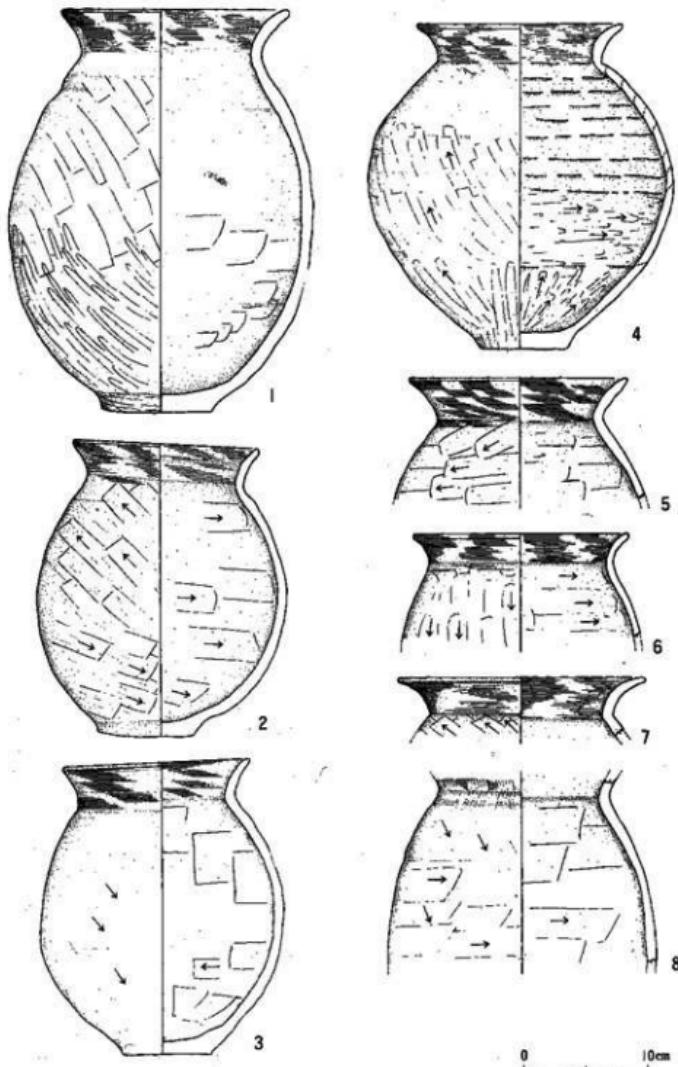
27，坏部を欠損する。外面は脚部に縦位の窓磨きを施したのちに裾部に横ナデを行なっている。内面は脚部には横位の窓削りが行なわれているが，裾部は器面が磨耗しているために整形痕は不明である。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も粗悪であり，軟弱でもろい。色調は淡赤色を呈する。

28，坏部を欠損する。外面は脚部に斜位の窓磨きを施したのちに裾部に横ナデを施こしている。内面は脚部に横位の窓ナデが行なわれている。内面は脚部に横位の窓ナデを施したのちに裾部に横ナデを行なっている。胎土は砂粒の混入がみられるが比較的良好である。焼成も良好であり，茶褐色を呈する。

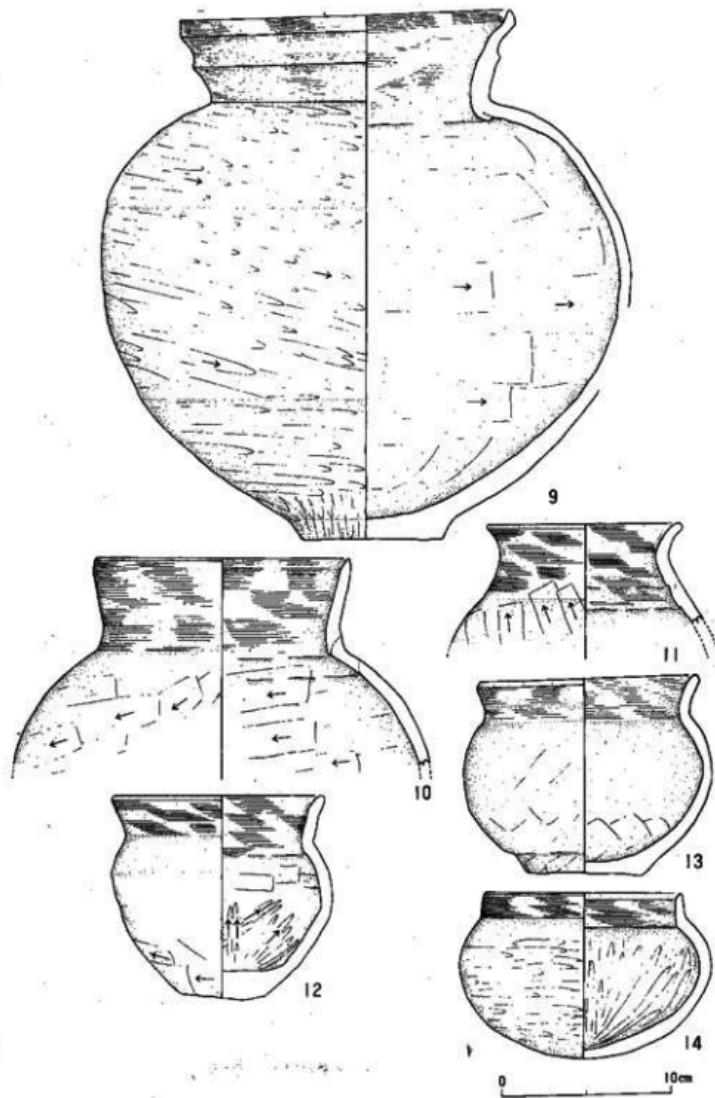
29，坏部を欠損する。外面は脚部に縦位の窓削りを施したのちに縦位の窓磨きを行ない，そのうちに裾部に横ナデを行なっている。坏部は残存部に横位の窓磨き痕がみられる。内面は坏部では底面を中心とする放射状の窓磨きが行なわれたものと思われる。脚部にはほぼ全面に面位の窓磨きが施こされている。胎土，焼成ともに良好であり，茶褐色を呈する。

#### 須恵器

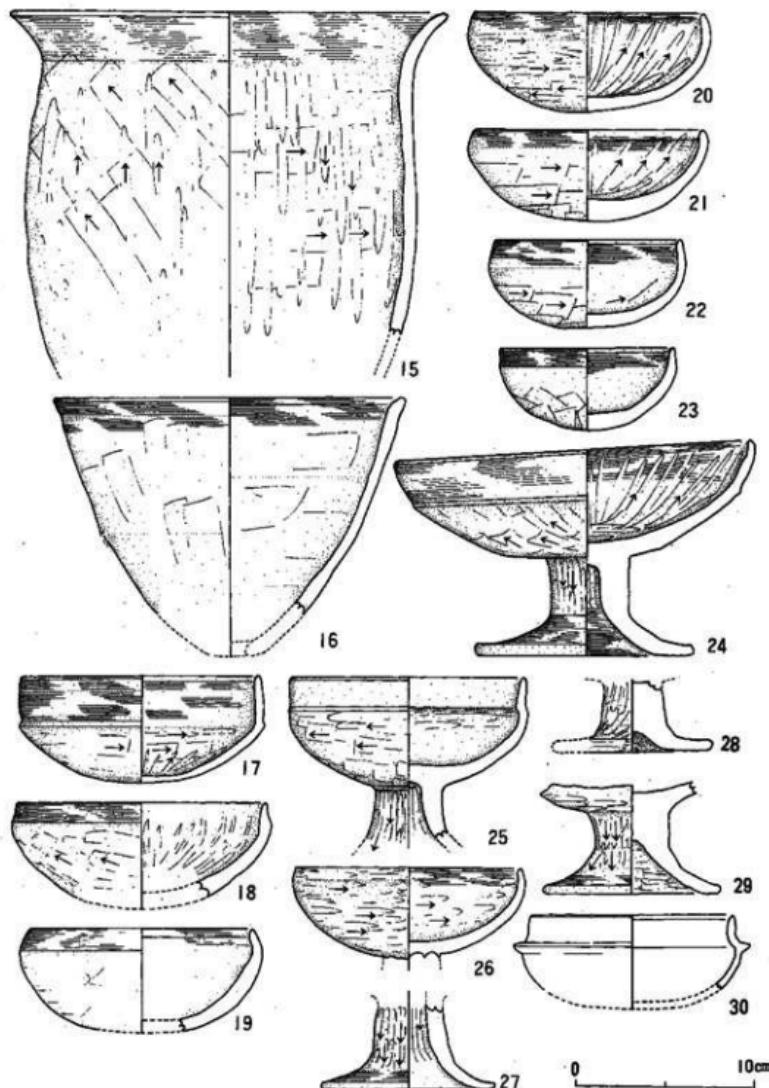
蓋坏（第7図30），全体の5分の1ほどの破片である。外面は全面にロクロ整形の横走痕が走る。また受け部には自然の釉がみられる。内面にはロクロ整形の横走痕が走るが，成形の凹凸が残る。胎土はきわめて良好であり，焼成もきわめて良好であり，青灰色を呈する。



第5図 A区1号住居跡出土遺物



第6図 A区1号住居跡出土遺物



第7図 A区1号住居跡出土遺物

## 2 第2号住居跡

第2号住居跡は主軸をN15°Eにもち、東西7.35m、南北7.40mのはく正方形の平面形をもつ。かまどは東壁の中央や、南側にある。主柱穴は四隅の近くに4本がある。また、東南隅にはいわゆる貯蔵穴をもつ。周溝は約10cmの深さで北、東には顯著であり、とくに東南部ではその一部があたかも貯蔵穴に入り込むかのように切れ込んでいる。

この住居跡もブルドーザーで上部を切られていったため完全な壁高を知ることはできないが、構築基底面よりの現在高は20cmほどである。

この住居跡は北壁のはく中央を第1号土壇で、北西隅を第9号住居跡に切られ、西南隅付近はこの住居跡埋没後に新しい住居のかまどがつくられている。

### 第2号住居跡出土遺物

#### 変形土器（第9図1）

1（図版19—3），胴下半部を欠損する。外面は口縁部から頸部までは横ナデ、肩部から胴部にかけては縦位の箆ナデが行なわれている。内面は口縁部では横ナデ、頸部から胴部にかけては横位の箆ナデがそれぞれ行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪くもろい。全体に淡黄褐色を呈するが、黒色を呈する部分も若干みられる。

#### 小形変形土器（第9図2）

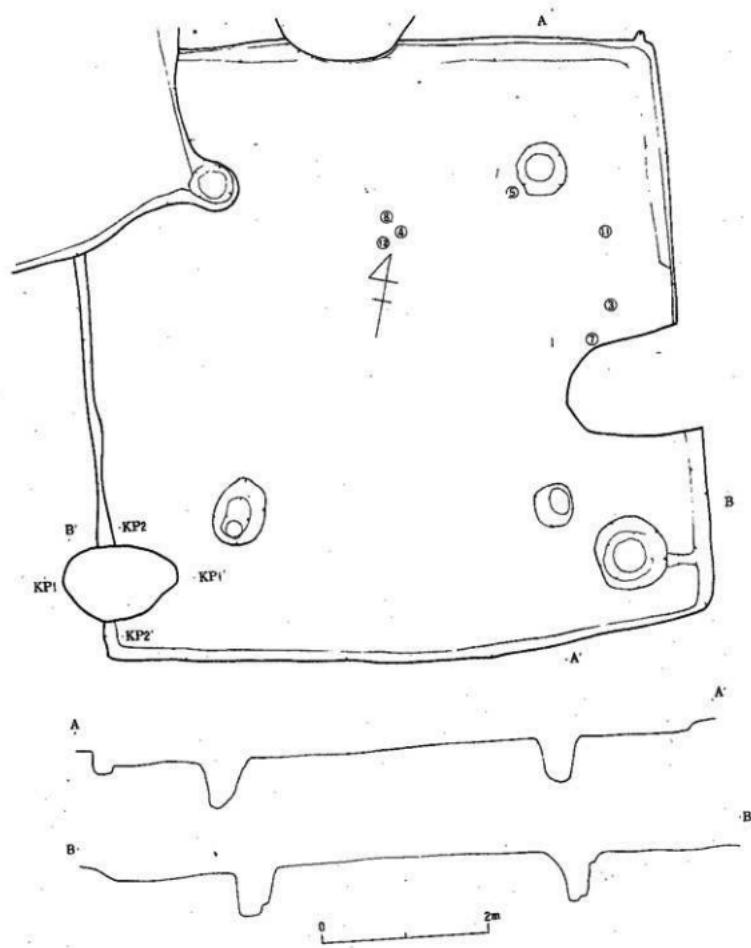
2（図版18—7），全体の約2分の1ほどを欠損する。外面は口縁部から肩部の稜までは横ナデ、肩部から胴上部にかけては縦位の箆ナデがそれぞれ施されているが、胴下部は縦位の箆ナデのうちに横位および斜位の箆削りを施している。底部は一方向の箆削りで仕上げている。内面は口縁部から肩部にかけては横ナデ痕がみられるが、胴部は器面の荒れが著しく部分的に箆ナデ痕がみられるだけである。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪くもろい。全体に淡赤褐色を呈する。

#### 瓶形土器（第9図3）

3（図版19—4），柱穴内部に転落した状態で検出されたものであり、完形品である。外面は口縁部には横ナデ痕がみられるが、胴部から底部にかけては器面の剥落が著しく、斜位の砂粒の移動痕しかみられない。内面は口縁部には横ナデが施されているが、それ以下は箆ナデが行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪く軟弱であり、明茶色を呈する。

#### 环形土器（第9図4・5）

4（図版19—5），口縁部の大半を欠損する。外面は稜から上の口縁部には横ナデ、稜以下の体部には横位の箆削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、体部には部分的な放射状の箆磨きがそれぞれ行なわれている。胎土は雲母、砂粒の混入がわずかにみられるが、比較的良好である。焼成は粗悪であり、黒褐色を呈する。



第8図 A区2号住居跡

5、口縁部を約3分の2ほど欠損する。外面は口縁部には横ナデ、稜から底部までは横位の箆削りがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、体部はナデ仕上げがそれぞれ行なわれている。胎土は比較的良好であるが、焼成は悪くもろい。色調は黒褐色を呈する。

#### 高坏形土器（第9図6～12）

6（図版19—1）、完形品であるが、器面の荒れが著しい。外面は坏部では口縁部に横ナデ痕がみられるほかは不明である。脚部は縦位の箆磨きを行なったのちに裾部に横ナデを施している。内部は坏部口縁部の横ナデ痕以外は不明である。脚部には横位の箆ナデが行なわれている。胎土は多量の小石が混入し不良である。焼成も粗悪でありもろい。色調は明茶色を呈する。

7（図版18—4）、脚部を欠損する。内外面ともに器部の剥落が著しい。外面は稜以下では幅の狭い箆削りのうちに口縁部から稜まで横ナデを施している。内面は口縁部の横ナデ痕のみが確認できる。胎土は若干の小石の混入がみられるが比較的良好である。焼成は粗悪であり、もろい。色調は明茶色を呈する。

8、坏部のみである。脚部は接合部から欠落している。全体に器面の剥落が著しく、整形痕はほとんど不明であるが、口縁部内外面に横ナデが施されていたことがわずかにうかがえる。胎土は小石の混入が多く不良であり、焼成も悪く軟弱である。色調は明茶色を呈する。

9、口縁部と裾部を欠損する。外面は坏部には横位の箆磨き、脚部には縦位の箆磨きがそれぞれ行なわれている。内面は坏部では器面の剥落が著しく整形痕は不明であるが、脚部では横位の箆ナデのうちに裾部に横ナデを行なっている。胎土は小石の混入が多く不良であり、焼成も粗悪で軟弱である。色調は淡黄色を呈する。

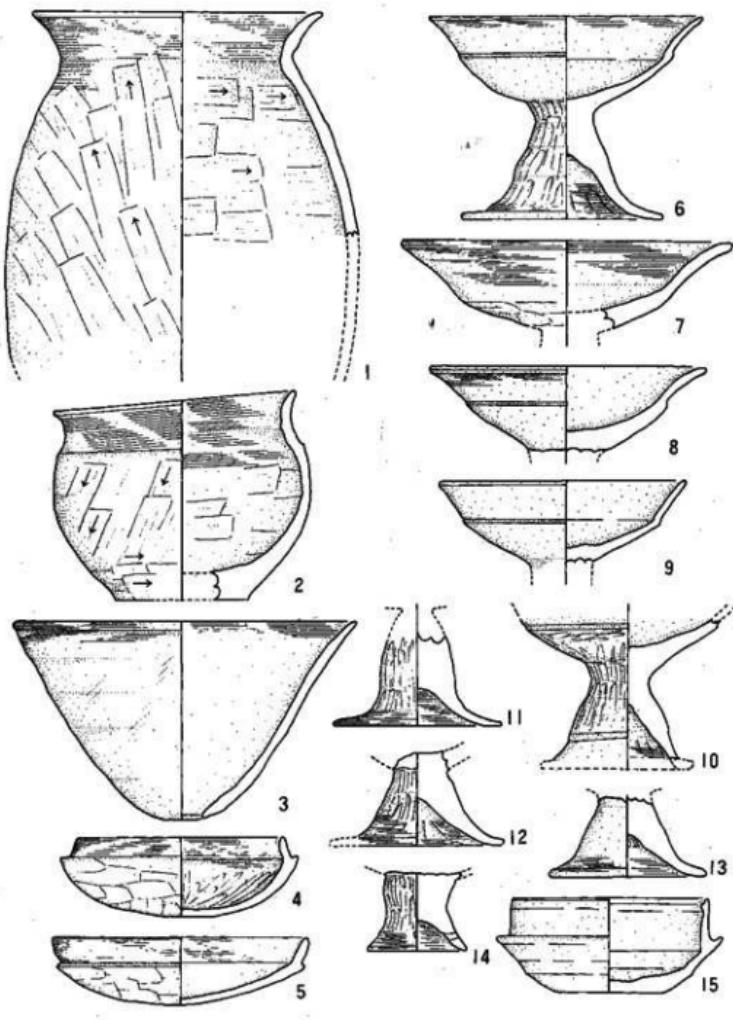
11、脚部のみであり、上半を欠損する。外面は縦位の箆削りのうちに縦位の箆磨きを行ない、そのうちに裾部にのみ横ナデを施している。内面は全面にナデを行なっている。胎土、焼成とともにきわめて良好であり、赤褐色を呈する。

12（図版19—8）、脚部のみである。裾部を欠失する。外面は縦位および斜位の箆磨きを行なったのちに、脚部下半から裾部にかけて横ナデを施している。内面は横位の箆ナデのうちに横ナデを行なっている。胎土、焼成とともに良好で堅致であり、茶褐色を呈する。

#### 須恵器

##### 蓋坏（第9図15）

15（図版20—5）、全体の約3分の1ほどの破片である。全面にロクロ整形による横走痕がみられるが、底部付近は回転箆削りが行なわれている。内面もほぼ全面に横走痕がみられる。また底面には成形のさいの凹凸がみられる。胎土はきわめて良好であるが、焼成は悪く、軟弱である。淡青灰色を呈する。



0 10cm

第9図 A区2号住居跡出土遺物

### 3 第3号住居跡

この住居跡の北部は現在使用されている道跡の下に入り込むので全容を明らかにすることはできなかったが、東西辺は約5.45mである。東南隅には口径65cm×50cmほどで、深さ60cmの貯蔵穴らしい小豊穴が、東側の壁には焼土塊がみられ、遺物の散布状態と考えあわせて、かまどの痕跡と思われた。壁高は現在高で約15cmである。床面の精査にもかかわらず柱穴は確認できなかった。

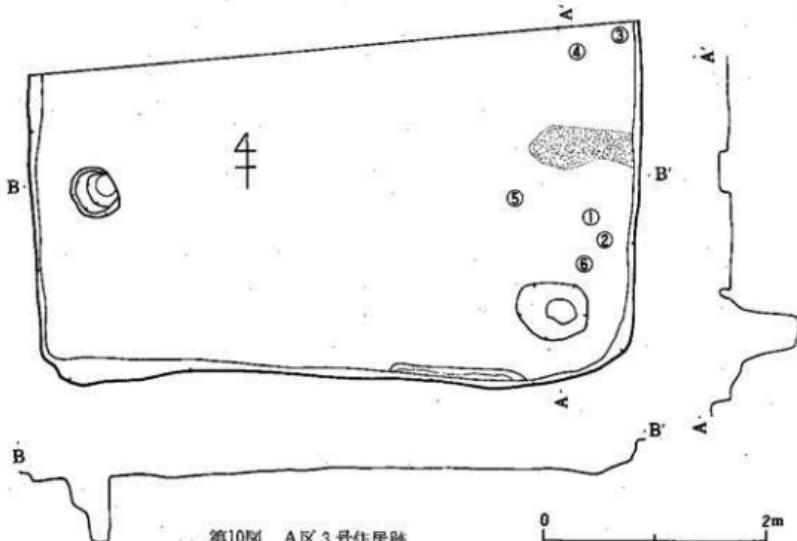
#### 第3号住居跡出土遺物

##### 変形土器（第11図1～3）

1、ほぼ完形である。外面は口縁部には横ナデが施こされているが、胴部は上半に斜位の箆ナデを行なったのちに下半に横位の箆ナデを施こしている。底部は削削りが行なわれている。内面は口縁部では斜位、胴部では斜位または横位、底面では円形の箆ナデがそれぞれ行なわれている。胎土は小石の混入が比較的多く不良であるが、焼成はきわめて良好で堅緻であり、赤褐色を呈する。

2（図版21—5）、ほぼ完形である。外面は器面の剥落が著しいが、口縁部には棒状工具によるナデ、底部周辺には縦位の削削りがそれぞれみられる。内面は口部縁には横ナデ頭部から底面にかけては横位の箆ナデが行なわれている。また底面には成形のさいの指頭による凹凸と思われる部分がみられる。胎土は小石の混入が若干みられるが、比較的良好である。色調は淡赤色を呈する。

3、口縁部の大部分と胴部の約2分の1を欠損する。外面は口縁部では縦位の箆ナデのうちに横ナデを行なっている。胴部は上半では縦位の箆ナデ、胴下部の輪積み痕と思われる段から下は斜位



第10図 A区3号住居跡

の箇ナデがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、脚部上半には斜位の箇ナデ、下半には横位の箇ナデが行なわれている。また頭部内面には最終成形（口縁部と肩部との接合）のさいの粘土を指頭で肩部におさえ付けたものと思われる痕跡がみられる。胎土は小石の混入が若干みられるが、比較的良好である。焼成も比較的良好である。色調は外面では黒褐色を呈するが、内面は淡黄色を呈し、底面には有機物の付着がみられる。

#### 环形土器（第II図4）

4（図版21—6），口縁部の約2分の1ほどを欠損する。口縁部と体部の境には沈線が一周する。外面は口縁部には横ナデ、体部には縦位の箇ナデが施されている。内面は口縁部には横ナデ、体部には底面を中心とする放射状の箇磨きが行なわれている。胎土は砂粒の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好であり、淡褐色を呈する。

#### 高环形土器（第II図5～10）

5（図版21—7），口縁部の約4分の1と脚部を欠損する。外面は斜位の箇削りのうちに口縁部に横ナデを行ない、そのうちに縦位の箇磨きを施している。内面は口縁部の横ナデのうちに箇磨きを行なっている。胎土は小石の混入が多く不良であり、焼成も悪く軟弱である。色調は明茶色を呈する。

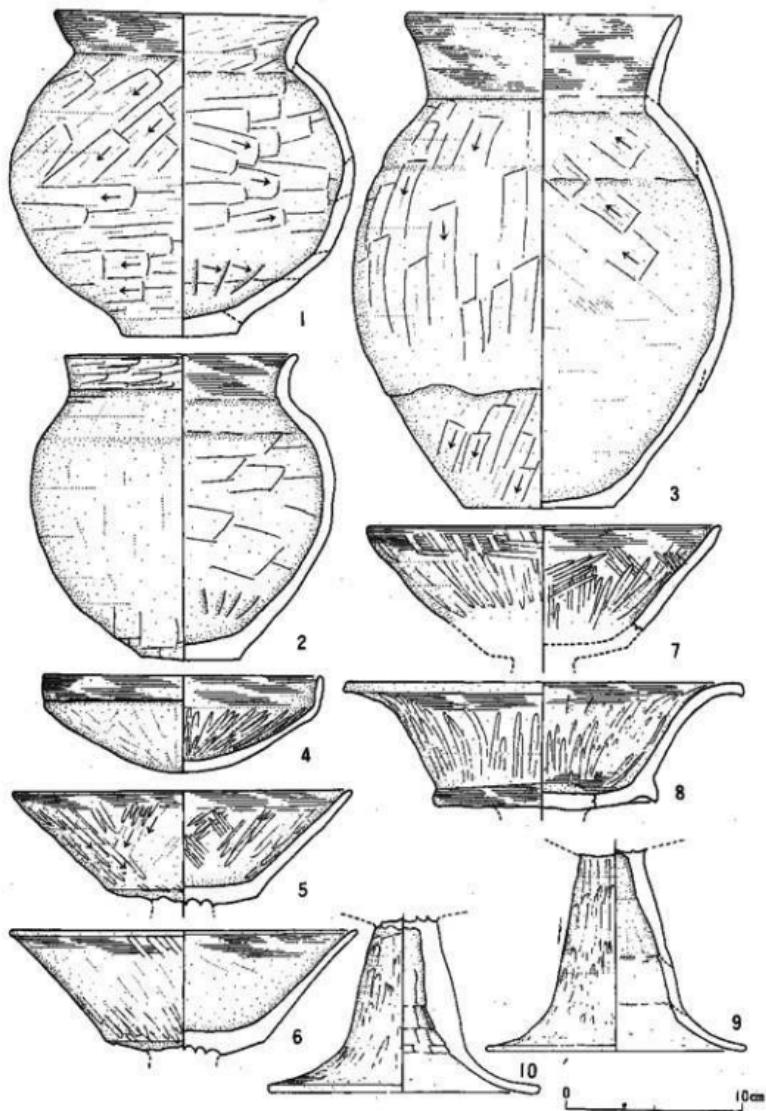
6（図版20—1），脚部を欠損する。外面は口縁部から腹までに斜位の箇磨きを施したのちに、口縁部には横ナデ、体部中位には斜位の箇ナデを行なっている。底面は器面の剥落のために整形痕は不明である。内面は口縁部の横ナデ痕以外は器面の剥落のために整形痕は残っていないが、一部に斜位の砂粒の移動痕がみられる。胎土は小石の混入が多く不良であり、焼成も悪く軟弱である。色調は明茶色を呈する。

7，环部の約3分の1ほどの破片である。内外ともに口縁部の横ナデのうちに全面に縦位および斜位の箇磨きを行なっている。胎土は比較的良好であるが、焼成は悪く軟弱であり、明茶褐色を呈している。

8（図版20—3），环部の底部中央および脚部を欠損する。外面は口縁部および体部と底部の境の突起に横ナデを行なったのちに、全体に縦位の箇磨きを施している。内面は横位の箇ナデのうちに口縁部と底面付近に横ナデを施し、そのうちに縦位の箇磨きを行なっている。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は良好であり、明黄褐色を呈している。

9（図版21—4），环部を欠損する。外面は幅の狭い箇削りのうちに裾部に横ナデを施し、そのうちに縦位の箇磨きを行なっている。内面は部分的な横位の箇ナデのうちに裾部に横ナデを施している。胎土は小石の混入がわずかにみられる程度で、普通である。焼成は比較的良好であり、明茶色を呈する。

10（図版21—8），环部を欠損する。外面は全面的な縦位の箇削りのうちに裾部に横ナデを施し、そのうちに縦位の箇磨きを行なっている。内面は巻き上げ成形痕が明瞭に残り、ほとんど整形が行なわれていないが、裾部にのみ横ナデが行なわれている。胎土、焼成ともに比較的良好であり、明茶褐色を呈する。



第11図 A区3号住居跡出土遺物

#### 4 第4号住居跡群と5号住居跡

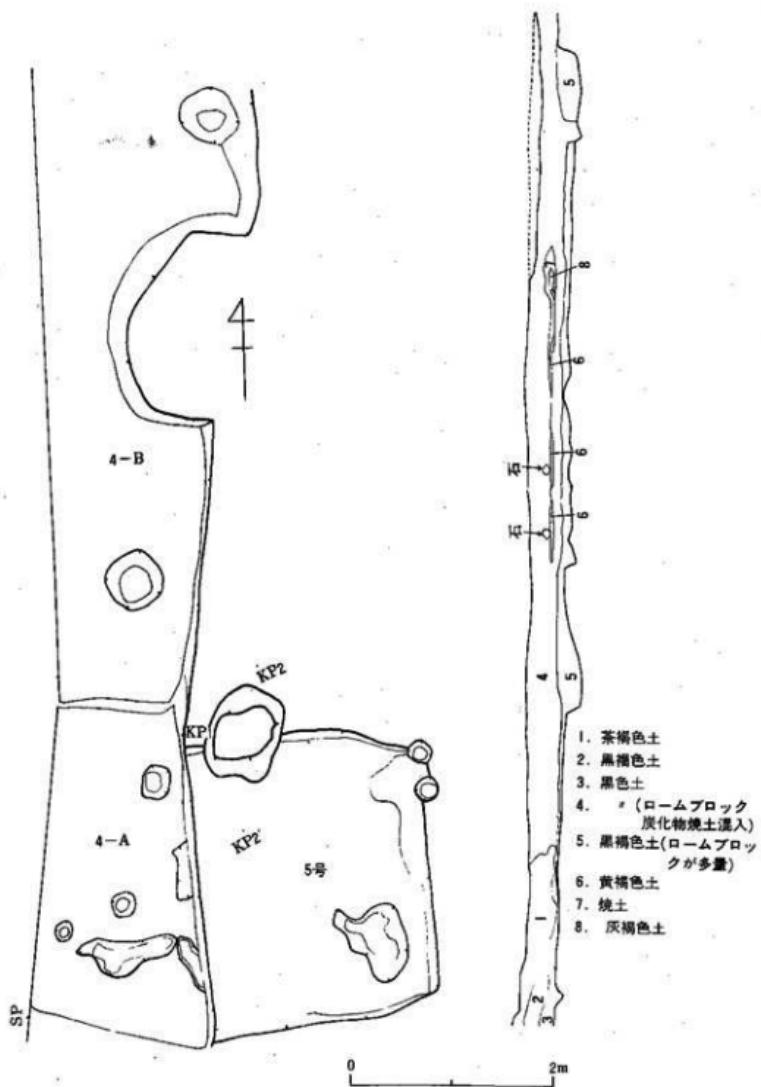
本住居跡は3軒の住居の切り合いとして検出されて、第12図のような関係になる。まず5号とAであるが、床面をみると両者間には段差があり、5号がAより高い。また、Aの床面上には5号の貼り床がないことから、5号住居跡をA住居が切ったことになり、Aが新しいものと考えられる。

次にAとBであるが、切り合いが第12図の両者接点の部分のように微妙である。まず、Aが新しければポイントの部分は人工的な壁になるはずであるが、現実的には自然である。また、Bが新しいと考えると南壁に不自然になる。この両者の時期を決定づけるような遺物もないので、新旧関係を決定することは大変に難しいが、現場での感じからだけでいえば、AがBを切ったように思われる。しかし、これだけでは5号とBとの関係は不明であるといわざるを得ない。

個々の住居跡についてみると、まず5号であるが西側をAに切られているので全容を明らかにすることはできないが、北壁のは、中央部にかまどをもつ、一辺が約3mほどの正方形の小型の住居跡である。東南隅に近く、小窓穴があるが、柱穴かどうかは不明である。遺物の出土は若干の破片しかしない。

Aは西側が耕作者との関係から完掘できなかったので、これも全容を明らかにしえず、しかも北側の壁が、前述のとおりBを切ったものとすれば、人工的なものになるのであるが、発掘で明らかにできなかつたので、規模そのものも不明である。なお、かまどがあったとすれば東壁ではなく、北側と思われる。

Bもまた西側の調査ができないので、全容を明らかにすることはできない。かまどは東壁にある。



第12図 A区 4号住居跡群と5号住居跡

#### 第4—B号住居跡出土遺物

##### 変形土器 (第13図 1, 2, 3)

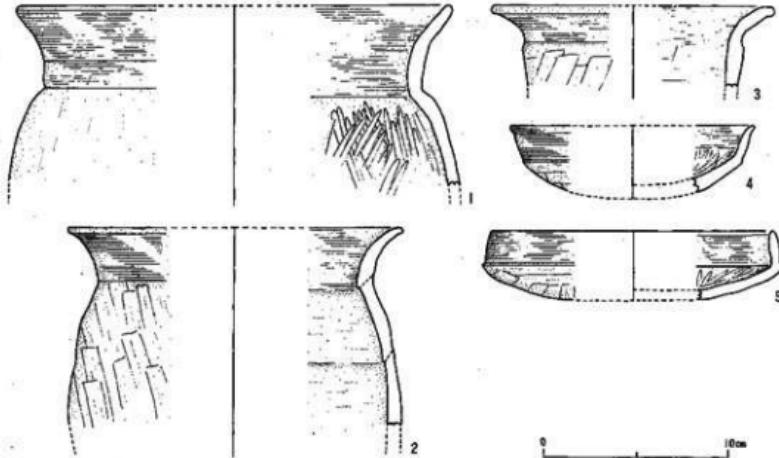
1, 口縁部から肩部にかけての小破片である。外面は肩部から胴部にかけての縱位の箆ナデのうちに口縁部に横ナデを施している。内面は口縁部には横ナデ、肩部以下には横位の箆ナデのうちに斜位および縱位の箆削きをそれぞれ行なっている。胎土は小石の混入があり良好ではないが、焼成は普通であり淡黄褐色を呈する。

2, 口縁部から胴部上半にかけての破片である。外面は口縁部には横ナデ、肩部から胴部にかけては縱位の箆削りがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部の横ナデのうちに胴部上半に横位の箆ナデを施している。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好で堅緻である。淡褐色を呈する。

3, 口縁部から肩部にかけての小破片である。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部は外面では縱位の箆削り、内面は横位の箆ナデが行なわれている。胎土、焼成とともに普通であり、淡黄褐色を呈する。

##### 环形土器 (第13図 5)

5, 全体の約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデ、体部は円状の箆削りのうちに一方向の箆削りが施されている。内面は口縁部には横ナデ、体部には放射状の箆削きがそれぞれ行なわれている。胎土、焼成とともにきわめて良好であり、黒褐色を呈している。

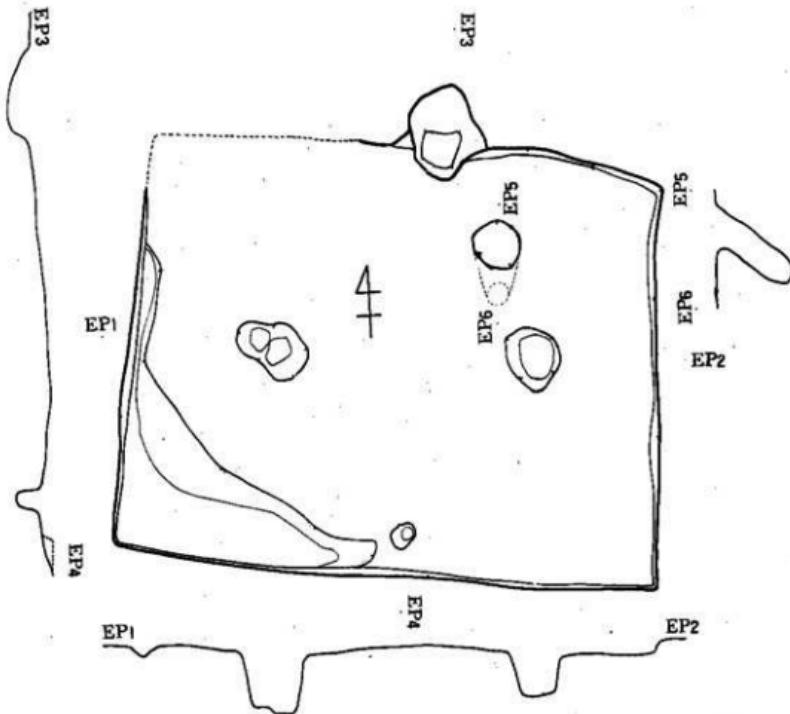


第13図 A区第4—B号およびA区8号住居跡出土遺物

(1, 2, 3, 4, 5 A区4—B, 4, A区8号).

## 5 第6号住居跡

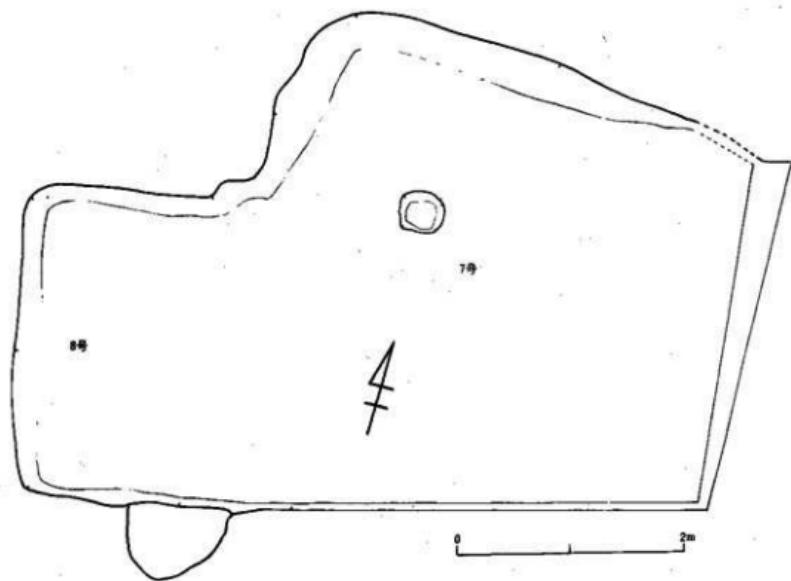
A区のはとんど中央に検出された。ロームにさほど深く掘り込まれていなかったので、ブルドーザーにより壁のほとんどを削平されていて10cmを残すにすぎない。規模は東西辺4.6m、南北辺3.7mで、北壁のはとんど中央部にかまどをもつ。床面はあまり固く踏み締められていない。また、床面のはと中央、炉をはさんで対称の位置に2個の柱穴がある。おそらく棟持ち柱としての柱穴と思われる。遺物はブルドーザーの削平のせいもあってか、ほとんどが破片であった。



第14図 A区 6号住居跡

## 6 第7号住居跡

第7号住居跡は第1号住居跡を切って構築されている。南側が耕作者の関係もあって調査できず、全容を明らかにすることはできない。床面は軟弱で、遺物の出土もほとんどなく、時期や規模は不明である。



第15図 A区 7, 8号住居跡

## 7 第8号住居跡

第8号住居跡は第7号住居跡と切り合いの関係で検出されたが、覆土の状態が悪く、新旧関係の把握はできなかった。

規模は西辺が2.8mで他は不明である。第7号住居跡の西辺と切り合う付近に、第8号住居跡の北辺が外に膨らむ部分があり、おそらく、かまどを設定する場所であったと思われるが、焼土の痕跡はなかった。

床面は軟弱で、踏み固められていない。また、柱穴等の検出もない。遺物も破片程度であった。

### 第8号住居跡出土遺物

#### 坪形土器（第13図4）

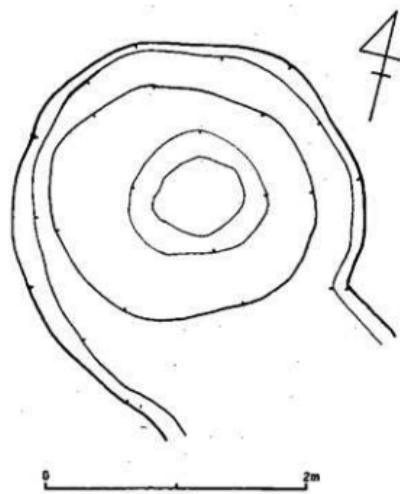
4、全体の約5分の1ほどの小破片である。外面は口縁部には横ナデ、体部には横位の箇削りがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、体部には放射状の箇磨きがそれぞれ施こされている。口縁部には輪積み成形痕が一段みられる。胎土は比較的良好であり、焼成も普通である。色調は褐色を呈する。

## 8 井戸跡

A区において、2基の井戸が検出されている。

第4号住居跡を第8号住居跡のほぼ中央付近の第1号井戸は0--4をロート状に掘り込んでいる。まず、ローム上面を径2.7mの円形に、深さ20cmほど掘り込み、次に径2mの円形に60cmほど掘り込む。さらに径1mほどの円形をつくり、一気に掘り下げている。深さはロームの上面から1.8mまで発掘したが、中が狭いためそれ以下を明らかにすることはできなかった。このため、井戸底からの出土遺物を得ることができず、時期決定もすることができない。また、ローム上面の最初の掘り込みの東南はそのまま東西方面に幅2mで流れているが意図的なものであろうか。なお、この井戸の上部の枠や上屋のための柱穴等は検出されなかった。

第5号住居跡の北側の第2号井戸跡はローム上面での直径が1mで、第1号住居跡より小規模であるが、構築の方法は同様である。深さは1.5mほどまででそれ以下を発掘できなかったので不明である。



第16図 A区1号井戸跡

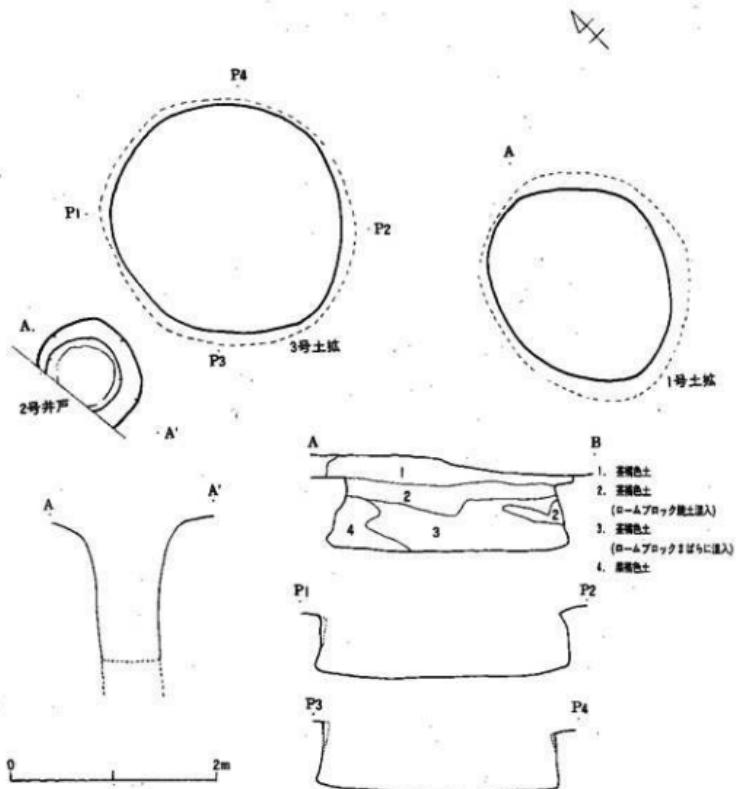
## 9 土 壤

A区には3基の土壙が検出された。1, 3号は円形の開口部をもち、底径が口径を上まわる型のものである。

第1号土壙は第2号住居跡を切った形で検出された。口径は $2m \times 1.0m$ の長円形、底径 $2.3m \times 2m$ の長円形である。壁面は金属器で削られており、肌は滑らかである。深さは $0.9m$ で、底面も平滑である。

第3号土壙は第2号井戸跡のすぐ東側にある。構築方法は第1号土壙と同様であり、口径 $2.3m$ 、底径 $2.5m$ の円形である。深さは $70cm$ で、底面は平滑である。遺物の出土はない。

第2号土壙は第1号井戸の北側に検出された。口径が $2.1m$ 、底径が $1.8m$ で、1, 3号土壙と異



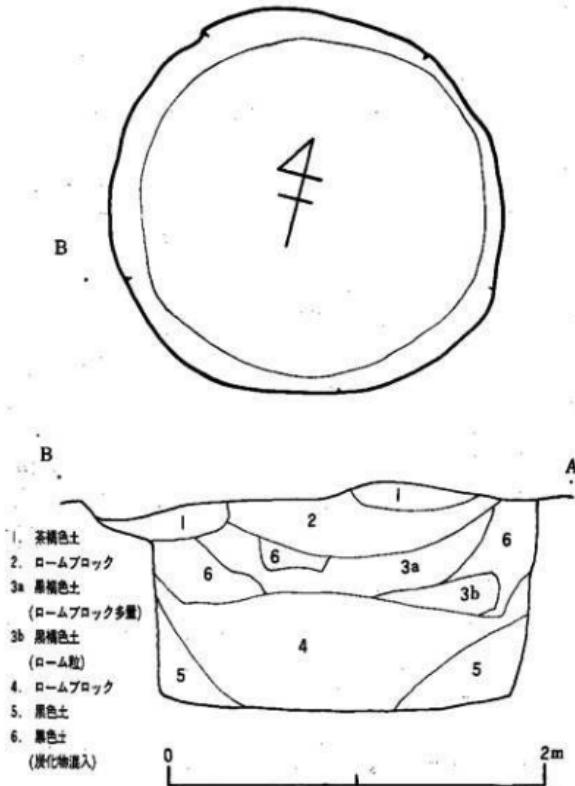
第17図 A区 1号土壙、3号土壙 2号井戸跡

なり、底径が口径を上まわらないが、構築の方法はまったく同様である。深さは1.2mで、やはり遺物の出土はなかった。

#### 第1号土壤出土遺物

##### 高坏形土器（第9図14）

14. 土壤覆土の遺物である。高坏形土器の脚部と思われる。外面は全面的な継ぎのうちに裾部に横ナデを施している。内面はほぼ全面にナデが施されている。胎土は小石の混入が若干みられるが、比較的良好である。焼成も良好で堅緻である。色調は淡茶色を呈する。箇所に穿孔がみられる。

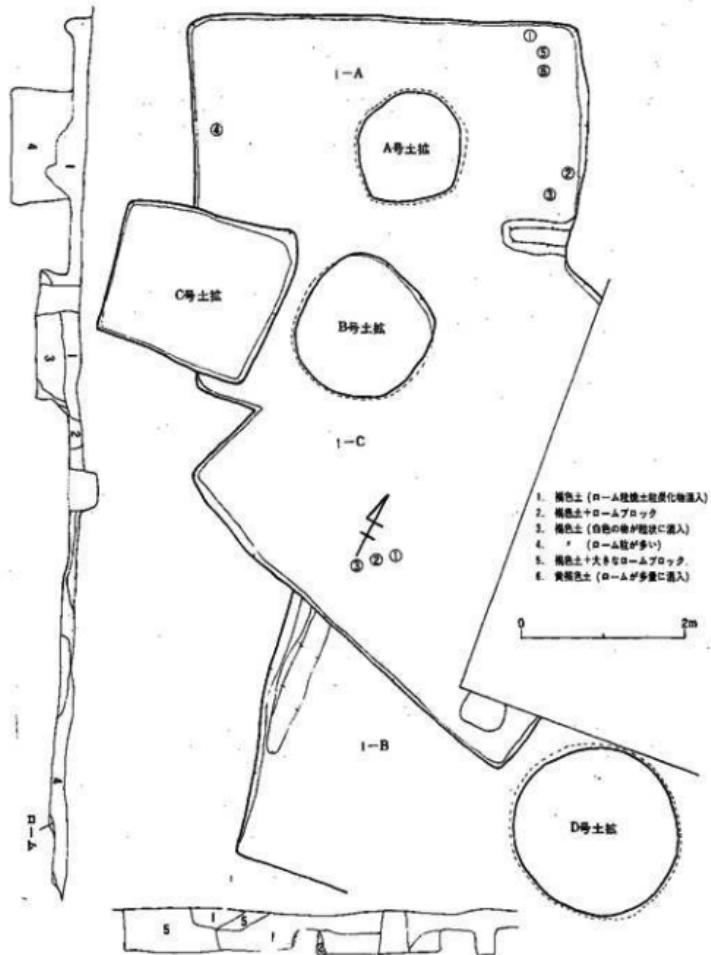


第18図 A区 2号土壤

[3] B区の遺構と遺物について

1 第1号住居跡群(第19, 20図)

B区の第1号住居跡は3軒が切り合い、円形の平面形の土壙が3基、方形の平面形の土壙が1基



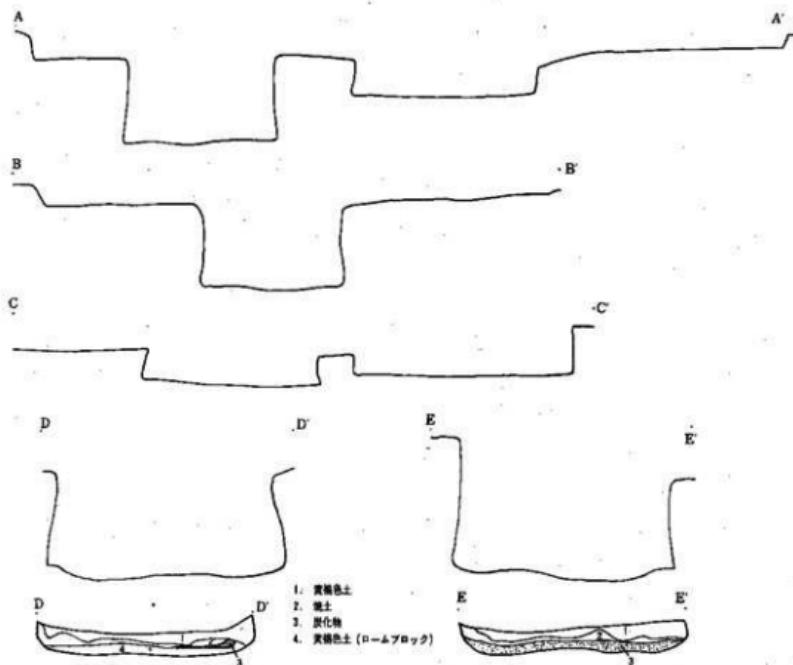
第19図 B区 1号住居跡群

からんで非常に複雑である。

住居跡はまず、Aが出土遺物から和泉期の所産で古く、これをCが切っている。このCに切られた時点をAのかまどの右袖が壊されている。規模は東西辺が4.8m、南北辺が4.6mのほぼ正方形である。前述のとおり東壁にかまどをもつ。床面は比較的堅く、北隅に甕などの遺物が多い。柱穴は発見できなかった。

BはAを切って構築しているが、南側がブルドーザーで破壊され、東側がプレハブハウスの下に入り込んでいるので規模その他細かい点は不明であるが、南と北にわずかに残った壁を測ると5.2mほどである。床面もそれほど堅くない。かまどは東壁にあったものと思われ、調査できなかった。

Cはこの第1号住居跡群の南端にあり、ブルドーザーの被害を受けて、規模等は不明である。B住居と切り合っている。新旧関係は平面では不明であるが、セクション図でみるとB住居が埋没したあとに壁をつくるための土を意図的に埋めこんでいる状態がみられるので、Cの方が新しいと思われる。



第20図 B区1号住居跡断面図

### 第1-A号住居跡出土遺物

#### 壺形土器（第21図1～4）

1（図版22-1），胴部下半を欠損する。外面は口縁部には横ナデが施こされているが、輪積み成形痕が一段残る。肩部から胴下部にかけては横位の箆削りのうちに斜位の箆ナデを粗く施こしている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデのうちに縦位の箆ナデがそれぞれ施こされている。また内面には四段の輪積み成形痕が残る。胎土、焼成ともきわめて良好であり、全体に明茶色を呈する。

2，胴部下半を欠損する。外面は口縁部には横ナデが施こされている。胴部は全面に縦位の箆ナデを施こしたのちに上半にのみ斜位の箆ナデを行なっている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデを施こしている。また四段の輪積み成形痕もみられる。胎土、焼成ともに良好であり堅く焼きしまっている。全体に褐色を呈する。

3（図版22-2），口縁部から胴部にかけての約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデ、肩部から胴部にかけては縦位および斜位の箆ナデのうちに部分的に箆磨きをそれぞれ施こしている。内面は器面の剥落が落しいが、口縁部の横ナデ、肩部から胴部にかけての横位の箆ナデが若干みられる。胎土は小石の混入がわずかにみられるが比較的良好である。焼成も良好であり、褐色を呈する。

#### 壺形土器（第21図4）

4，口縁部から底部にかけての約5分の1ほどを欠損する。外面は口縁部には横ナデ、体部には横位の箆削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、体部には横位の箆ナデのうちに箆磨きを行なっている。胎土、焼成ともに比較的良好であり、赤褐色を呈する。

#### 高壺形土器（第21図5、6）

5、6，二者ともに壺部のみである。外面は口縁部から腹までに横位の箆ナデを行なったのちに口縁部に横ナデを施こしている。腹付近では体部の粘土を底部になで付けている。内面は口縁部には横ナデ、体部から底面にかけては箆磨きを施こしたものと思われるが、器面の荒れが著しく明瞭ではない。胎土、焼成ともにきわめて良好であり、淡褐色を呈する。

### 第1-A号土壤出土遺物

#### 壺形土器（第21図7）

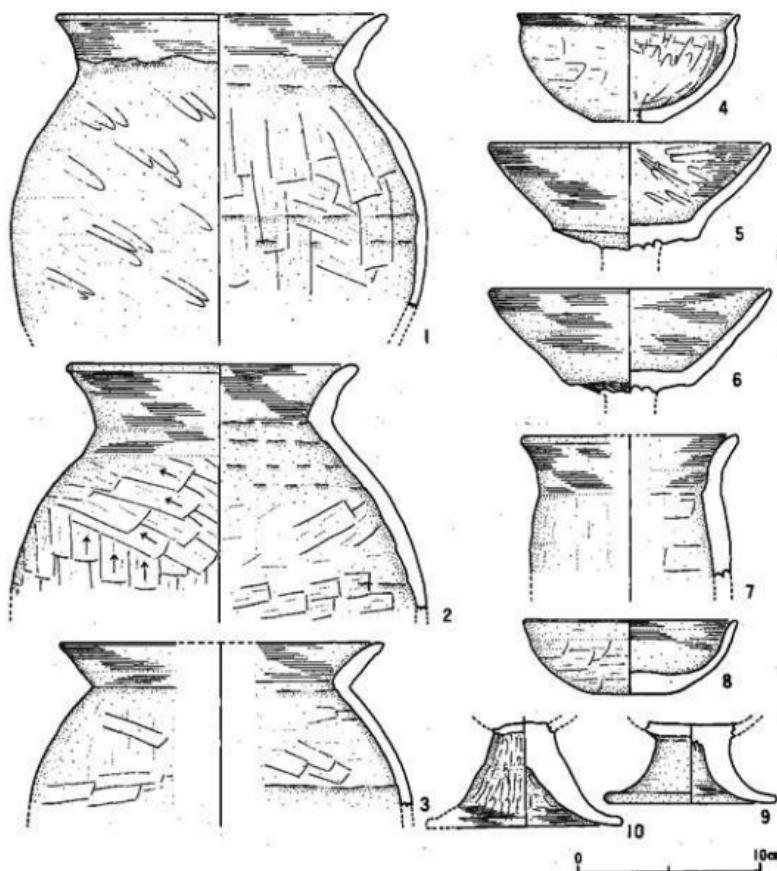
7，口縁部から胴部にかけての約4分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデが行なわれているが、頸部から胴部にかけては器面の荒れが著しく整形痕は不明であるが、縦位の砂粒の移動痕がみられる。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデがそれぞれ行なわれている。胎土は小石の混入がわずかにみられる程度で比較的良好である。焼成も良好であり、褐色を呈する。

#### 壺形土器（第22図8）

8、約2分の1ほどの破片である。外面にはほぼ全面的な横位の箝削りが行なわれている。内面はほぼ全面にナデが行なわれている。胎土はわずかに砂粒の混入がみられる程度で、比較的良好である。焼成も比較的良好であり、淡黄褐色を呈する。

高环形土器（第21図9）

9（図版22—4）、脚部のみある。外面は両面的な縦位の箝磨きのちに裾部に横ナデを施こし



第21図 B区第1—A号住居跡および第1—A号土壤出土遺物

(1~6 第1~A号住、7~10 1~A号土壤)

ている。内面は横位の箇削りのうちに横位の箇ナデを行ない、そのうちに脛部に横ナデを施こしている。胎土、焼成ともに良好であり、淡茶色を呈する。

10. 脚部のみである。外面は器面の荒れが著しく、整形痕は不明である。内面は最奥部に粘土をえぐり取った箇の痕跡がみられるが、その他は器面の磨耗のために不明である。胎土は良好であるが、焼成は粗悪で軟弱である。色調は赤茶色を呈する。

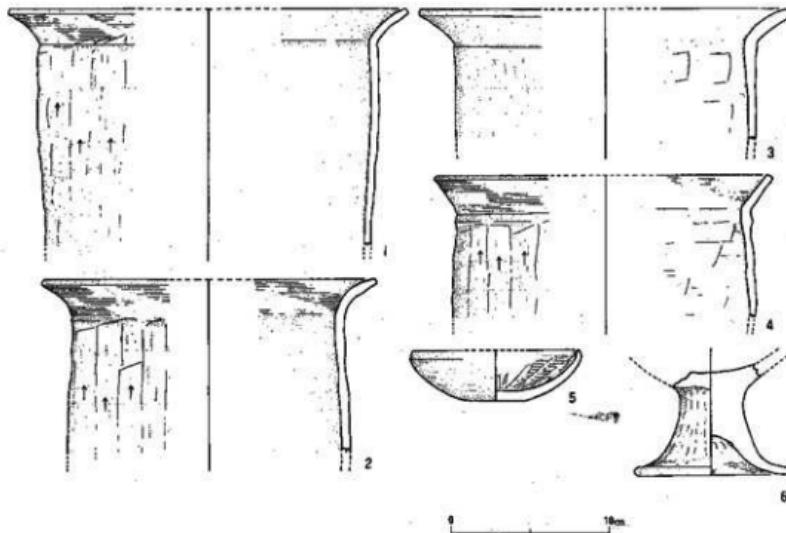
#### 第1—B号住居跡出土遺物

##### 甕形土器（第22図1～4）

1（図版22—5），床面出土であるが、全体の約3分の1ほどの破片である。外面は脣部の縦位の箇削りのうちに口縁部の横ナデが行なわれている。内面は口縁部、脣部とともにナデ仕上げが行なわれている。胎土は砂の混入が目立つ。焼成は良好であり、外面は褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

2，覆土の遺物で、全体の約5分の1ほどの破片である。外面は脣部の縦位の箇削りのうちに口縁部の横ナデが施こされている。内面は口縁部には横ナデ、脣部には箇ナデが施こされている。胎土は砂の混入が目立つが、良好である。焼成は良好で淡黄色を呈する。

3，覆土の遺物で、全体の約5分の1ほどの破片である。内外面ともに器面の荒れが著しく、整形痕は確認できないが、外面には縦位の砂粒の移動痕がみられる。内面は横位の箇ナデ痕がわずかにみられる。胎土は砂の混入が多いが良好である。焼成は普通であり、明茶色を呈する。



第22図 第1—B号住居跡出土遺物

4, 覆土の遺物であり、口縁部から胴部にかけての約3分の1ほどの破片である。外面は肩部から胴部にかけての縫合の箇所のうちに口縁部に横ナデを行なっている。肩部にみられる稜は口縁部への横ナデによって生じたものである。内面は口縁部の整形痕は確認できないが、胴部には横位の箇所ナデが行なわれたことが確認できる。胎土は砂質で精撰されており、きわめて良好である。焼成は普通であり、淡黄褐色を呈する。

#### 坏形土器（第22図5）

5, 覆土の遺物であり、全体の約3分の1ほどの破片である。外面は全面に横位の箇所削りが行なわれたものと思われる。内面は全面に円状の擦磨きを施したのちに底面を中心とする放射状の擦磨を行なっている。胎土、焼成とともに良好で、淡灰色を呈する。

#### 高坏形土器（第22図6）

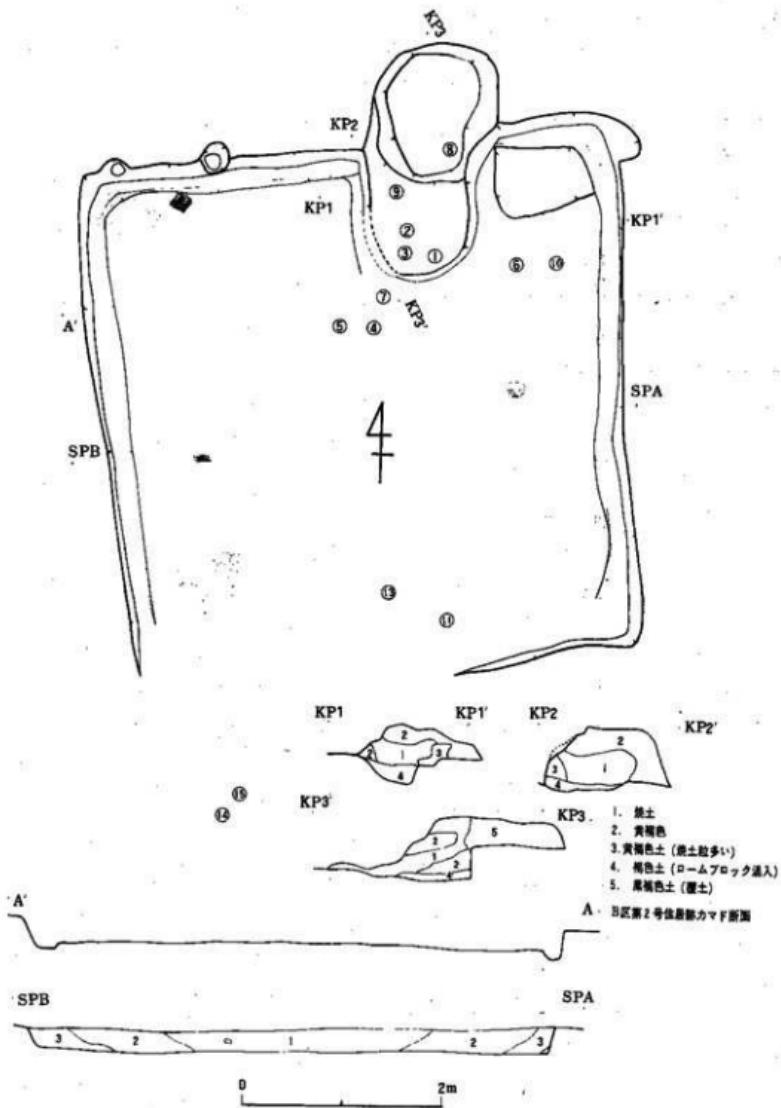
6, 覆土の遺物であり、坏部を欠損する。外面は縫合の箇所のうちに胴部に横ナデを施してある。内面には放射状の箇所ナデ痕と胴部の横ナデがみられる。胎土は良好であるが、焼成は悪くともろい。色調は淡赤色を呈する。

## 2 第2号住居跡

第2号住居跡も南西隅で他の住居と切り合っているが、南側におけるブルドーザーの削半が著しく、そのうえ生活道路の下に入り込むためにその関係を把握することがむずかしかった。

第2号住居の規模は東西辺5.2m、南北辺もほぼ5.2mの方形である。長軸の壁を芯にしたかまどは北壁の中央やや東寄りにある。壁に沿うて周溝がめぐるが南壁がほとんどないので、南側のようすは判然としないが、東南隅に周溝がカーブをしていることから考えると周溝は四周をめぐっていたものと思われる。床面はそれほど堅く感じられなかった。また、柱穴の存在は不明である。

遺物はかまどの周辺に多かったが、破片は全体に散在する。この中で南部より須恵器の高坏が発見されていることは注目される。



第23図 B区2号住居跡

## 第2号住居跡出土遺物

### 変形土器（第24図1～6）

1（図版23—1），床面出土の完形品である。外面は胴部に斜位の窓削りを行なったのちに口縁部に横ナデを施している。胴部下半には焼土の付着が著しい。内面は口縁部には横ナデ，胴部には横位の窓ナデが行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良であるが，焼成は普通であり，黄褐色を呈する。

2（図版23—2），床面出土の完形品であるが，焼成時か使用時かに裂け目が生じ，そのままの状態で固定しているためにきわめていびつな状態である。内面は口縁部には横ナデが施されているが，胴部には縦位の窓削りのうちに縦位の窓磨きが施されている。内面は口縁部には横ナデ，胴部には横位の窓ナデが底面まで施されている。胎土は小石の混入が多く不良であるが，焼成は普通であり，淡褐色および淡黄色を呈する。

3（図版23—3），床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデ，胴部には縦位または斜位の窓削りが施されている。胴部下半には焼土の付着が著しい。底部には木葉痕がみられる。内面は口縁部には横ナデが，胴部には横位の窓ナデが部分的にみられるが，他の部分はきれいに整形されている。胎土は小石の混入が多く粗悪であるが，焼成は普通であり，淡赤色を呈する。

4，床面出土であるが，口縁部から胴部上半にかけての約3分の1ほどの破片である。外面は肩部以下に縦位の窓削りを施したのちに斜位の窓ナデを行ない，そのうちに口縁部に横ナデを行なっている。内面には口縁部の横ナデ痕以外はみられない。胴部には巻き上げ痕が部分的にみられる。胎土，焼成ともに普通であり，明茶色を呈する。

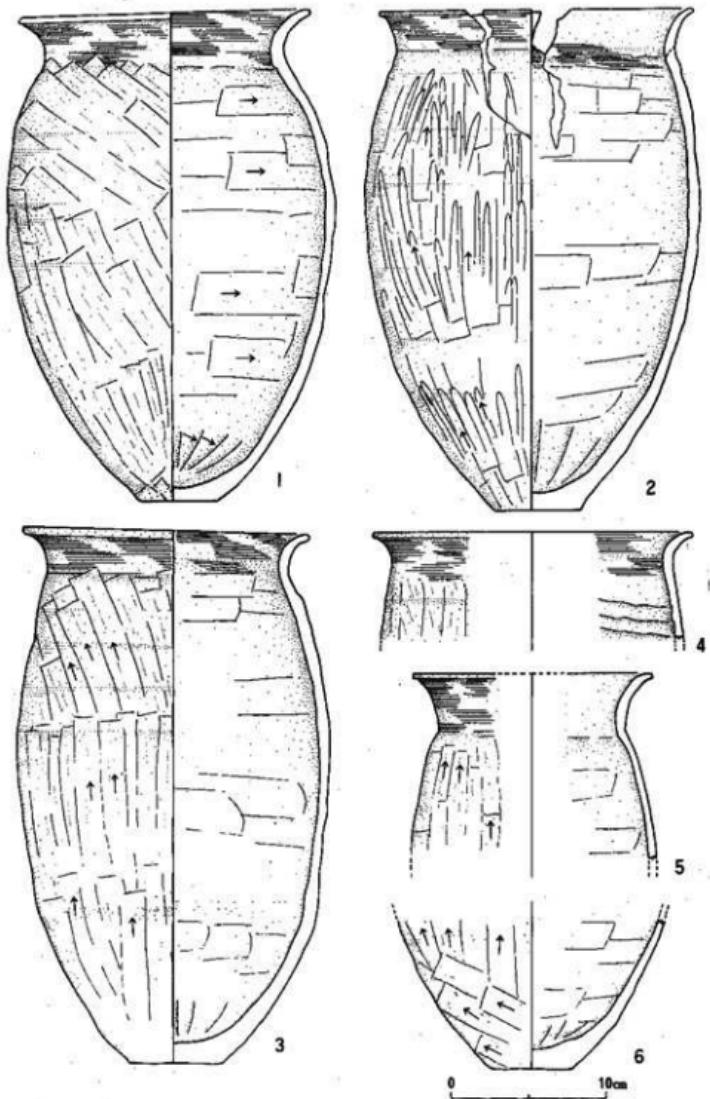
5，床面出土の破片である。外面は口縁部には横ナデが，肩部以下には縦位の窓削りが行なわれている。内面は器面の剥落が著しく，整形痕は不明である。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も不良であり，淡赤色ないし淡褐色を呈する。

6，床面出土であるが，胴下半部のみである。外面は全体に縦位の窓削りを行なったのちに底部周辺に斜位の窓削りを施している。底部には木葉痕が残る。内面には横位窓ナデの痕跡がみられる。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪く，淡赤色を呈する。

### 小形変形土器（第25図7～9）

7（図版22—7），床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデ，胴部上半には横位窓削り，胴部下半には縦位の窓削りがそれぞれ施されている。内面は口縁部には横ナデが施されているが，胴部から底面にかけては横位の窓ナデが施されている。胎土は砂粒の混入が多く不良であり，焼成も粗悪であり，全体に淡灰褐色を呈する。

8（図版23—4），床面出土であるが，口縁部の大半を欠損する。外面は器面の剥落が著しく，口縁部には整形痕はみられない。胴部では横位の砂粒の移動痕がみられるのみである。底部周辺には斜位の窓削りの痕跡がわずかにみられる。底部には木葉痕が明瞭に残る。内面はほぼ全面に横位



第24図 B区2号住居跡出土遺物

の施ナデが行なわれているが、肩部のナデの痕跡は胸部のそれとはいくぶん様相が異なっており、工具の違いを感じさせる。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も粗悪であり、もうい。色調は外側では淡桃色を呈するが内面は黒色を呈する。

9(図版24-1)、床面出土であるが、口縁部にかけての約3分の1ほどを欠損する。外面は口縁部には横ナデ、胸部には斜位の箋削りが行なわれている。内面は口縁部には目の粗い横ナデ、胸部には横位の箋ナデがそれぞれ行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良であり、焼成も悪く外側の磨耗が著しい。淡黄褐色を呈する。

#### 坪形土器(第25図10~12)

10(図版24-2)、床面出土で、全体の約4分の1ほどを欠損する。外面は稜以下全面に横位の箋削りを行なったのちに、口縁部に横ナデを施している。内面は口縁部には横ナデ、体部にはナデが施されている。胎土、焼成ともに良好であり、褐色を呈する。

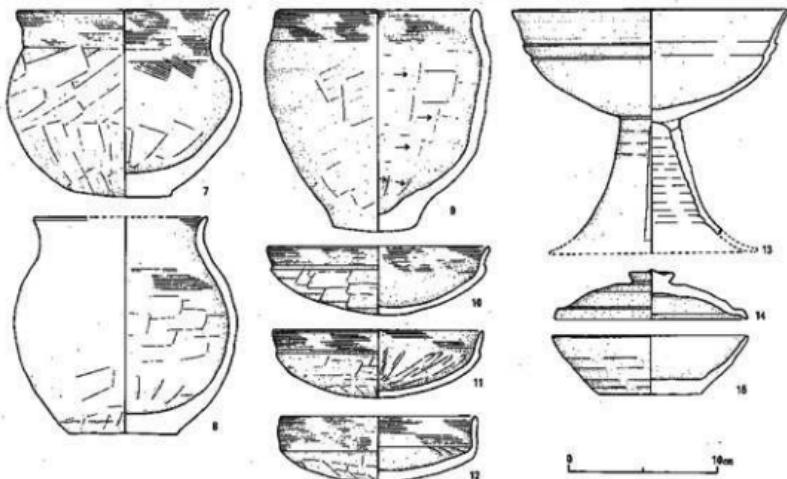
11、床面出土で、全体の約2分の1ほどを欠損する。外面は口縁部には横ナデ、稜以下は横位および斜位の箋削りが行なわれている。胎土、焼成ともに良好であり、淡黄褐色を呈する。

12(図版24-3)、床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデが、体部には乱雜な箋削りが行なわれている。内面は口縁部、体部ともにナデ仕上げが施されている。胎土は砂粒の混入がいくぶんみられるが、比較的良好である。焼成も良好であり、茶色を呈する。

#### 須恵器

##### 高坪形土器(第25図13)

13(図版24-6)、床面出土であるが、坪部の約4分の1と脚部の約3分の1ほどしか残っていない



第25図 B区第2号住居跡出土遺物

ない。外面は坏部、脚部ともに横走痕がみられる。脚部にはわずかな稜が3～4段ほどみられる。内面は坏部ではきわめてよく整形されており、横走痕のみがみられる。脚部には成形時の段が多数みられる。脚部の窓は三角形で、三箇所にあけられていたものと思われる。窓は外側から穿いている。胎土はわずかに小石の混入がみられる程度で、良好である。焼成も良好であり、青灰色を呈する。

#### 蓋

14(図版24—4)、第2号住居址の南外側から15とともに出土したものである。外面は天井部に二度の右廻転による箝削りが施されている。内面には成形のさいの凹凸が3段ほどみられる。内外ともにロクロ横走痕が全面にみられる。胎土は精撰されており良好であるが、焼成が不良のため軟弱である。灰色を呈する。

#### 坏形土器(第25図15)

15(図版24—5)、14とともに第2号住居址の南外側から出土したものである。全体の約2分の1ほどを欠損する。外面には成形のさいの4段の凹凸がみられるほか、内外面ともにロクロ成形による横走痕がみられる。底部には糸切り痕が残るが、磨耗が著しい。胎土は精撰されており良好であるが、焼成が悪く軟弱である。全体に灰色を呈する。

### 3 第3号住居跡群

今回調査したB区の最西端にある住居群で、4軒の切り合いと1基の円形土壙がある。

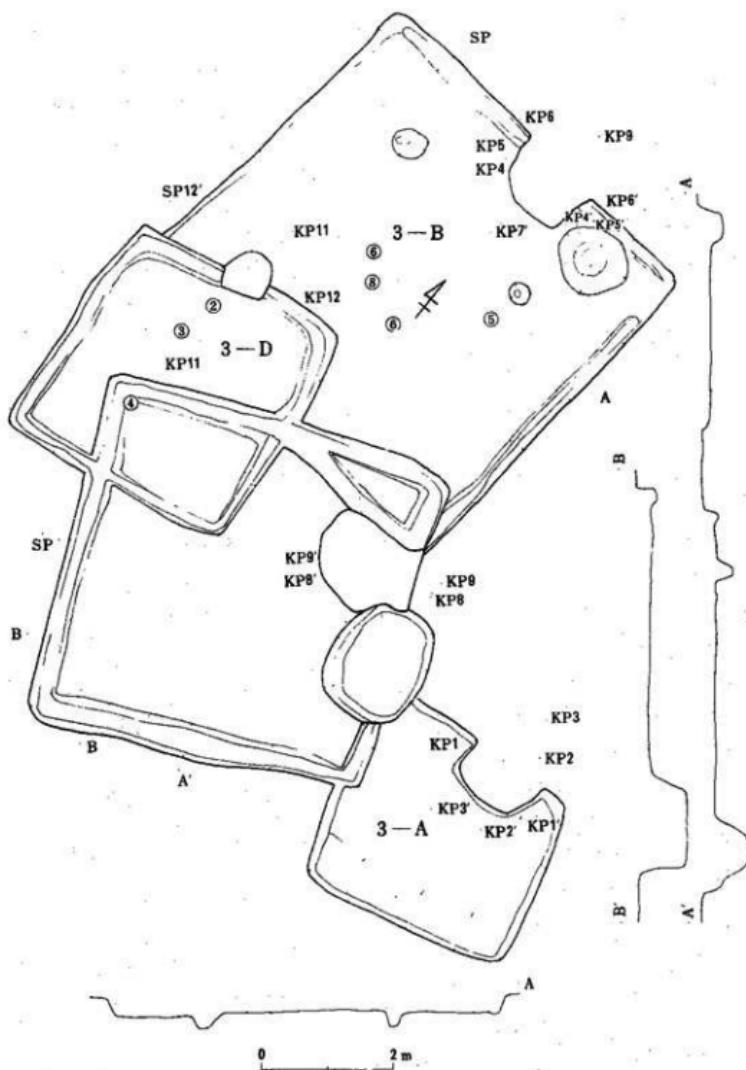
まずCとBとが切り合うが、新旧関係はCの東壁を破壊しており、かつCの南壁の存在も不明であるためCが古いことがわかる。Cの規模は東西辺が6mであるが、南北辺は南壁がBとDにより破壊されているので不明である。北壁中央やや東寄りにかまだがあり、東北隅には貯蔵穴がみられる。北壁と東壁に沿って溝がみられるが西壁はない。東北隅と西北隅に近く2個の柱穴がある。床面は比較的しっかりとおり、全体的に遺物が散在している。

BはまたAとDおよび土壙により切られている。規模は四角をめぐる周溝により知る以外はないが、それによれば東西辺が約5.2m、南北辺が約5.4mで、かまだが東壁やや北寄りにある。床面はあまり踏みしめられたようではなく、柱穴もまた不明である。

次にAとDの関係は遺物が少ないとあって不明であるが、規模や構築のしかたなどはよく似ている。

まずAは東西辺3.5m、南北辺3.2mである。かまだは北壁の東側にある。床面の構築は南側のロームを削ったため落ち込んだ感じになるので、ロームと黒色土を混入させた土で貼り床的な床面としている。

Dは東西辺が約3.7m、南北辺が3.6mで、かまだが北壁ほぼ中央にある。床面はあまり堅くない。Aと同様にほとんど遺物はない。



第26図 B区 3号住居跡群

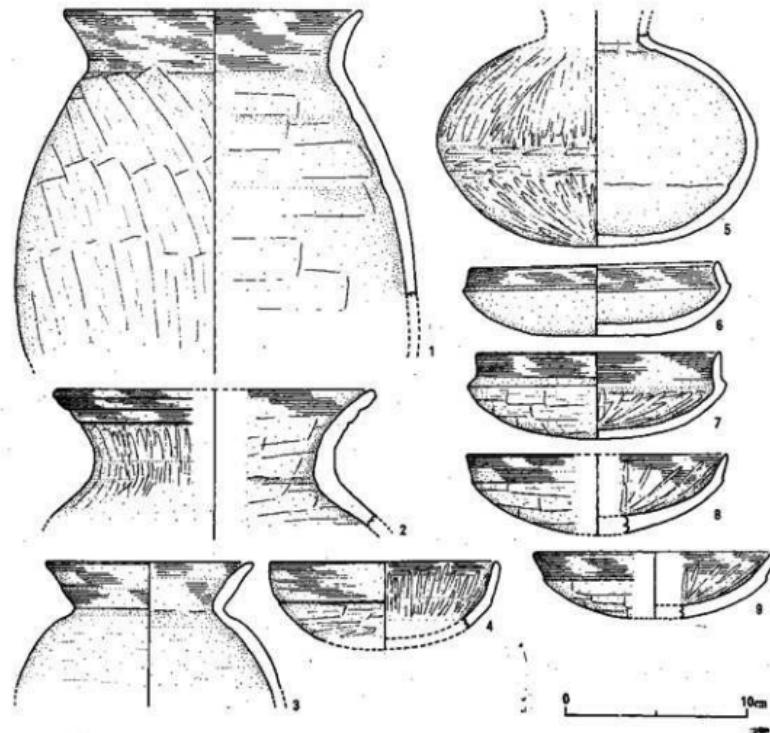
第3—B号住居跡出土遺物

壺形土器（第27図1）

1（図版24—7），胴下半部を欠損する。外は肩部以下に斜位の箆削りを行なったのちに口縁部に横ナデを施している。内面は口縁部には横ナデ，肩部以下には横位の箆ナデを行なっている。胎土，焼成ともに良好であり，外面は淡茶褐色，内面は黒褐色を呈する。

壺形土器（第27図2）

2（図版25—1），床面出土の破片である。外部は口縁面に3本の沈線がみられ，3本目の沈線まで横ナデが行なわれている。3本目の沈線から肩部にかけては粗い継位の箆磨きが施こされている。



第27図 B区第3—B号およびB区第3—C号住居跡出土遺物

(1～4, B区3—B号住, 6～9, B区3—C号住)

る。内面は口縁部には横ナデ、頸部から肩部にかけては横位の笠磨きが行なわれている。胎土、焼成とともに良好であり、黄褐色を呈する。

3、覆土の遺物である。口縁部から頸部にかけては横ナデが、頸部には横位の笠削りがそれぞれ施されている。内面は口縁部には横ナデ、肩部以下には横位の笠磨きが行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は良好であり赤褐色を呈する。

#### 壺形土器（第27図4）

4（図版25—2）、カマドの焼土中からの出土である。底部を欠損する。口縁部と体部の境に沈線がまわっている。外面は口縁部には横ナデが、沈線以下には横位の笠削りがそれぞれ施されている。内面は口縁部に横ナデを施したのちに体部に放射状の笠磨きを行なっている。胎土、焼成ともに良好であり、赤褐色を呈する。

#### 第3—C号住居跡出土遺物

##### 壺形土器（第27図5）

5（図版24—8）、床面出土であるが、頸部から上を欠損する。外面は肩部から胸部上半までと胸部下半から底部までは継位の、胸部中位では横位の笠磨きがそれぞれ施されている。内面は整形痕はみられないが、肩部付近と胸部下位に輪積み成形の痕跡がみられる。胎土、焼成ともに良好であり、赤褐色を呈する。

##### 壺形土器（第27図6—9）

6、床面出土の完形品である。内外面ともに器面の荒れと剥落が著しく整形痕は確認できないが、口縁部外面にわずかに横ナデ痕がみられる。胎土は普通であるが、焼成は粗悪で軟弱である。明茶色を呈する。

7、床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデが、稜以下は底部まで横位の笠削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが、体部には放射状の笠磨きがそれぞれ行なわれている。稜内面には横位の笠磨きの痕跡もわずかにみられる。胎土は砂質で小石の混入が多く、きわめて粗悪である。焼成も悪く、もろい。色調は灰褐色を呈する。

8、床面出土の小破片である。外面は口縁部には横ナデが、稜以下は横位付近まで横位の笠削りが行なわれている。内面は口縁部の横ナデののちに底面を中心とする放射状の笠磨きが行なわれている。胎土、焼成ともに良好であり、黒褐色を呈する。

9、床面出土であるが、全体の約2分の1ほどを欠損する。外面は口縁部には横ナデが、体部には横位の笠削りのうち一部斜位の笠削りがそれぞれ施されている。内面は口縁部から底面までのナデののちに底面を中心とする放射状笠磨きが施されている。胎土、焼成ともに比較的良好であり、赤褐色を呈する。

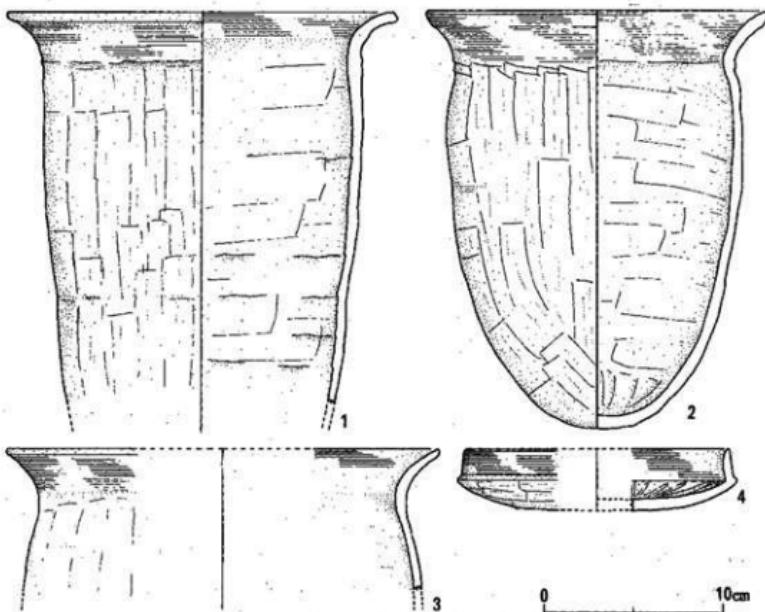
第3—D号住居跡出土遺物

變形土器（第28図1～3）

1. 床面出土であるが、胴下半部を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、肩部以下には縦位の箒削りが行なわれている。肩部の稜は口縁部への横ナデによって生じたのであろう。内部は口縁部には横ナデが、肩部以下には横位の箒ナデが施こされているが、五段の輪積み成形痕が残る。胎土は砂粒の混入が多いが、普通である。焼成も普通であり、淡黄褐色を呈する。

2. (図版25—3), 床面出土の完形品である。外面は口縁部の横ナデのうちに胴部に縦位の箒削りを行ない、その中に底面周辺に斜位の箒削りを行なっている。内面は口縁部には横ナデが、胴部から底面までは横位の箒ナデが施こされている。胎土は比較的良好であるが、焼成は不良であり、淡黄色を呈する。

3. 床面出土の破片である。外面は器面の荒れが著しいために、口縁部の横ナデと肩部以下の箒削りがわずかにみられるだけである。内面も器面の荒れが著しく、わずかに横位の砂粒の移動痕が見られるだけである。胎土は比較的良好である。焼成は普通であり、茶褐色を呈する。



第28図 B区第3—a号住居跡出土遺物

#### 坏形土器（第28図4）

4（図版25—4），床面出土の小破片である。外面は口縁部には横ナデが，体部には横位の窪削りが行なわれている。内面は全面的なナデ整形ののちに放射状の窪磨きを施している。胎土，焼成ともに比較的良好であり，黒褐色を呈する。

#### 4 第4号住居跡群

第4号住居跡群は4軒が切り合っている。このうち，南端のBは少なくともA，Cより古いのであるがローム上面が床面らしく，その大部分が既に失われており，遺物その他がみられずDとの比較が不可能であるので，ここではA，C，Dの3軒について考えたい。

まず，AとDであるがこれはAがDの南隅を切り込んでいてDの方が古い。DはN30°Eの主軸をもち，辺はそれぞれ約7mの正方形の平面形である。かまどは北東辺の中央や、東寄りにあり，東隅には直径1mほどの貯蔵穴をもつ。北西壁内側には藩がある。床面はしっかりしているが，柱穴の位置は不明であった。

AとCはA住居内にCのかまどが存在していることからAの方が古いことがわかる。

Aは東西辺5.7m，南北辺5.95mで，かまどは東壁中央や、南寄り，東南隅には貯蔵穴がある。また北壁と東壁の内側には藩がある。床面はしっかりしているが，柱穴などは不明である。なお，かまどは前述のように東壁の中央よりや、南寄りに存在するが，住居の外側に長さ1.4m，幅30cmほどの煙道がのびている。煙道の上部はブルドーザーにより破壊されているが，内側は真赤に焼けている。

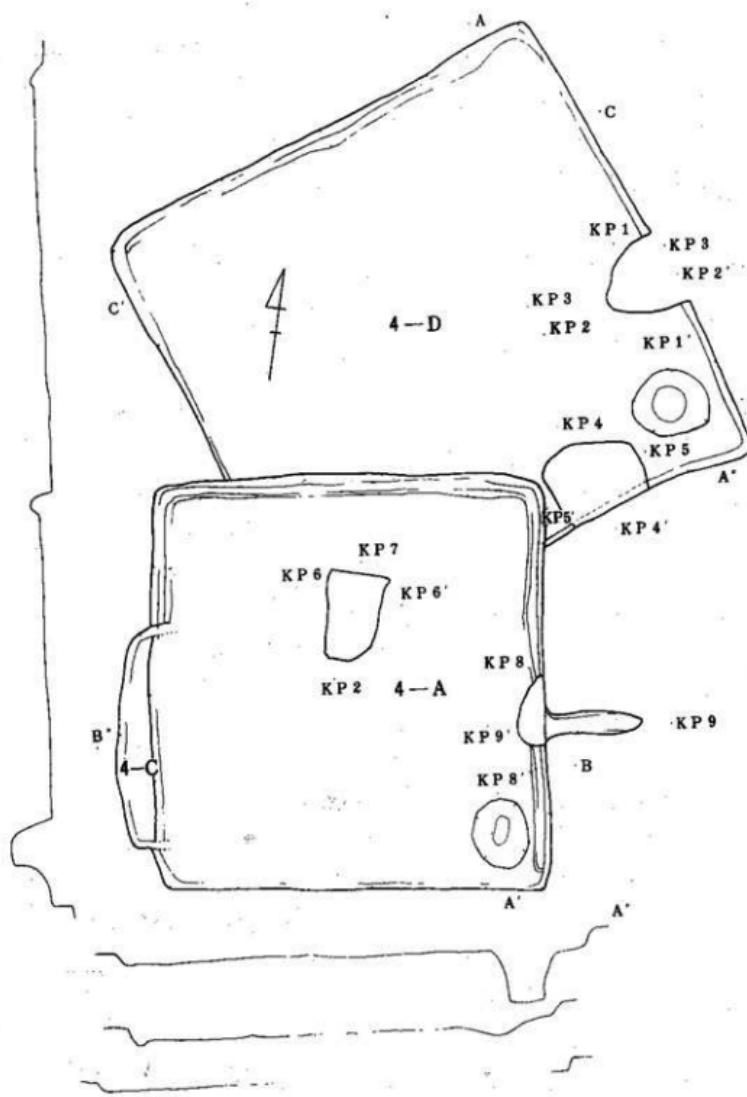
Cはその大部分がA住居内にあったが，調査時には西壁以外の存在が判らず，失ってしまったので，住居の全容を知ることができない。わずかに残る西壁により南北辺は約3.1mで，かまどは北壁にあったものと思われる。

#### 第4-A号住居跡出土遺物

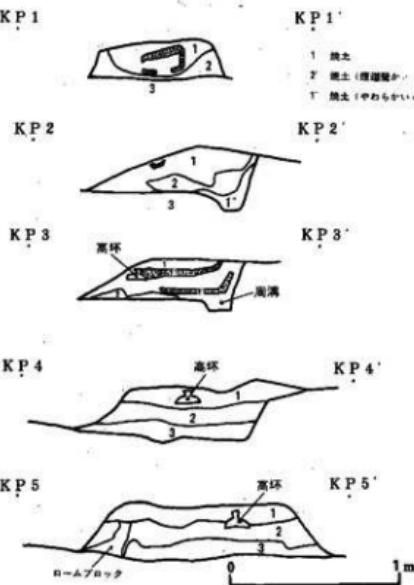
##### 變形土器（第32図1，2）

1，約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデが，肩部以下の胴部には縦位の窪削りがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部には横ナデが，肩部以下の胴部には横位の窪ナデが行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も粗悪であり，淡黄褐色を呈する。

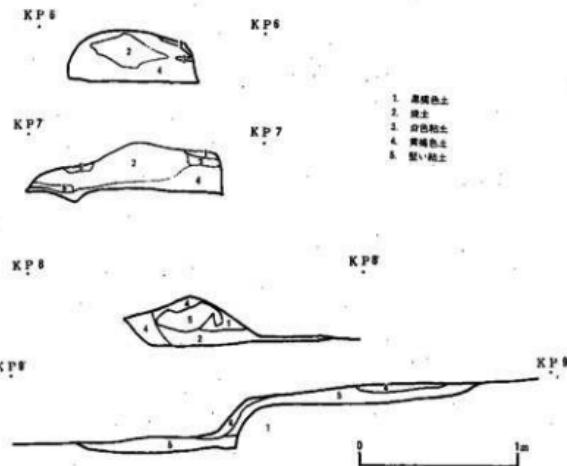
2，胴下半部を欠損する。外面は口縁部には横ナデが，肩部以下の胴部には縦位の窪削りののちに部分的に横位の窪磨きがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部には横ナデが，肩部以下には横位の窪ナデが行なわれている。また頸部には最終成形の接合痕がみられる。胎土は小石の混入がみられ良好ではないが，焼成は比較的良好である。色調は外面は褐色を呈し，焼土の付着が多いが，内面は淡褐色を呈する。



第29図 B区 4号住居跡群



第30図 B区第4—A号, B区4—B号住居跡カマF断面図



第31図 B区第4—C号, 4—D号住居跡カマF断面図

### 坏形土器（第32図3）

3、全体の約3分の1ほどの破片である。外面は体部に横位の箝削りを施こしたのちに口縁部に横ナデを施こしている。内面は口縁部には横ナデを、体部には縦位の箝磨きののちに横位の箝磨きを行なっている。胎土、焼成ともに良好であり、淡黄褐色を呈する。

### 高坏形土器（第32図4～8）

4（図版25—5）、ほぼ完形であるが、全体に器面の剥落が著しい。外面は口縁部付近に横位の箝磨き痕跡がみられる。脚部は上半に縦位の箝磨きを施こしたのちに下半に横ナデを行なっている。この横ナデによってわずかに棱が形成されている。内面は坏部では放射状の箝磨きののちに口縁部に横ナデが施こされている。脚部では横位の箝ナデの痕跡が放射状に残っている。

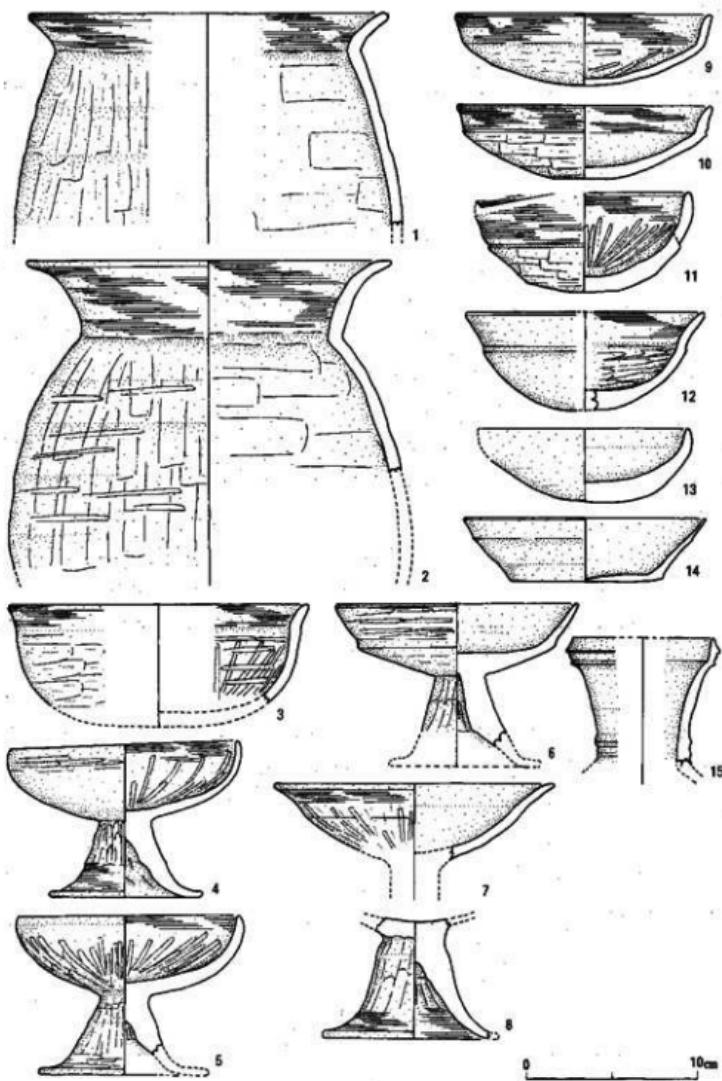
胎土は小石の混入が多く不良である。焼成は普通で、明茶色を呈する。

5（図版25—6）、坏部および裾部の一部を欠損する。外面は器面の剥落が著しいが、縦位の箝磨き痕跡がみられる。脚部も器面の剥落が著しいが、縦位の箝削り痕跡がみられる。内面は坏部では放射状の箝磨きののちに口縁部に横ナデが行なわれている。脚部も器面の剥落が著しいが、最奥部に箝ナデの痕跡がみられる。胎土は小石の混入があり不良である。焼成も粗悪であり軟弱である。明赤茶色を呈する。

6（図版25—7）、ほぼ完形である。外面は器面の剥落が著しいが、坏部には縦位の箝磨が、脚部には縦位の箝磨きののちに裾部に横位の箝磨きが施こされたことがうかがえる。内面は坏部には口縁部の横ナデと体部の放射状箝磨きがみられるが、脚部では器面の剥落が著しく、整形痕はほとんどみられない。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪く軟弱である。色調は赤褐色を呈する。

7（図版25—8）、坏底部と脚部を欠損する。外面は器面の剥落が著しいが、口縁部の横ナデおよびそれ以下の縦位の砂敷の移動痕跡がみられる。内面も器面の剥落が著しく、箝磨きが一部にみられるだけである。胎土、焼成ともに普通であり、明赤褐色を呈する。

8、脚部のみである。外面は縦位の箝削りののちに裾部に横ナデを施こしている。内面は横位の箝ナデののちに裾部に横ナデが施こされている。胎土、焼成ともに良好であり、明赤褐色を呈する。7の坏部と同一個体と思われるが、接合不可能であった。



第32図 B区第4—A号およびB区第4—C号住居跡出土遺物

(1～8 B区第4—A号住, B区第4—C号住)

#### 第4—C号住居跡出土遺物

##### 壺形土器（第32図9～13）

9（図版25—9），覆土の遺物であり，全体の約2分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデが，体部には横位の箆削りが施されている。内面は口縁部および体部の横ナデのうちに体部にまばらな箆磨きを施している。胎土，焼成ともに良好であり，褐色を呈している。

10，覆土上部からの出土で，全体の約2分の1の破片である。外面は口縁部には横ナデが，腰以下には横位の箆削りが施されている。内面は器面の剥落が著しいために整形痕は残っていない。胎土，焼成ともに良好であり，淡黄褐色を呈する。

11（図版26—1），覆土の遺物である。口縁部を約3分の1ほど欠損する。外面は口縁には横ナデが，腰以下底部までには横位の箆ナデのうちに底部にのみ横位の箆削りがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部には横ナデが，体部には放射状箆磨きがそれぞれ施されている。胎土，焼成ともに良好であり，茶色を呈する。

12，覆土上部出土の破片である。外面は器面の剥落が著しく，整形痕は不明である。内面も器面の剥落がみられるが，口部の横ナデ痕と体部の横位の箆磨きが確認できる。胎土，焼成ともに良好で，白褐色を呈する。

13（図版26—2），覆土の遺物であり，口縁部を若干欠損している。内外面ともに器面の荒れが著しく，整形痕はほとんどみられないが，口縁部内面にわずかに横ナデ痕がみられる。胎土は砂質である。焼成は不良で黄白色を呈する。

#### 須恵器

##### 壺形土器（第32図14）

14（図版26—3），覆土の遺物であり，口縁部と底部を一部欠損する。全体にゆがんでおり，口縁部直径は14.2cmと13cmを測る。内外面ともにロクロ成形のさいの横走痕がみられる。底部は回転箆削り調整が行なわれており，切り離し痕は不明である。胎土，焼成ともに良好であり，青灰色を呈する。

##### 長頸瓶（第32図15）

15，覆土の遺物で，口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部内面の一部および肩部との接合部付近に自然釉がみられる。全面にロクロ成形のさいの横走痕がみられる。胎土，焼成ともに良好であり，灰白色を呈する。

#### 第4—D号住居跡出土遺物

##### 壺形土器（第33図1～3）

1（図版26—4），床面出土であるが口縁部を欠損する。外面は胴部下半の箆削りのうちに胸部上半に斜位の箆ナデを行ない，その中に一部に斜位の粗い箆磨きを施している。底部周辺には斜位の箆削りが行なわれている。内面はほぼ全面に横位の箆ナデが行なわれているが，頸部付近に

は一部横ナデ痕もみられる。胎土は小石の混入が多く不良であるが焼成は普通であり、淡黄褐色を呈する。

2、口縁部から胴部上半にかけての破片である。外面は口縁部から頸部までは横ナデが、肩部以下は縦位の箆削りのうちに縦位の箆ナデが行なわれている。内面はほぼ全面にナデが行なわれている。胎土、焼成とともに良好であり、淡赤褐色を呈する。

3(図版26-6)、床面出土の完形品であり、片口形土器である。外面は全体的な斜位の箆削りのうちに胴下部に横位の箆削りと口縁部の横ナデを行なっている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデが行なわれている。また肩部には接合痕が一段みられる。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好であり、赤褐色を呈する。

#### 小形甕形土器(第33図4~8)

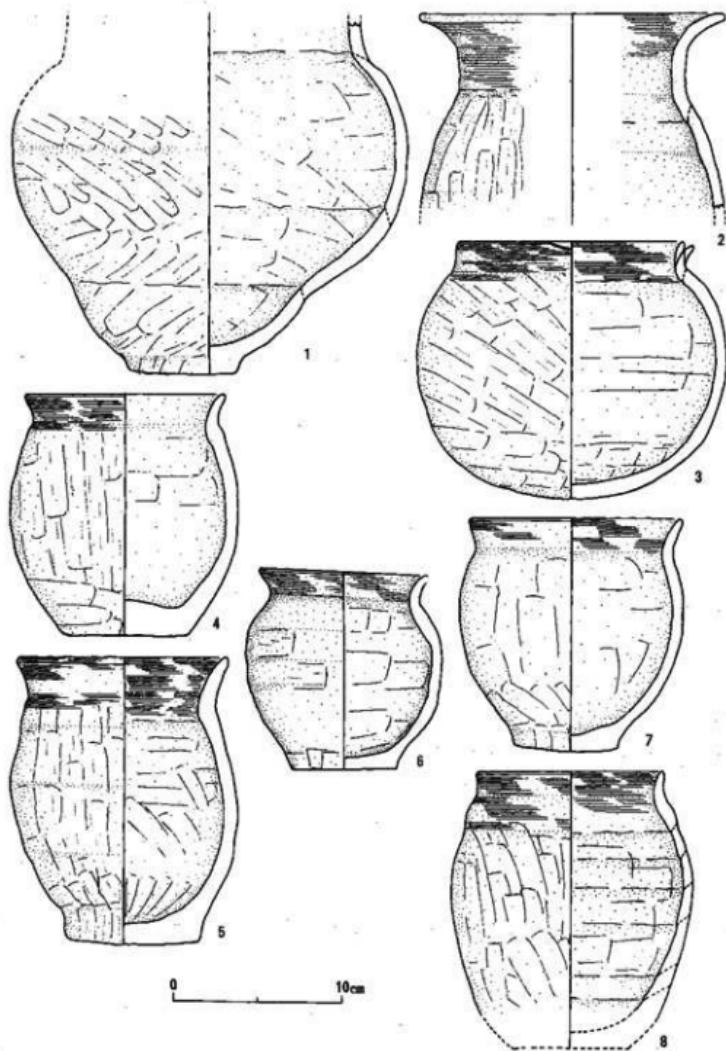
4、床面出土の完形品である。外面はほぼ全面的な縦位の箆削りのうちに部分的な横位の箆ナデを行ない、そのうちに口縁部から頸部にかけての横ナデを行なっている。底部は箆削りによって平坦にしている。内面は口縁部から頸部にかけては剥落が著しく整形度はみられないが、胴部にはほぼ全面に横位の箆ナデが行なわれている。胎土は砂粒の混入が著しく粗悪である。焼成もわめて悪く、非常にもろい。色調は褐色を呈する。

5(図版26-7)、床面出土であり、口縁部をわずかに欠損する。外面は頸部から胴部上半にかけて縦位の箆削りを行なったのちに口縁部から頸部にかけて横ナデを施している。胴部下半には縦位の箆削りが行なわれている。かまた胴部下端には斜位の箆削りが行なわれている。底部は箆削りによって平坦に仕上げられている。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の箆ナデが行なわれている。胎土は砂粒の混入が著しく粗悪である。焼成もわめて悪くもろい。色調は茶褐色を呈している。

6(図版27-1)、床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデが行なわれているが、胴部は器面の荒れが著しく、胴部中位と底部周辺にのみ横位の箆削りがみられる。底部は箆削りによって平坦に仕上げている。内面は口縁部には横ナデが、胴部には横位の箆ナデが施されている。胎土、焼成とともに良好であり、茶褐色を呈する。

7(図版27-2)、床面出土であるが、約2分の1を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、胴部下半には斜位の箆削りが、体部下端には縦位の箆削りがそれぞれ行なわれている。底部は箆削りで平坦に仕上げられている。内面は口縁部には横ナデが、頸部には箆削りがみられるが、胴部の整形痕は器面の剥落のために不明である。底面には横位の箆削り痕がみられる。外面は明茶褐色を呈する。内面は黒色処理が行なわれているが、艶磨きは行なわれていない。

8、床面出土であるが底部を欠損する。外面は頸部から胴部上半までの縦位の箆ナデのうちに口縁部には横ナデを、胴部下半には斜位の箆ナデを行なっている。内面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部上半には横位の箆ナデを行なっているが、6段の輪積み成形痕が明瞭に残っている。



第33図 B区第4—D号住居跡出土遺物

胎土、焼成ともに比較的良好であり、茶褐色を呈する。

#### 瓶形土器（第34図9.～14）

9（図版27-4），床面出土の完形品である。外面は全面的な縦位の箆ナデのうちに口縁部に横ナデを施している。内面は口縁部には横ナデが、肩部から胴部下端までは横位の箆ナデのうち縦位の箆磨きが行なわれている。また孔の部分には斜位の箆ナデが施されている。胎土、焼成ともに良好であり、淡黄褐色を呈する。

10（図版27-5），床面出土の完形品である。外面は胴下半部の縦位の箆削りのうちに胴上半部に斜位の箆削りを行ない、そのうちに口縁部から頸部にかけて横ナデを行なっている。内面は縦位の箆磨きのうちに口縁部に横ナデを施している。胎土は小石の混入が若干みられるが比較的良好である。焼成も良好であり、明赤褐色を呈する。

11（図版27-3），床面出土であるが底部を欠損する。大形単孔の瓶形土器と思われる。外面は胸部上半の縦位の箆ナデのうちに胸部下半に横位の箆ナデを行ない、そのうちに口縁部に横ナデを施している。内面は肩部から胴部下半までの横位の箆ナデのうちに胸部下半に縦位の箆磨きを行なっている。口縁部には横ナデも施されている。胎土、焼成ともに良好であり、明赤褐色を呈する。

12（図版28-1），床面出土であるが、口縁部を約三分の二ほど欠損する。外面は縦位の箆削りのうちに全面的な縦位の箆磨きを行ない、そのうちに口縁部には横ナデを、胴部下端には斜位の箆磨きを行なっている。内面は全面的な横位の箆磨きのうちに口縁部に横ナデを施している。胎土は小石の混入が多く良好ではないが焼成は良好であり明茶褐色を呈する。

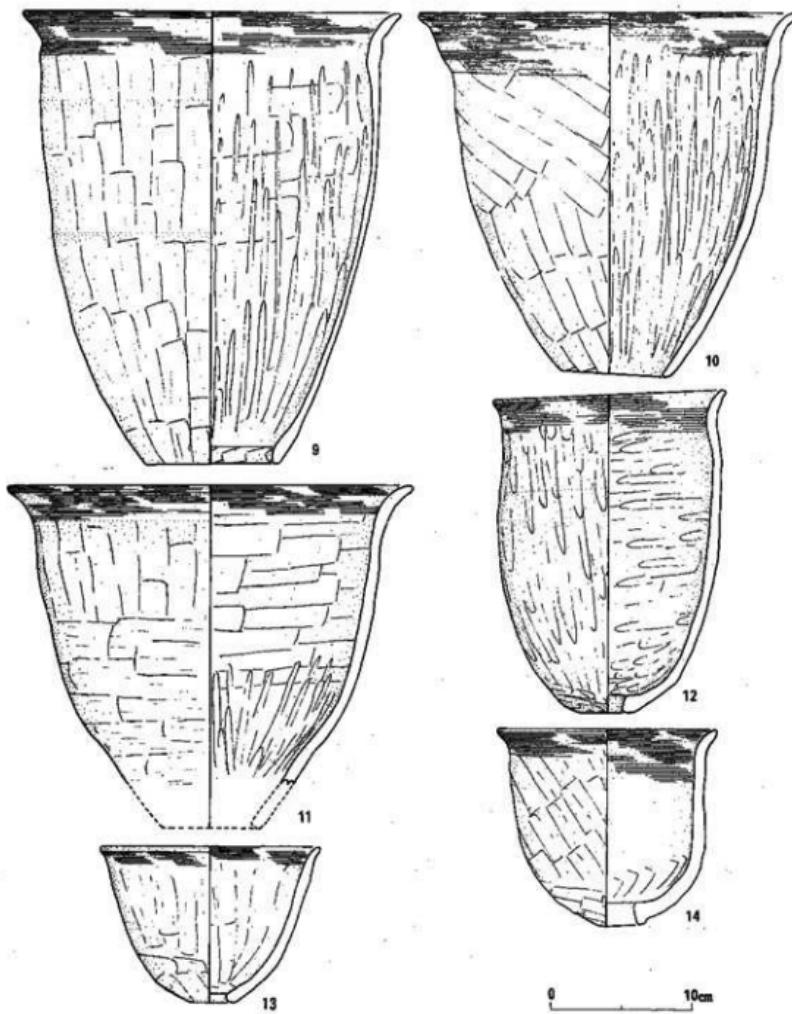
13（図版27-6），床面出土の完形品である。外面は胸部上半の縦位の箆削りのうちに胴下半部には斜位あるいは横位の箆削りを、口縁部には横ナデを行なっている。内面は縦位のナデのうちに口縁部に横ナデを施している。胎土は小石の混入がきわめて多く、粗悪である。焼成も悪くもあり。淡黄褐色を呈する。

14（図版26-8），床面出土の完形品である。外面は口縁部および頸部の横ナデのうちに胴部に斜位の箆削りを行ない、そのうちに胴部下端に横位の箆ナデを施している。内面は口縁部から頸部までは横ナデ、胴部は横位の箆ナデが行なわれている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も悪くもあり。色調は淡茶褐色を呈する。

#### 壺形土器（第35図15～29）

15（図版26-5），床面出土の完形品である。外面は体部の斜位の箆ナデと底部の箆ナデのうちに口縁部に横ナデを施している。内面的なナデ整形のうちに底面付近に横位および斜位の箆磨きが施されている。胎土、焼成ともに良好であり、褐色を呈している。

16, 17（図版28-3），床面出土の完形品。外面は全面的に横位の箆ナデのうちに口縁部に横ナデが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、体部には横位の箆ナデが施されている。胎土、



第34図 B区 4—D号住居跡出土遺物

焼成とともに普通であり明茶褐色を呈する。

18, 19, 20, 21(図版28—4, 5, 6) 全て床面出土の完形品である。外面は全面的な横位の笠削りのうちに口縁部に横ナデを行なっている。20は底部に木葉痕が残るが、笠削りによって周辺が削り取られ、中心部のみが確認できる。他の3個体には木葉痕はみられない。内面は口縁部には横ナデ、体部には横位の笠ナデが施こされている。21個体とも胎土、焼成はともに良好である。18, 21は赤褐色を呈し、19は明茶褐色を見る。20は外面は淡赤褐色を呈するが、内面は黒色処理がなされている。ただし笠磨きは行なわれていない。

22, 23(図版28—7), 床面出土の完形品である。外面は全面的な横位および斜位の笠削りのうちに口縁部に横ナデを施こしている。23は底部の木葉痕の周囲が笠削りによって消されている。22には木葉痕はみられない。内面は横位の笠ナデのうちに口縁部に横ナデを施こしている。胎土は小石の混入がいくぶんみられ良好ではない。焼成は比較的良好で、22は明茶褐色を呈し、23は赤褐色を呈する。

24(図版28—8), 床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデ、体部下半には横位の笠削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、体部は底面まで横位の笠ナデが行なわれている。胎土、焼成とともに普通であり、淡赤褐色を呈する。

25(図版29—1), 床面出土の完形品である。外面は口縁部には横ナデ、体部には横位の笠磨きが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ痕がみられるが、体部は器面の荒れが著しく、整形痕は不明である。胎土は精撰されており、きわめて良好であるが、焼成は不良である。色調は明茶色を呈する。

26(図版29—2), 口縁部の大半を欠損する。外面は口縁部には笠磨きが、体部には横位の笠削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが、体面には底面を中心とする円状の笠磨きが行なわれている。胎土はわずかに小石の混入がみられる程度であり、比較的良好である。焼成は不良であり、軟弱である。色調は内外ともに黒色を呈する。

27(図版29—3), 覆面下部の遺物である。外面は器面の荒れが著しく、口縁部の横ナデのみが確認できるだけである。内面は口縁部には横ナデ、体部には横位の笠磨きが行なわれている。胎土、焼成とともに比較的良好である。色調は外面では淡黄褐色を呈するが、内面は黒色処理が行なわれている。

28, 床面出土であるが、約3分の1ほどを欠損する。外面は口縁部には横ナデが、胴下部の指頭による凹部を挿む上下には横位の笠削りが行なわれている。内面は上半には横ナデ痕がみられるが、下半は器面の剥落のために不明である。胎土は小石の混入が若干多くみられ不良である。焼成も悪く、淡赤褐色を呈する。

29, 覆土の遺物であり、口縁部を若干欠損する。外面は口縁部には横ナデが、体面には不統一方向の笠削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが、体面には横位の笠ナデが行なわれてい

る。内外面ともに二段の輪積み成形痕が残る。胎土は小石の混入が若干みられるが普通である。焼成は不良であり、もろい。そのために磨耗がみられる。色調は茶褐色を呈する。

高坏形土器（第35図30～35）

30（図版29—6），床面出土であるが、口縁部の一部と裾部の一部を欠損する。外面は口縁部の横ナデののち体部から裾部まで縦位の箄削りを行ない、そのうちに裾部に横ナデを行なっている。内面は坏部では口縁部の横ナデののちに放射状の箄磨きを行なっている。脚部には横ナデが施されている。胎土は小石の混入が多く不良である。焼成も粗悪であり、もろい。色調は明茶褐色を生する。

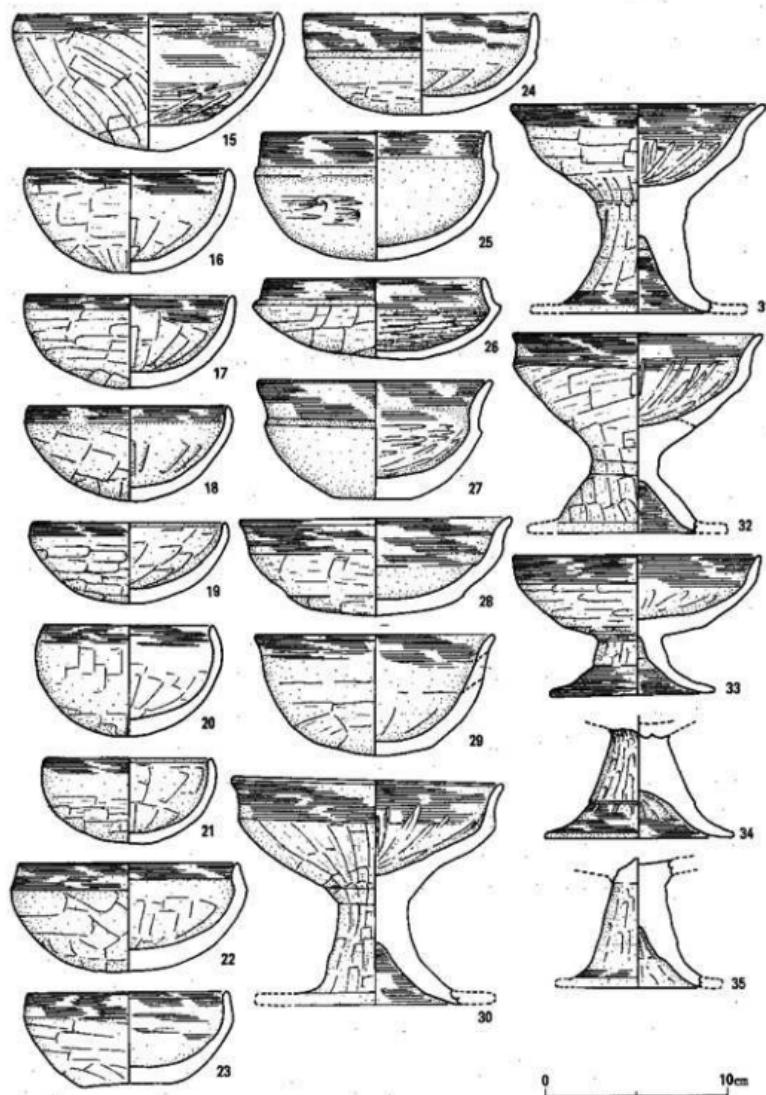
31，床面出土であり、裾部を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、体部には横位の箄削りのうちに脚部下端までの縦位の箄削りを行ない、そのうちに裾部に横ナデを施している。内面は口縁部の横ナデののちに放射状の箄磨きを行なっている。脚部はほぼ全面に横ナデが行なわれている。胎土は小石の混入が若干みられるが普通である。焼成は粗悪であり、やわらかくもろい。色調は明茶褐色を呈する。

32，床面出土であるが、脚部を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、体部には斜位の箄削りが、脚部には縦位の箄削りのうち裾部の横ナデがそれぞれ行なわれている。内面は坏部では口縁部の横ナデののちに体部の放射状箄磨きが行なわれている。脚部には全面的に横ナデが行なわれている。胎土は小石の混入がわずかにみられる程度であり、普通である。焼成は普通であり、赤茶色を呈する。

33，床面出土であるが、坏部の一部を欠損する。外面は坏部では全面的な横位の箄磨きのうちに口縁部に横ナデを行なっている。脚部では縦位の箄磨きのうちに裾部に横ナデを施している。内面は坏部では口縁部の横ナデののちに体部に放射状の箄磨きが行なわれている。胎土は小石の混入がわずかにみられるが良好である。焼成も良好であり赤褐色を呈する。

34（図版29—5），床面出土であるが、坏部を欠損する。外面は裾部に横ナデを行なったのちに縦位の箄磨きを腰まで施している。内面は横位の箄ナデのうちに裾部に横ナデが行なわれている。胎土は精撰されており、きわめて良好である。焼成も良好であり淡茶褐色を呈する。

35，床面出土であるが、坏部を欠損する。外面は裾部の横ナデのうちに全体に縦位の箄磨きを施している。内面は横位の箄ナデが行なわれている。胎土、焼成とともに不良であり、淡赤色を呈する。



第35図 B区第4—D号 住居跡出土遺物

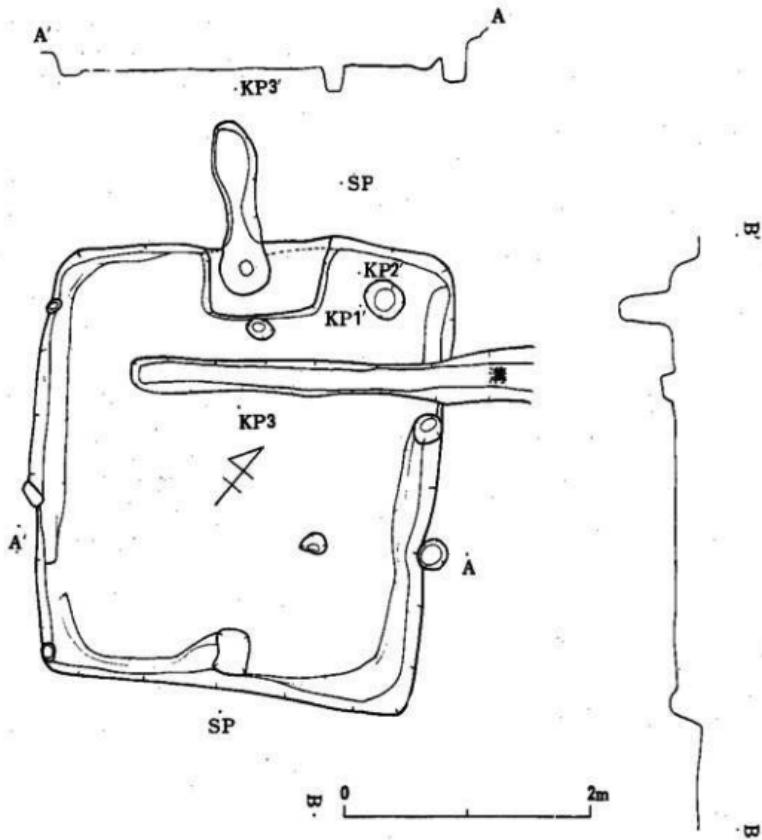
## 5 第5号住居跡

第5号住居跡のその上端部をわずかにブルドーザーにより失ってはいるが、比較的良好に遺存していた。

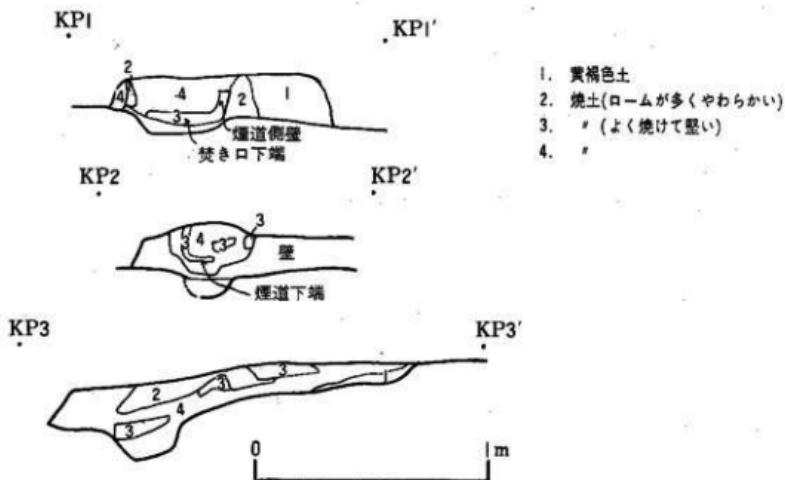
住居の主軸方向はN32°Wである。規格は一辺が約4.2mほどの正方形で、北壁ほぼ中央にかまどをもつ。かまどは住居北側にのびる煙道をもつが、B区第4号住居跡群のD住居ほどは良く焼けていない。床面は比較的しっかりしているが柱穴等は確認できない。

なお、本住居は後述する用途不明の溝によって東壁の一部が破壊されている。

遺物の出土はあまりない。



第36図 B区5号住居跡



第37図 B区第5号住居跡カマド断面図

#### 第5号住居跡出土遺物

##### 坏形土器（第39図3）

3、床面出土であり、約2分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデが、体部には横位の範削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが、体部にはナデ仕上げが行なわれているが、稜の内側の部分には磨きもみられる。胎土は小石の混入が若干みられるが比較的良好である。焼成も比較的良好であり、灰褐色を呈する。

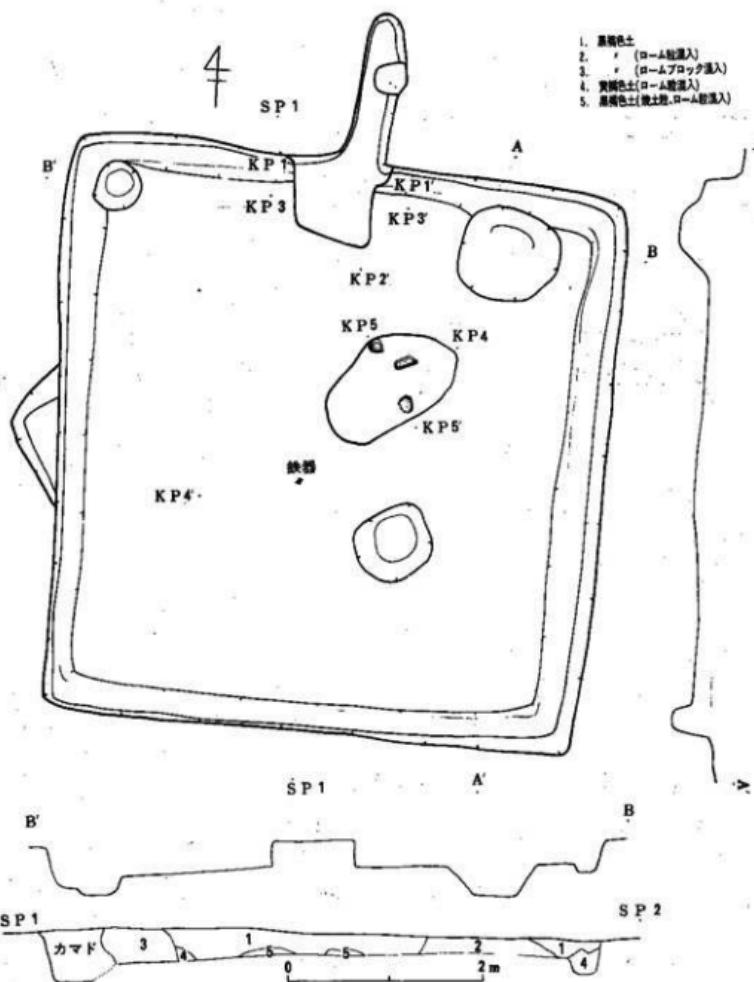
#### 6. 第6号住居跡群（第38図）

第6号住居跡群はA、Bの2基からなる。B住居のはば中央にかまとが遺存しているので、B住居が埋没したあとA住居がつくられたことは間違いない。

B住居は東西6.5m、南北6.4mで、北壁のはば四角に北側にのびる煙道をもつかまとがある。周溝は四周をめぐり、柱穴もまた四隅に近く存在する。東北隅には貯蔵穴があり、付近に遺物が多い。

A住居は主軸がN 5° Eほどで、西の隅がわずかにB住居の西壁を切って外側にみられる。このコーナー付近の壁とかまとの位置から規模を推定すると一辺が約4mほどの比較的小型の住居と思われる。かまとは芯に川原石が用いられ、よく焼けている。また、かまと前縁付近に鉄製品が出土したが、酸化が著しく、鎌であるのか刀子であるのか不明である。

## KP 2

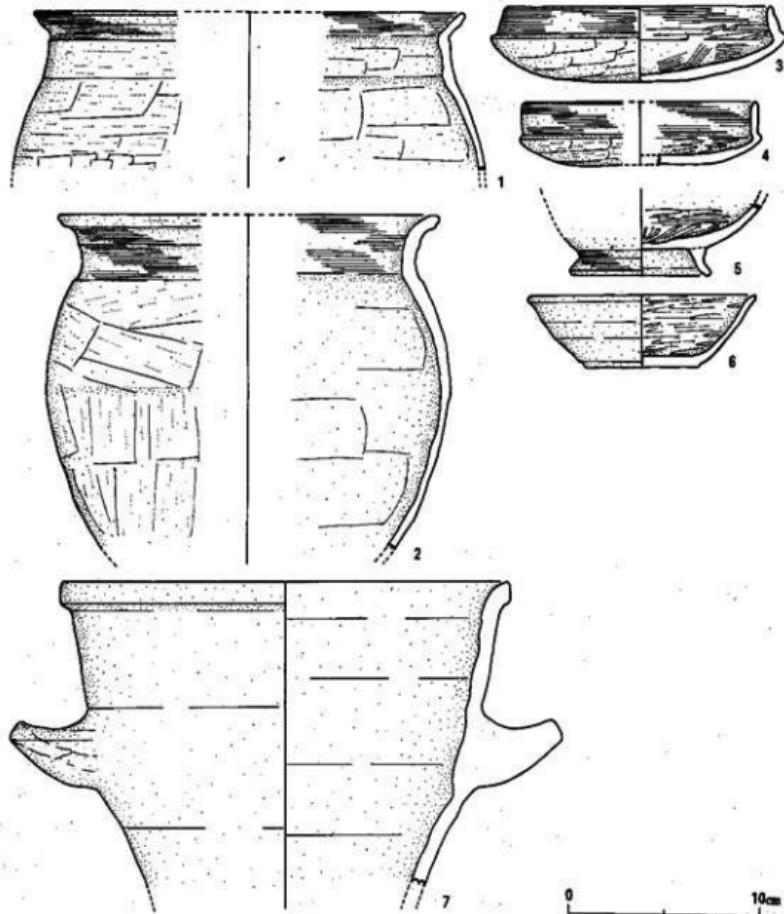


第38図 B区第6号住居跡

第6-a 号住居跡出土遺物

變形土器 (第39図 1)

1, 床面出土であるが、約3分の1ほどの破片である。外面は口縁部には横ナデ、頸部には横位の箆ナデ、肩部から胸部にかけては縦位の箆削り、肩部にはそのうちに横位の箆削りをそれぞれ行なっている。外面は口縁部には横ナデ、頸部から胸部にかけては横位の箆ナデが行なわれている。



第39図 B区第5号、第6-A号、第6-B号住居跡およびB区一溝出土遺物

(3, B区-5号住, 1,5B区6-A号住, 2,4B区6-B号住 7, B区一溝B-5,6溝)

胎土は砂の混入が多いが良好である。焼成も良好であり、明茶褐色を呈する。

#### 环形土器（第39図5）

5、床面出土であるが、体部の大半を欠損する。外面は体部には横位のナデ整形がみられる。高台部にはロクに整形の横走痕がみられる。内面は体部には放射状の箠磨きと円形の箠磨きが行なわれているが、高台は器面の剥落が著しく不明である。胎土は精撰されており良好であるが、焼成は不良でありもうろい。色調は外面では赤茶色を呈するが内面は黒色処理が行なわれている。

#### 第6—B号住居跡出土遺物

##### 甕形土器（第39図2）

2、カマドの煙道出土であり、小破片である。外面は口縁部から肩部の段までは横ナデが、胴部には縦位の箠削りのうちに肩部にのみ横位の箠削りがそれぞれ行なわれている。内面は口縁部から肩部にかけては横ナデが、胴部には横位の箠ナデが行なわれている。胎土は砂の混入が多いが良好である。焼成は普通であり、明茶褐色を呈する。

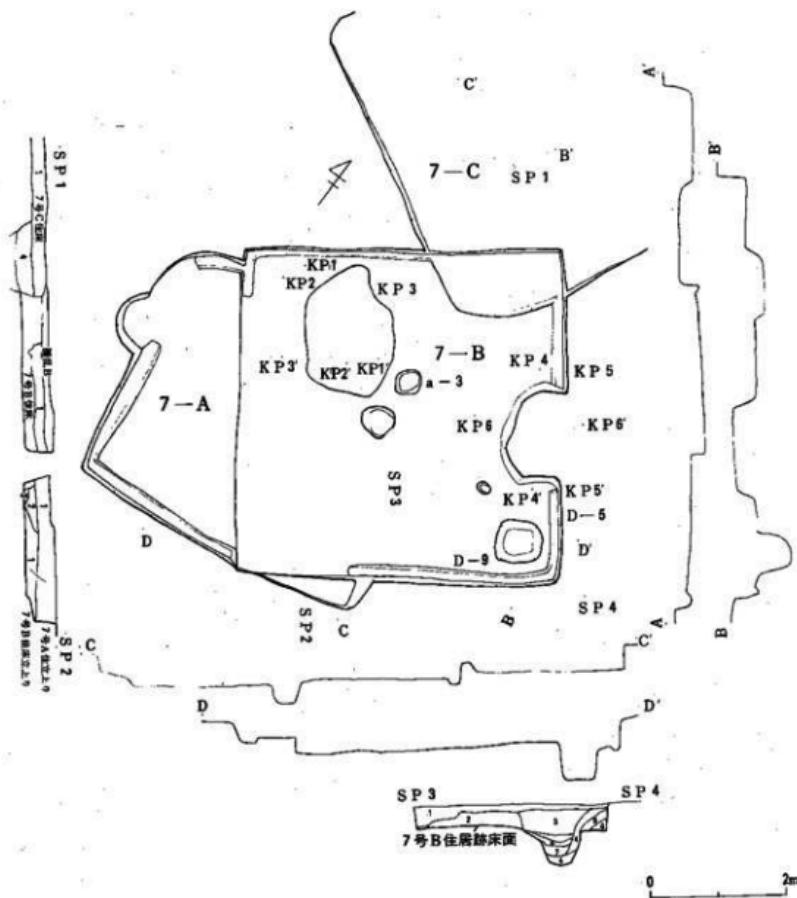
##### 环形土器（第39図4）

4、床面出土であるが、小破片である。外面は口縁部には横ナデが、体部には横位の箠削りが行なわれている。内面は口縁部では横ナデのうちに横位の箠磨きが、体部にはナデ仕上げが行なわれている。胎土は比較的良好であるが、焼成は悪くもうろい。色調は淡褐色を呈する。

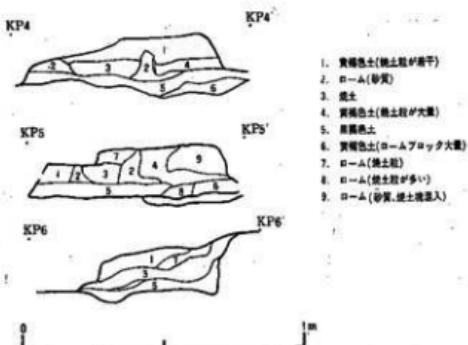
#### 7 第7号住居跡群

B区7号住居跡は調査区域の最東北端にあり、A、B、Cの3軒の住居の切りあいである。このうち、Aは北側にかまとをもち、東南辺約4.5m、南北辺約3.8mの長方形を示す。周溝は西辺と南辺に顕著に残る。壁の現高は約35cmであり、床面はあまり堅くない。Bは東側にかまとをもち、東西辺4.65m、南北辺4.85mのほぼ正方形の平面形を示す。周溝がほぼ四辺をめぐり、かまとに向って右側には径約60cm、床面よりの深さは約50cmの貯蔵穴をもつ。壁の現高は35cmで、床面はそれほど堅く踏みしめられていない。遺物はかまと周辺から中央部にかけて多い。Cは調査区域の関係で全面調査ができなかった。北西から南東にのびる住居の一辺は約4.9mで、壁の現高は25cmである。

次にこのA～Cの3軒の住居の新旧関係をみる。まず、BがCを切っている。このことはB住居の北東部の切り合いをみたとき、C号住居の床を構成する土層が、Cの他の部分と明らかに異なり、しかもCの床としての「貼り床」もないことからもいえる。AとBはAがCを切る。AとBは床面がほぼ等しい深さで、よく類似しているので見わけにくないのであるが、Aのかまと付近の出土遺物とBのかまと付近の遺物、すなわちA、B両住居の時期を決定する遺物を比較した場合、明らかにBがAに先行することから断定できる。これらのことからA～Cの時間的先後関係はC→B→Aとなる。



第40図 B区7号住居跡群



第41図 B区第7号住居跡カマド断面図

#### 第7-A号住居跡出土遺物

##### 壺形土器 (第42図 1~6)

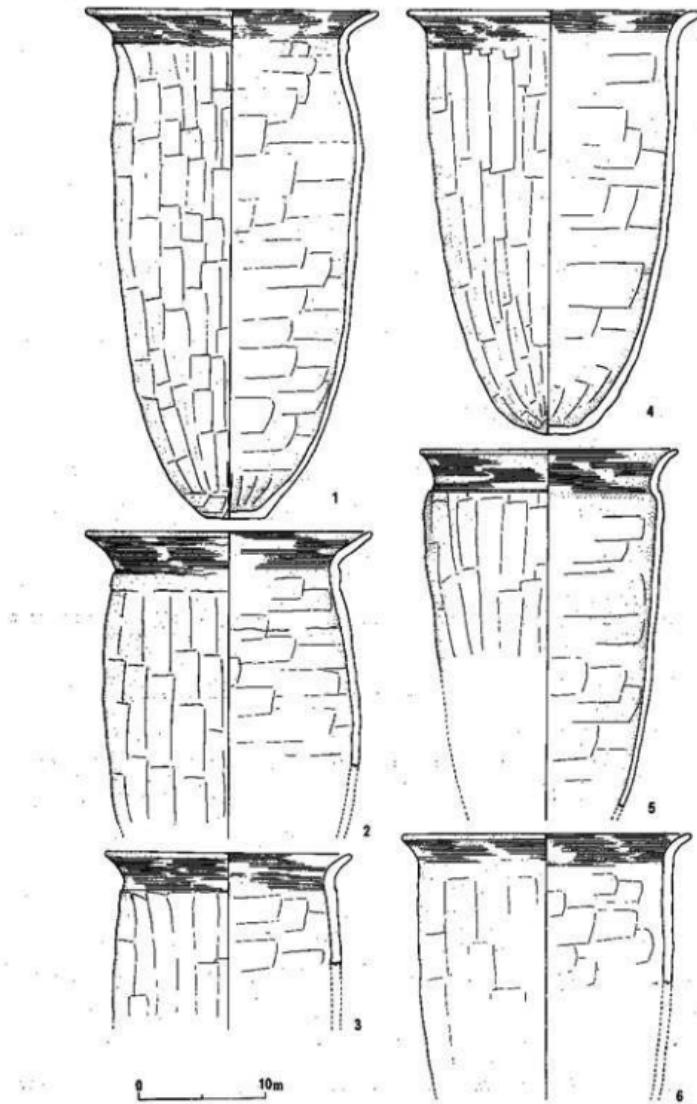
1, 2, 3, 5 (第30図 1, 4, 3, 2), 1, 2はカマドの左袖に使用されていた土器で、完形品である。3は床面出土であるが、胴部下半を欠損する。5はカマドの煙道内からの出土であり、胴下半部を欠損する。4者とも外面は肩部以下の縦位の窓削りのうちに口縁部に横ナデを行なっている。肩部の縫は横ナデによって生じたものであろう。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の窓ナデが行なわれている。全て胎土には小石の混入が多く不良である。1, 5は焼成も悪くならないが、2, 3は比較的良好である。1は淡茶褐色を呈する。2, 3は淡黄褐色を呈する。5は赤茶色を呈する。

4, 6 (図版31-1, 2), 両者ともに床面出土であるが、4は完形品であり、6は胴下半部を欠損する。外面は肩部以下の胴部に縦位の窓削りを行なったのちに口縁部に横ナデを施している。内面は口縁部には横ナデ、胴部には横位の窓ナデを行なっている。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好であり、淡黄褐色を呈する。

##### 壺形土器 (第43図 7~9)

7 (図版29-7) カマド右側の床面出土であり、完形品である。外面は口縁部には横ナデ、体部には横位の窓削りが行なわれている。底部は窓削りによって平坦に仕上げられている。内面は口縁部上半には横ナデが、それ以下は放射状窓磨きが施されている。胎土、焼成とともに良好である、灰褐色を呈する。

9, 床面出土の小破片である。外面は口縁部から下の縫までは横ナデが、それ以下は横位の窓削りが行なわれている。内面は口縁部から下の縫の内側までには横ナデ痕がみられるが、それ以下は整形痕は不明である。胎土、焼成ともにきわめて良好であり、淡褐色を呈する。



第42図 B区7-A号住居跡出土遺物

### 鉢形土器（第43図10）

10（図版29—9），床面出土であるが，全体の約2分の1ほどを欠損する。外面は口縁部には横ナデが，胴部には縦位の箆ナデが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ，胴部には縦位の箆ナデが施こされている。胎土は比較的良好であるが，焼成は悪く，赤褐色を呈する。

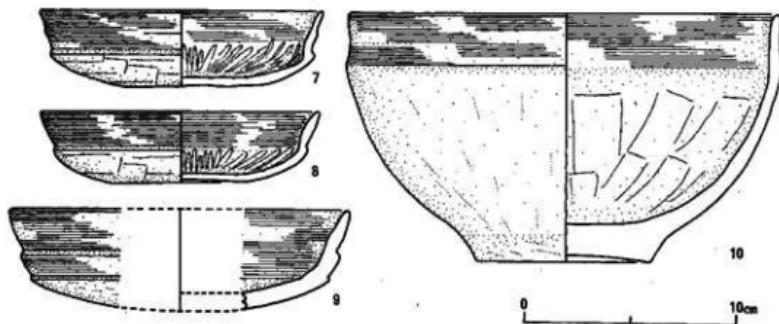
### 第7—6号住居址出土遺物

#### 甕土形器（第44図1）

1（図版31—4），床面出土のほぼ完形品である。外面は口縁部には横ナデが，胴部全体は斜位の箆削りが，胴部下端は横位および斜位の箆削りが行なわれている。底部は単方向の箆削りによって仕上げられている。内面は胴部の横位の箆ナデのうちに口縁部に横ナデが施こされている。胎土は小石の混入が若干みられるが，普通である。焼成は良好であり，堅緻である。色調は内面は明茶褐色を呈するが，外面は黒褐色を呈する。

#### 甕形土器（第44図2、3）

2（図版31—5），床面出土の完形品である。外面は全面に縦位の箆ナデを行なったのちに口縁部に横ナデを施し，そのうちに口縁部を除く全面に縦位の刷毛整形を行なっている。内面は全面的な横位の箆ナデのうちに口縁部に横ナデを行ない，そのうちに胴部下部に縦位の箆削きを行なっている。胎土は精撰されており良好である。焼成も良好で堅緻である。色調は明茶褐色を呈する。



第43図 B区7—6号住居跡出土遺物

3（図版31—6），口縁部をわずかに欠損する。外面は口縁部には横ナデが，胴部には斜位の箆ナデが行なわれたが，上部に巻き上げ整形痕が残る。体部下端は箆ナデのうちに斜位の箆削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが，胴部には横位の箆ナデが，孔の周囲には箆削りが行なわれている。胎土，焼成とともに比較的良好であり，淡赤褐色を呈する。

#### 壺形土器（第44図4）

4（図版30—6），床面出土の完形品である。外面は穂から上の口縁部に横ナデを施したのち

に縦位の箆磨きを行なっている。稜以下は頸部まで縦位の箆磨きを行ない、そのうちに胸部から底部まで横位の箆磨きを施こしている。内面は口縁部から頸部まで横位の箆磨きを行なっているが、それ以下の胸部は不明である。胎土は精撰されておりきわめて良好である。焼成も良く堅緻である。色調は明茶色を呈する。

#### 坪形土器（第44図5～8）

5（図版29-10），床面出土の完形品である。外面は体部に横位の箆削りを行なったのちに口縁部に横ナデを施こしている。底部は多方向の箆削りを行なっている。内面は口縁部の横ナデのうちに体部に放射状の箆磨きを施こしている。胎土は精撰されており良好である。焼成も良く堅緻である。色調は赤褐色を呈する。

6（図版31-3），床面出土であるが、口縁部を約4分の1ほど欠損する。外面は口縁部から肩部にかけては横ナデを行ない、体部には横位の箆削りを施こしている。内面は口縁部から稜の下までの横ナデのうちに体部に放射状箆磨きが行なわれている。胎土、焼成ともに良好であり、赤褐色を呈する。

7（図版32-1），床面出土であるが、口縁部を約4分の1ほど欠損している。外面は口縁部から肩部にかけては横ナデが、体部には横位の箆削りが施こされている。内面は口縁部から腹付近までの横ナデのうちに体部に放射状箆磨きが施さされている。胎土、焼成ともに良好であり、赤褐色を呈する。

8（図版32-2），カマド内出土であり、約2分の1を欠損する。外面は口縁部には横ナデ、体部には横位の箆磨きが行なわれている。内面は口縁部には横ナデ、稜以下は放射状の箆磨きが施さされている。胎土、焼成ともに良好であり、淡褐色を呈する。

#### 高坪形土器（第44図9，10）

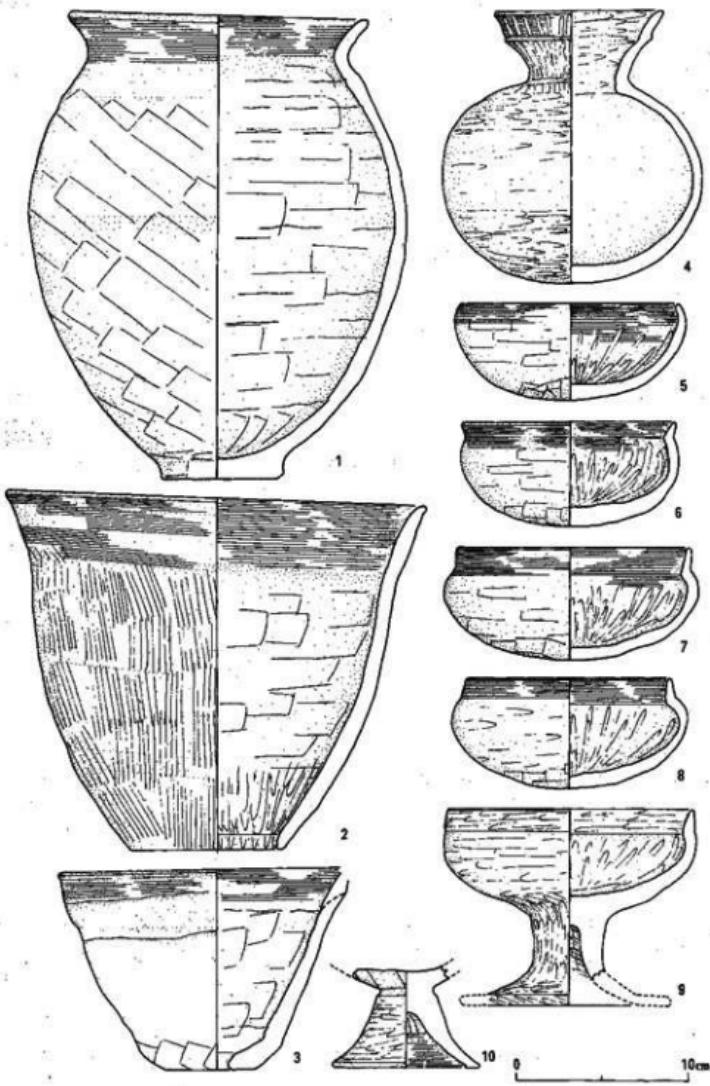
9（図版32-3），床面出土であるが、口縁部と裾部を若干ずつ欠損する。外面は坪部全面に横位の箆磨きを施したのちに脚部全面に縦位の箆磨きを行なっている。内面は口縁部には横位の箆磨き、体部は放射状箆磨きが行なわれている。脚部は横位の箆ナデのうちに斜位の箆磨きが施さされている。胎土はわずかに小石を含むが、比較的良好である。

焼成はあまり良くなく、いくぶん軟弱である。色調は赤褐色を呈する。

10，壺土の遺物であり、坪部がわずかに残っている。外面は坪部には斜位の箆削りが、脚部は横位の箆磨きが行なわれている。内面は脚部では横位の箆ナデのうちに裾部に横ナデが施さされている。胎土、焼成ともに比較的良好であり、淡赤色を呈する。

#### 鉢形土器（第45図11～13）

11（図版32-5），床面出土であるが、約2分の1ほどを欠損する。外面は口縁部の横ナデのうちに体部に粗い箆磨きが行なわれている。脚部は横位の箆磨きが全面に施されている。内面は脚部の縦位の箆磨きのうちに口縁部の横位の箆磨きが行なわれ、最後に肩部の斜位の箆磨きが行なわ



第44図 B区7—B号住居跡出土遺物

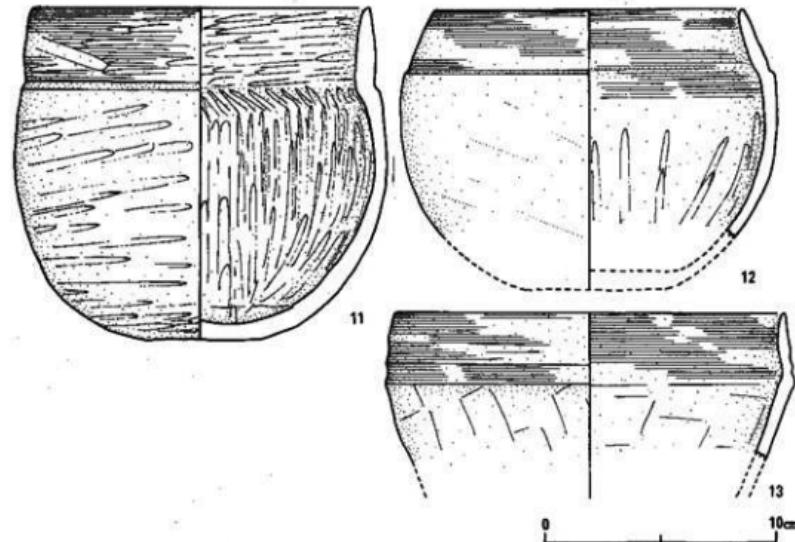
れている。底面には乱雑な篦刷きが施こされている。胎土、焼成ともにきわめて良好であり、明茶褐色を呈する。

12(図版32—4)、底部と胴部の約2分の1を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、胴部には斜位の篦刷りが行なわれている。内面は口縁部から肩部にかけは横ナデ、胴部下半には縦位の篦刷きが粗く行なわれている。胎土は小石を若干含むが、比較的良好である。焼成も良好である。色調は外面は灰褐色を呈するが、内面は黒色処理が行なわれている。

13(図版32—6)、カマドの煙道内出土である。胴下半部を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、胴部には斜位の篦刷りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが、胴部には横位の篦刷きが施こされている。胎土は小石の混入が比較的多く、粗悪である。焼成も悪く、軟弱でもろい。色調は明茶色を呈する。

#### 8 土壙(第19図、第46図)

土壙はA区にみられた3基の円形土壙と同様のものが5基、方形のものが1基検出されている。このうち、B区第1号住居跡群の東端に存在する円形土壙(D号土壙)について述べると、まず口径は約2m、底径は2.15mの円形フラスコ形をしている。壁および底面は金属器で削られたように平滑である。この土壙内の覆土は上部は普通の黑色土が流れ込んでいるようであったが、下部は



第45図 B区第7—B号住居跡出土遺物

真赤に焼けた土の下に炭化した植物の種子が検出された。

この炭化物は、栃木県農業試験場・作物部青山松実氏に同定して頂いた結果は、次の様な事である。

「試料は炭化して稃を被ったままの穀粒の状態では比較が困難だが、アワ、ヒエの稃を除いた手持ち子実との対比では、その大きさと形状、胚の基部との形状、わづかにみられる稃の附着状態から、この穀粒は、ヒエと思われる。」

#### 9 溝（第47図）

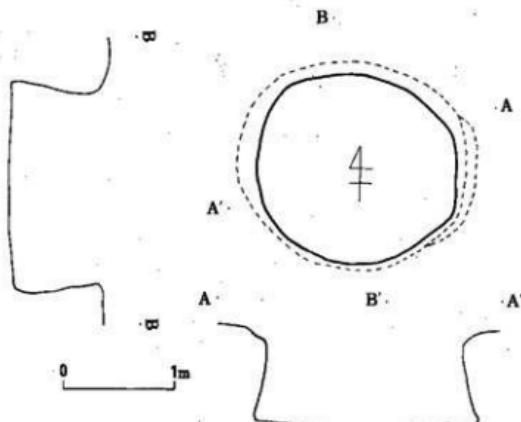
B区第5号住居跡を切って、断面「U」字形の幅約60cmほどの溝が東北に向って伸びている。発掘予定地の外側まで延びていたので、その末端を知ることはできないが、その延長上は東側の段丘崖である。

この溝の中から須恵器壺蓋と内面黒色処理の土師器壺が検出されている。

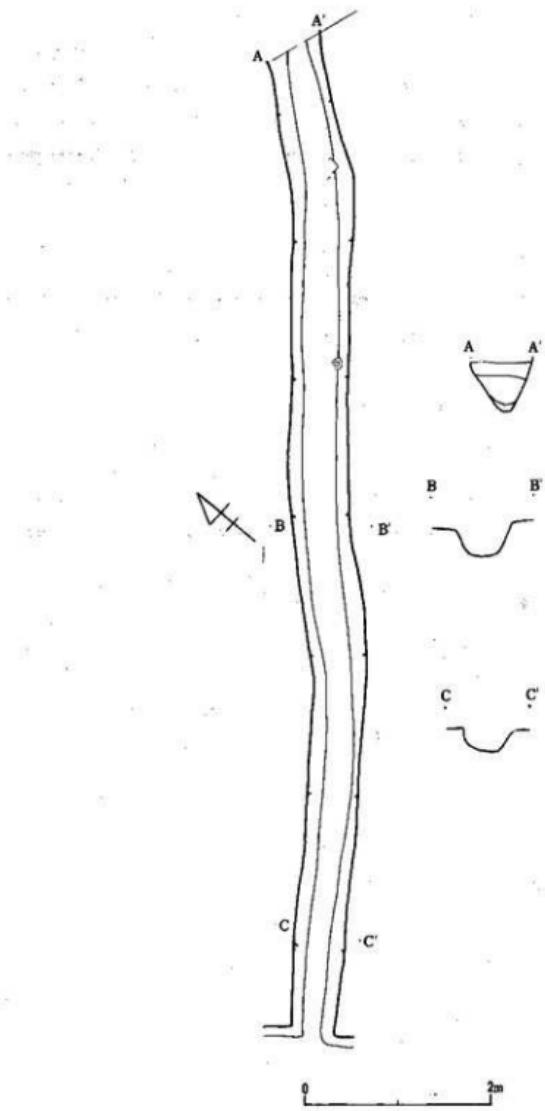
#### 溝遺構出土遺物

##### 壺形土器（第39図6）

6、覆土上部出土であるが、ほぼ完形である。外面はロクロ成形のさいの二段の稜と横走痕がみられる。底部には糸切り痕がみられる。内面は黒色処理、箆磨きが行なわれている。胎土、焼成とともに良好であり、茶褐色を呈する。



第46図 B区4号土壤



第47図 B区溝造模

## 須恵器

### 瓢形土器（第39図7）

7、覆土上部出土の小破片である。外面は整形のさいの横走痕が全面にみられる。把手は成形のうちに貼り付けたものであり、箒削りが行なわれている。内面にも横走痕がみられるが、輪積み成形による凹凸は消されていない。胎土は精撰されており、良好である。焼成も良好であり、部分的に自然釉の付着がみられる。色調は灰色を呈する。

## 第4章 結　び

上蓋遺跡は出流川の左岸に展開する大遺跡である。今回の調査は前述のような目的で、しかも耕作によって破壊されるおそれのあるものだけを対象としたために、断面的な資料のみで、集落の構成や性格など遺跡の全容を明らかにすることはできなかったが、調査で知り得た事実をまとめ、所感の一端をつづくわざて、結びとしたい。

検出した住居跡は別表のように、延べ28軒にのぼる。しかし、すでに床面ぎりぎりまで削平されてしまったため、遺物のほとんどが失われていたり、調査区域の制限から住居跡の一部しか調査できなかつたりして、時期が不明のものがあるので、時期が判明したものは20軒であった。時期の決定にあたっては、本来的には調査員間の徹底した討議のうえでなされるべきものであるが、今回は次のような点に留意しながら竹沢の独断で決定した。すなわち、一つの住居跡内に新旧両様相を呈する器種や器形があった場合、古い形態が残存しやすい供給用土器や経済生活の豊かさ、ことばを変えれば多人数を養うに必要な瓶形土器の大小や貴重品であるが故に遠隔地から持ち込まれたり、伝世しやすい古手の須恵器などはあまり問題にせず、新しい様相が固定しやすい、日常生活に關係の深い壱、壱などの時期によった。

これによって時期の決定した20軒は別表のとおり古墳時代から平安時代のもので、内訳は和泉II式期のものが2軒、鬼高I式期が3軒、鬼高II式期が7軒、鬼高III式期が3軒、真間期が2軒、国分期が3軒である。

これらの住居跡の中で、平面形はほぼ正方形を示すものが多いが、一辺が7mを越すものはA区2号とB区4-D号の鬼高II式期の2軒であることは、鬼高II式期の住居跡が7軒と多いことと相俟って、ようやく本格的な農業生産が軌道にのりはじめてきたことを示唆するが、一般的に並もしくは小規模のものが多い。

次にかまどについて触れたい。まず、その構築された位置であるが、住居の東壁にあるものがA区で1, 2, 3, 4-C, 5号、B区では1-A, 3-B, 4-A, 7-B号であり、北壁にあるものはA区では4-A, 4-B, 6号、B区では2, 3-A, 3-C, 3-D, 4-C, 5, 6-B号であった。これを時期別にみると、東壁にあるものの最新のものが鬼高I式から鬼高II式への過渡期とみたもので、北壁にあるものはすべてそれ以降である。もちろん、遺跡の全面を掘りあげた結果ではないので、断言はできないし、そのために、そのように分類された理由を考える手段もない。ただし、大概、鬼高I式から鬼高II式に変わる時期にかまどの構築位置が変わったと思われる。

なお、和泉II式期の2軒の住居について、それぞれ東壁にかまどと思われる痕跡を確認している。A区3号では調査ミスのために、わずかに焼けたかまどの部分を削りとってしまったが、B区

住居跡一覧表

住居跡番号	面積(m <sup>2</sup> )	かまどの位置	柱穴	貯藏穴	時期	特徴
A区1号	5.65×5.70	東	6	右	鬼高I	火災
2	7.35×7.40	東	4	右	鬼高II	鬼高Iから鬼高IIへの過渡期
3	5.45×	東に痕跡	1	有	和泉II	
4 A	3.0×3.0	北				
B		北			鬼高III	鬼高IIから鬼高IIIへ
5		東				
6	4.6×3.7	北	2		国分?	中央部に炉の痕跡
7						
8	2.8×					
9						
B区1 A	4.8×4.8	東			和泉II	
B	5.2×				真間I	
C						
2	5.2×5.2	北		右	鬼高II	火災
3 A	3.5×3.2	北			国分?	
B	5.2×5.4	東			鬼高I	
C	6.0×	北	2	有	鬼高II	鬼高Iから鬼高IIへ
D	3.7×3.6	北			真間I	
4 A	5.7×5.95	東		有	鬼高II	鬼高IIから鬼高IIIへ 住居外に1.4mほどかまどの傾道がのびる
B						
C	3.1	北			鬼高III	鬼高IIから鬼高IIIへ
D	7.0×7.0	北東辺		有	鬼高II	鬼高Iから鬼高IIへ
5	4.2×4.2	北			鬼高II	
6 A	4.0×	北東辺			国分	鉄製品
B	6.5×6.4	北	4	右	鬼高II	
7 A	4.5×3.8	北東辺	2		鬼高III	
B	4.65×4.85	東	2	有	鬼高I	
C	4.9×					

1号ではA住居のかまどが、C住居の構築時に一部破壊されて、しっかりしたつくりではないが左袖だけが存在している。本県では和泉期の住居で、かまどをもつ例は上三川町の「柳木日産遺跡」の中の大野I-6号住居跡に報告されている。

断面がフ拉斯コ状をした円形土壙を8基検出した。いずれも金属製掘り具で、平滑につくられている。遺物は検出されないのが普通であるが、このうち、B区1号住居の東側にある1基の底部から厚さ約20cmの炭化した「ヒエ」が検出された。この土壙がどの時期にともなうものかはっきりしないが、A区2号住居を切って、まったく同様の土壙が存在することから、鬼高II式期かやや下る時期の所産と見て大過なかろう。さて、この時期の「ヒエ」であるが「コメ」が農業の中心的作物として生産されても、当然収奪の対象となるであろうから、一般農民は「コメ」のほかに大いに「ヒエ」を生産し、その食用に供したものと思われる。そして、収奪の対象となる「コメ」は弥生時代以来の高床倉庫に、一般食用の「ヒエ」は繩文時代、弥生時代と継承されてきた土壙に保管したのであろうか。この故に、高床倉庫は調査区域外のどこか、倉庫令などにいう高燥の地に集中させられ、土壙はいつでも使用でき、しかも私有的性格の強い「ヒエ」の貯蔵穴倉としての性格をもつものであろう。

今までのべてきたように、鬼高II式期は画期的である。弥生時代にはじまった水稻耕作に代表される農耕が、ようやく東国この地に定着し、成長をはじめたと思われる。すなわち、二軒屋式土器を使用していた人々の中から五領式土器は生まれず、五領式土器をつかう人々の支配もしくは影響をうけ、農業生産を強いられる過程で、生産技術、組織が次第に整い、和泉期をへて、鬼高II式期頃によくやく独自の成長をはじめたのではなかろうか。そして、この時期に農業生産活動を通じて成長をしてきた在地の豪族層の墓制としての古墳の内部主体に横穴式石室が採用されるのであろう。すなわち、在地における支配的地位を確立した豪族層が、その支配的地位を世襲していく過程で、家族墓として追跡の可能な規模のしっかりした古墳と横穴式石室が採用されるのであろう。

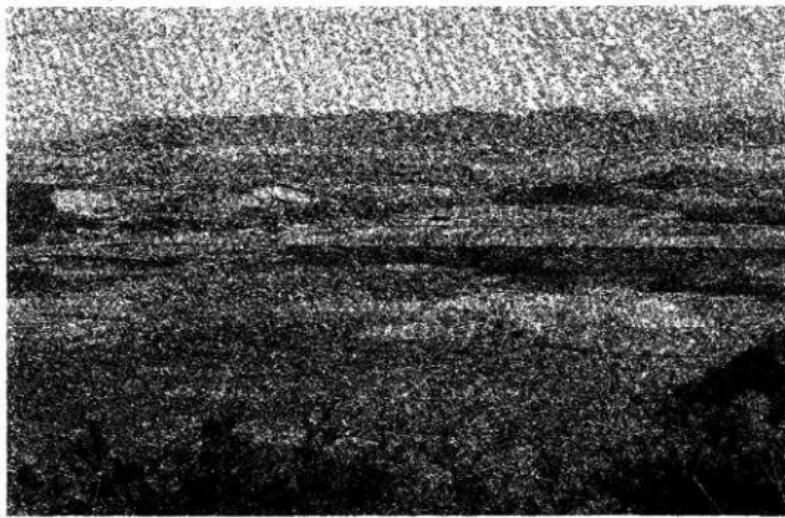
調査が終了してから早や2年が経つ。山ノ井、竹沢は文化課を去り、石川のみが残った。調査に際し、種々励ましをいただいた鹿目文雄文化課長も老人福祉課に異動された。2年もの歳月が流れたにもかかわらず、「上敷遺跡」の報告書作成は遅々として進まず、種々のご迷惑を各方面にかけてしまった。しかしながら、武井宏文化課長、池田進一係長らのご理解と文化財調査係諸氏の献身的ご援助により、ようやく出版にこぎつけることができた。心から感謝申しあげたい。そして、調査にあたりご協力をいただいた「出流川土地改良区」ほか地元の方々、佐野市、足利市当局、県農務部の方々にも心からお礼を申しあげたい。

醜寒の中の調査のために、記録保存が不十分にならざるを得なかったこと、遺物や図面等の整理に十分な時間がとれなかったこと等、関係各位の期待に応えられる仕事ができなかつたことを大いに悔いて、今後の研究姿勢に生かしていきたい。

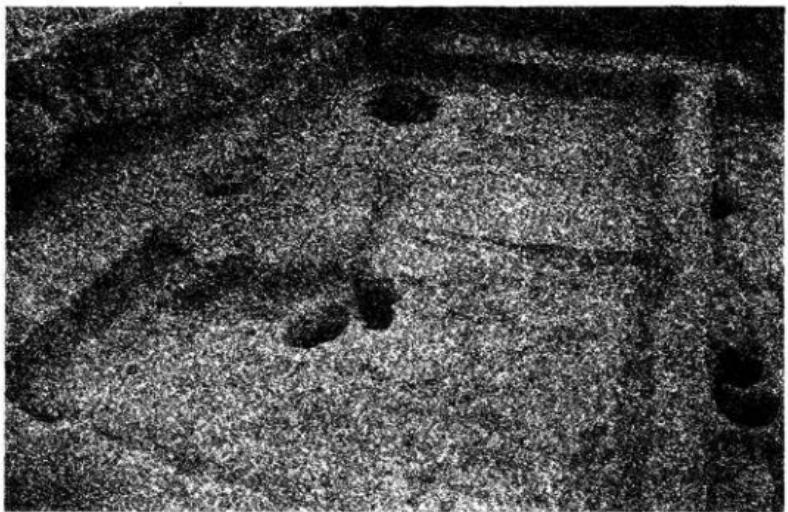
(竹澤謙)



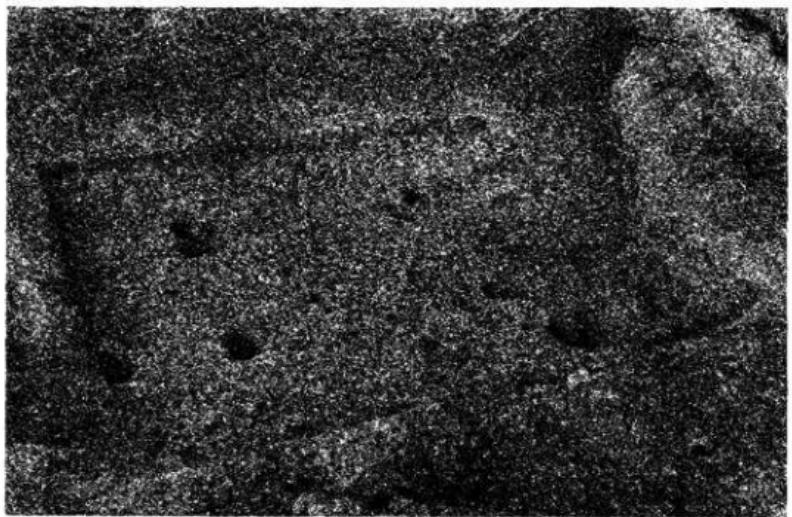
遗迹遗存



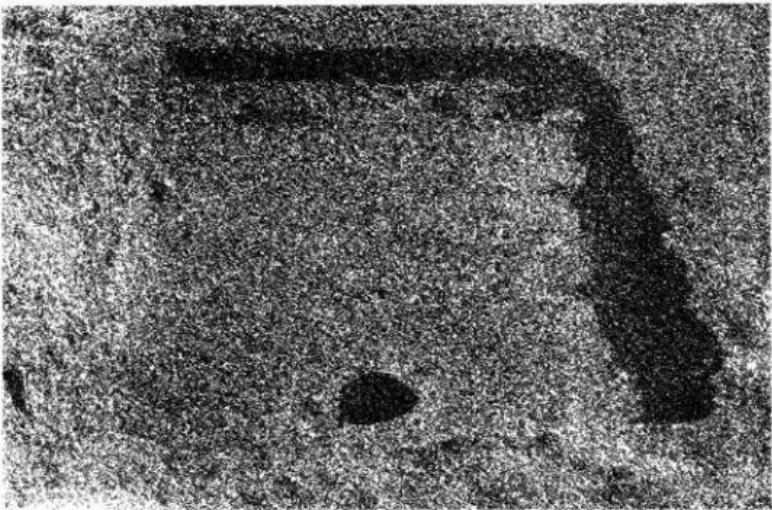
遗迹遗存



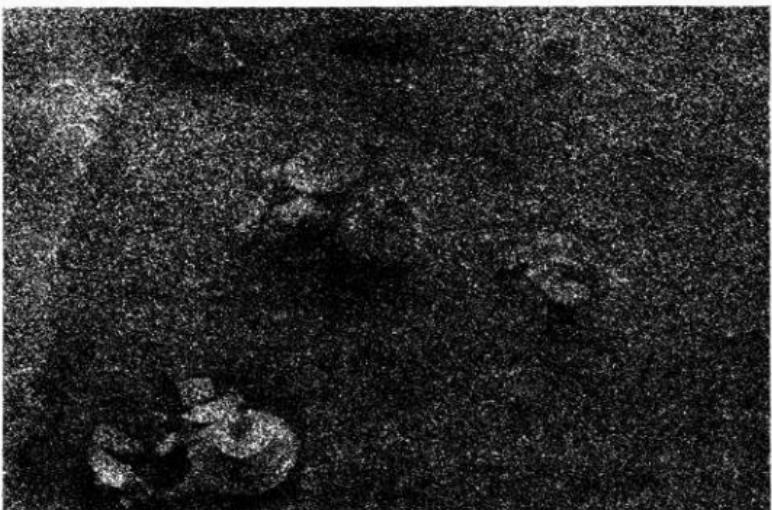
A区第1号住居跡



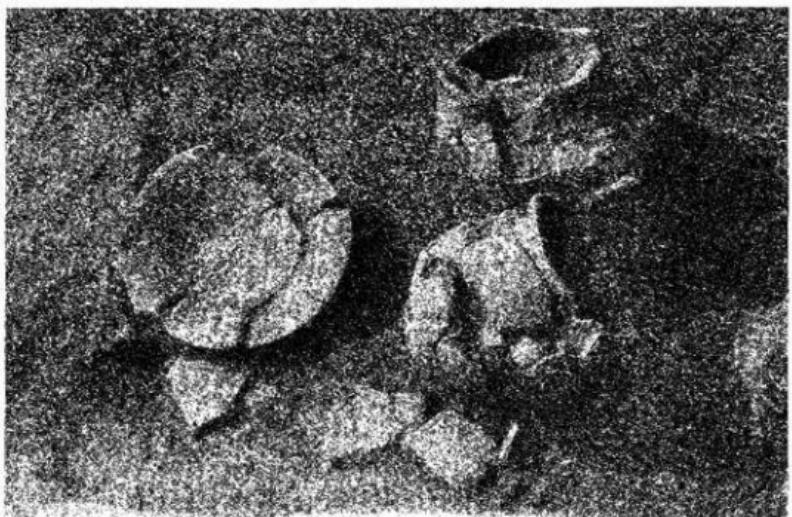
A区第1号住居跡



A区第3号住居跡



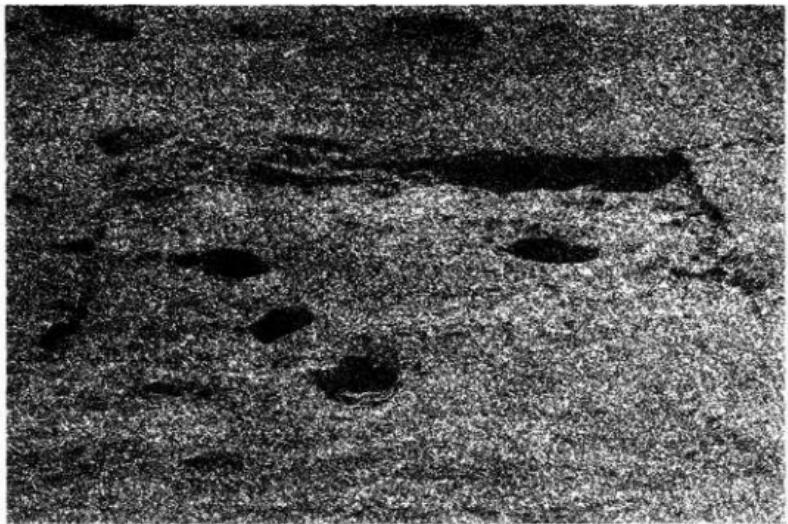
A区第3号住居跡



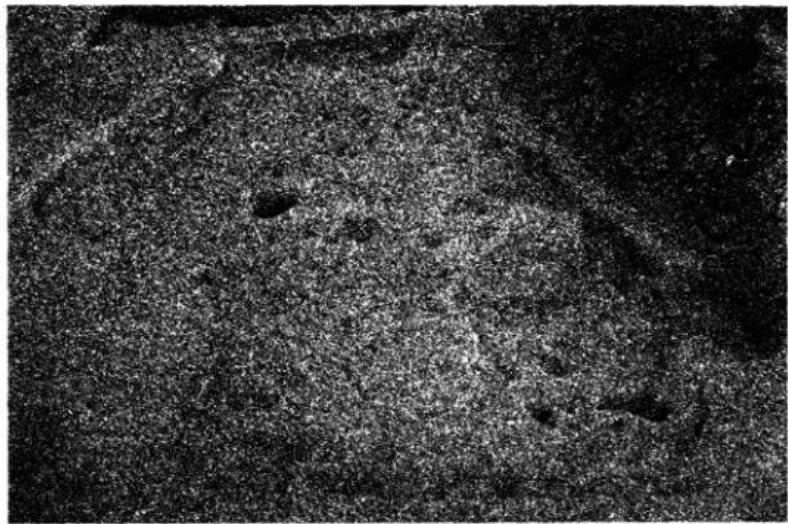
A区第4号住居跡



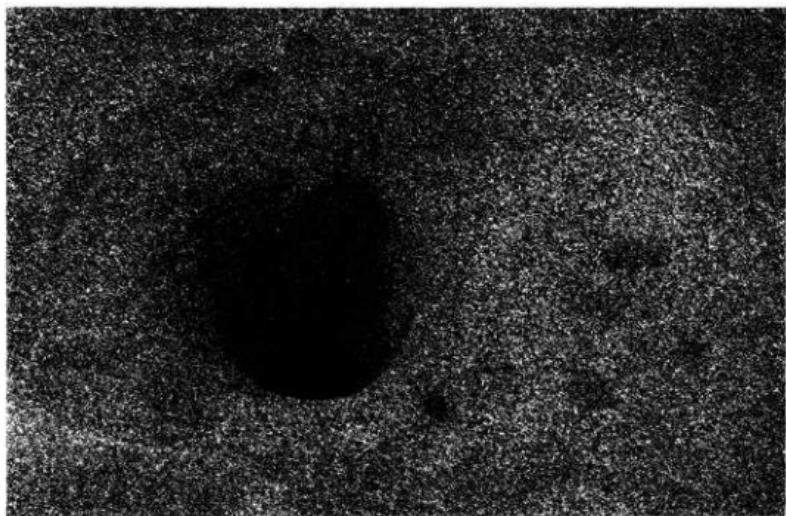
A区第4号住居跡



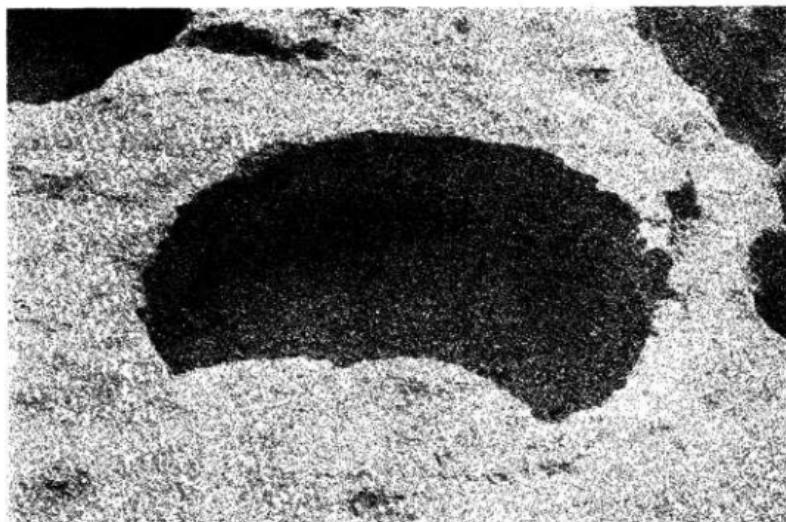
A区第3号住居跡



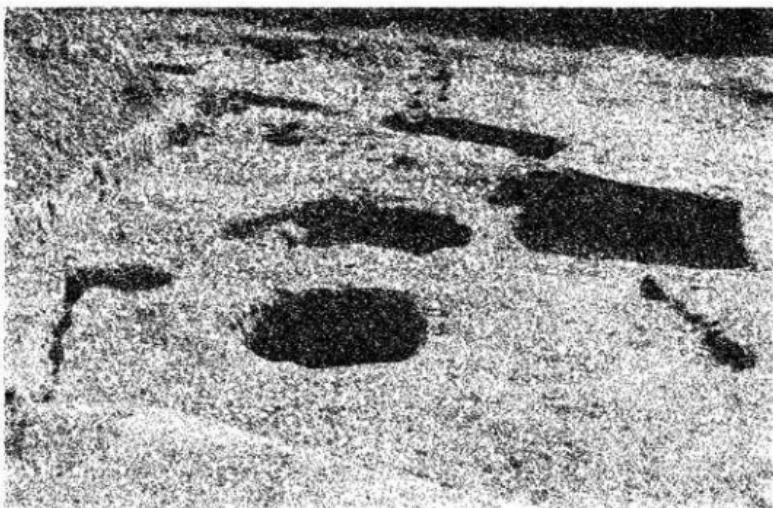
A区第7，8号住居跡



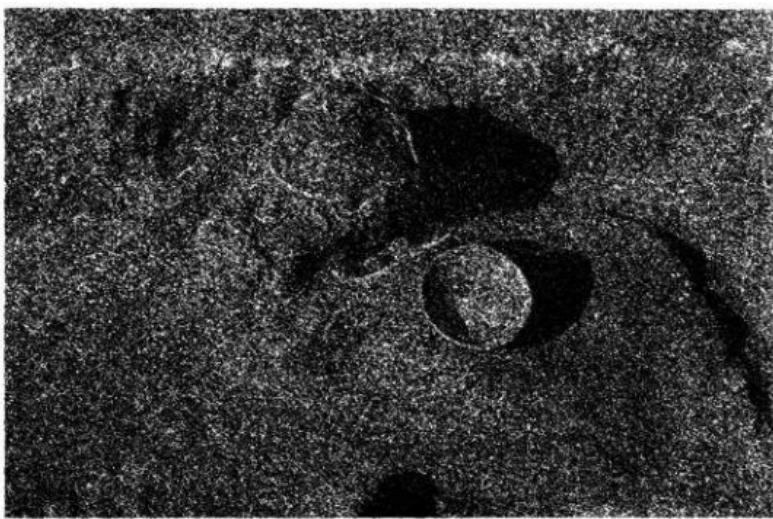
A区第1号井戸



A区第2号土壤



B区第1号住宅痕迹



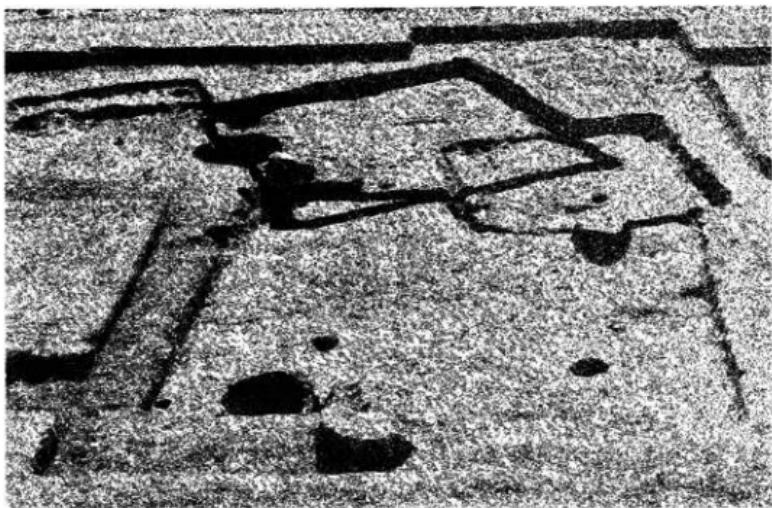
B区第1号住宅痕迹



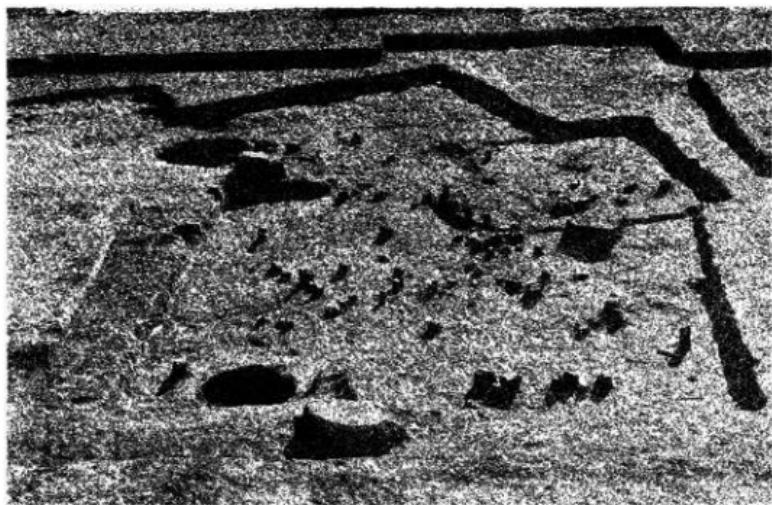
B区第2号住居跡



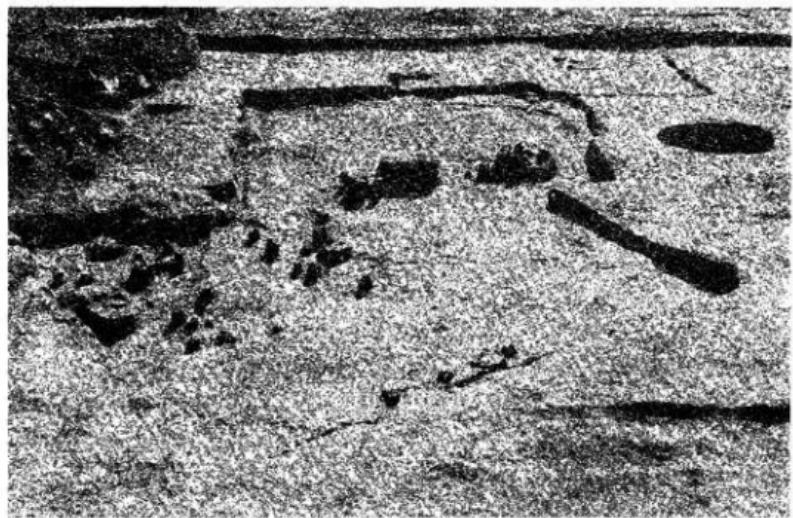
B区第2号住居跡 カマド



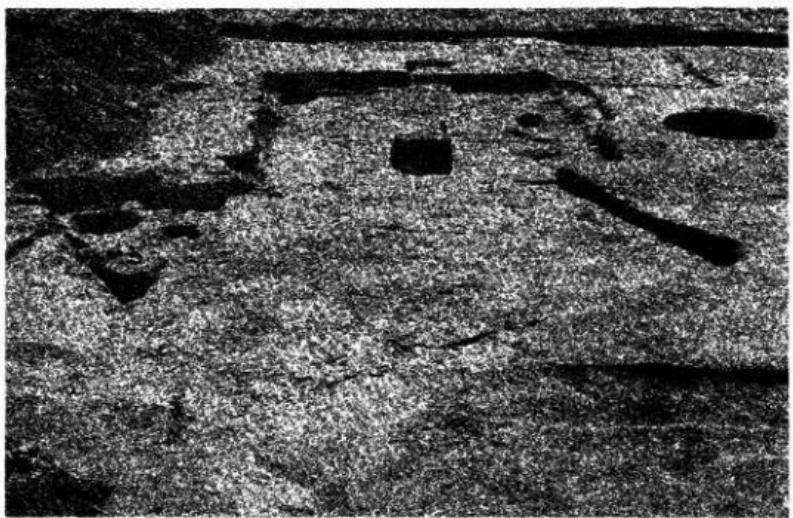
B区第3号住居跡



B区第3号住居跡



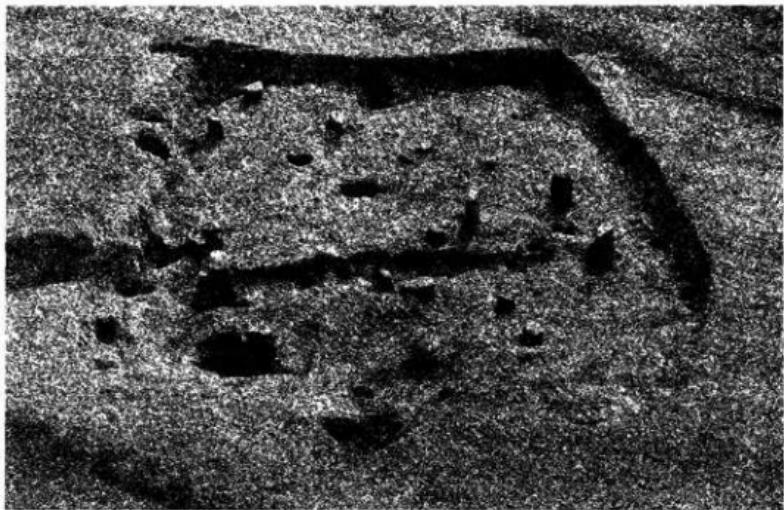
B区第4号住居跡



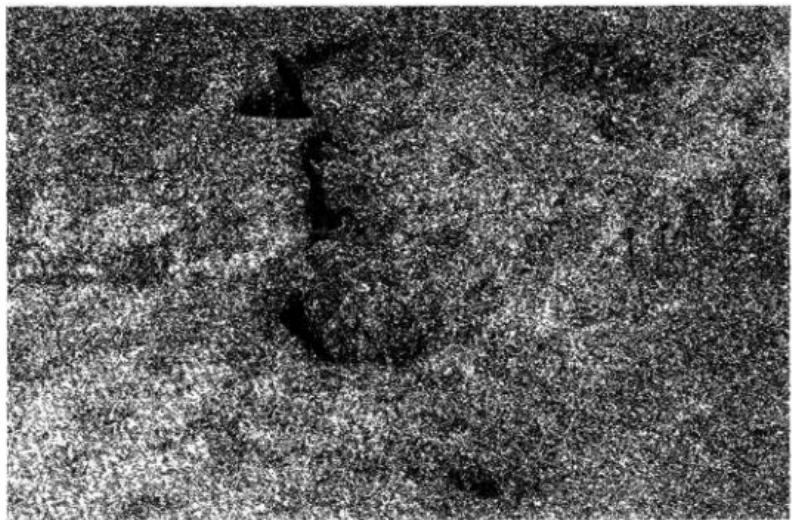
B区第4号住居跡



B区第4号住居跡東カマド



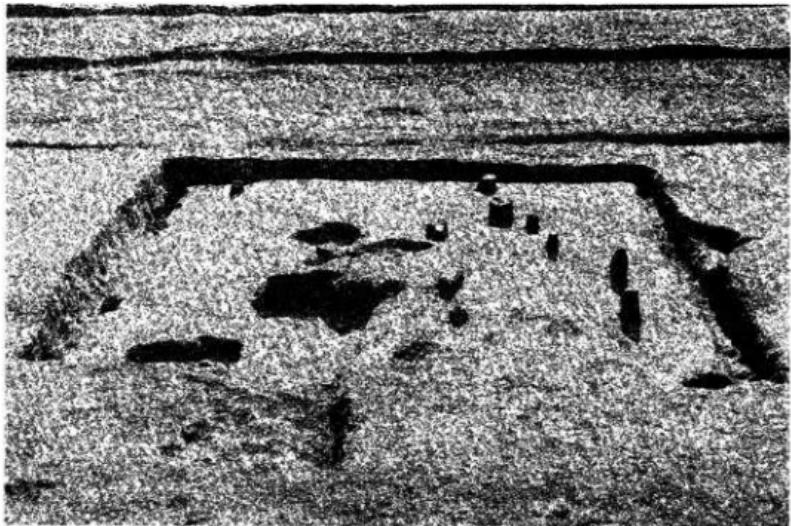
B区第5号住居跡



B区第5住居跡 カマド



B区第5，6住居跡と溝



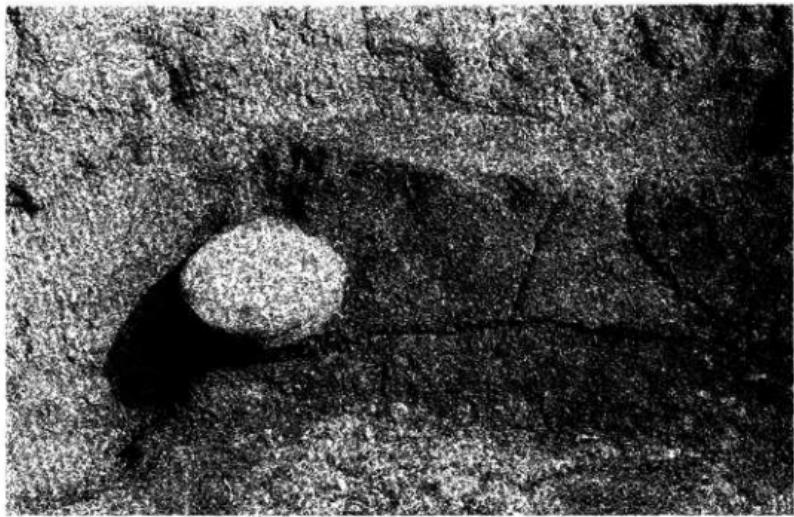
B区第6号住居跡



B区第7号住居跡



B区第7A住居跡 カマド上



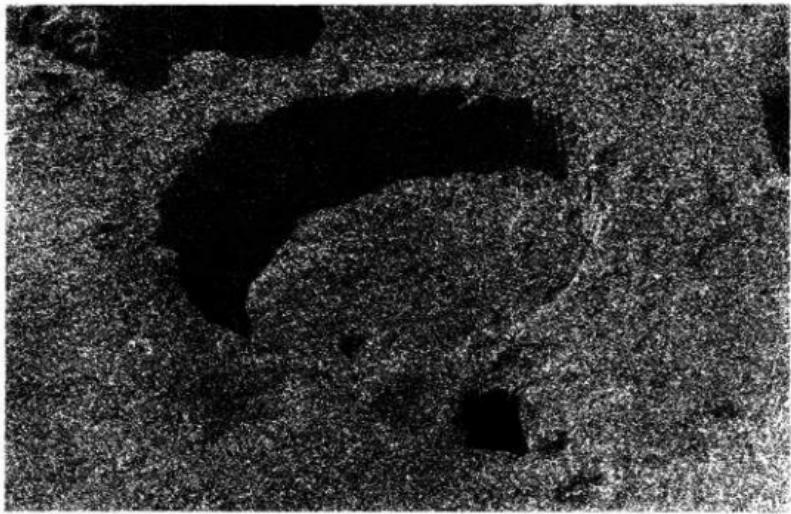
B区第7号住居跡 カマド中



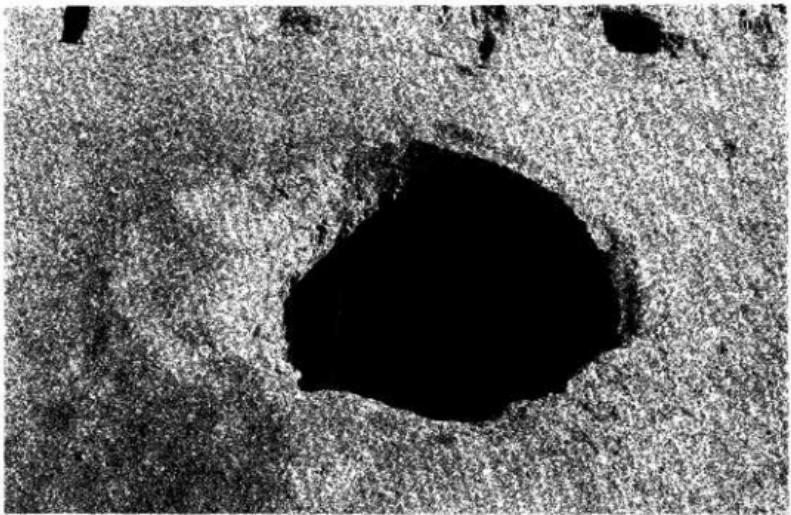
B区第7号B南壁



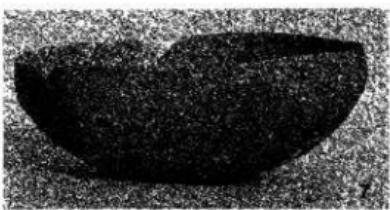
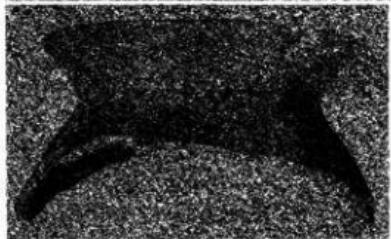
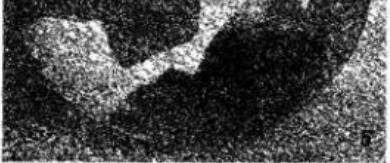
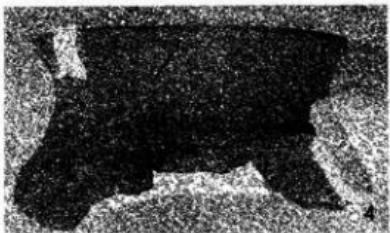
B区第7号B住居跡

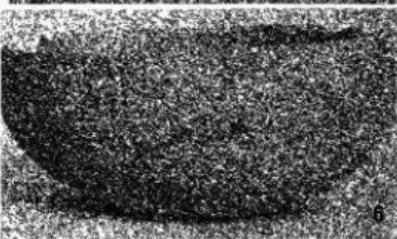
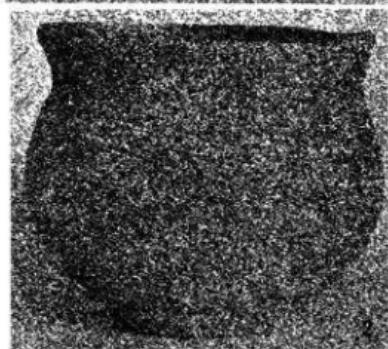
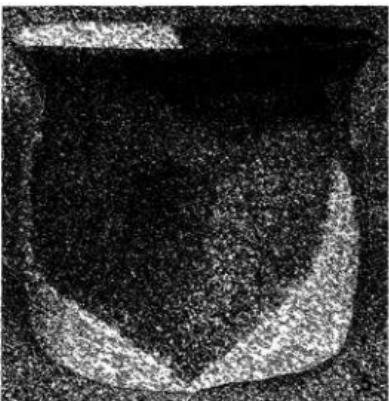


B区第4号西土壤

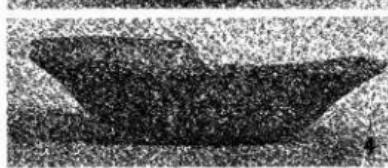
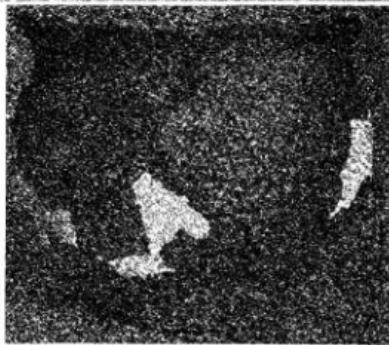


B区第1号内土壤

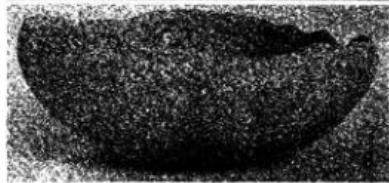


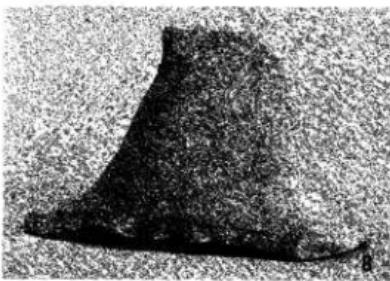
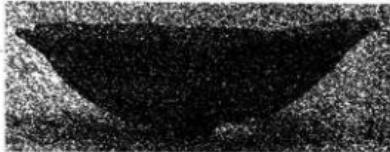
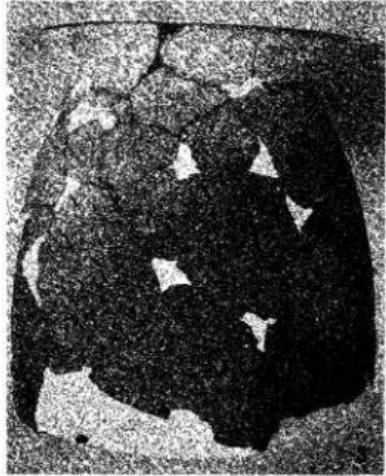
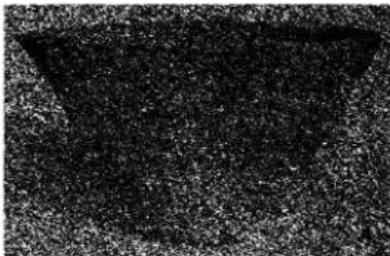
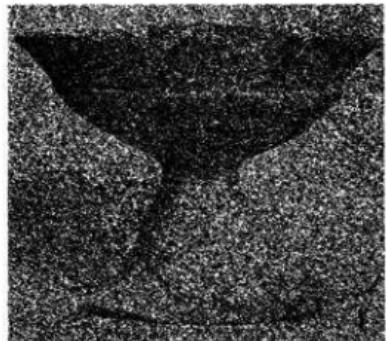


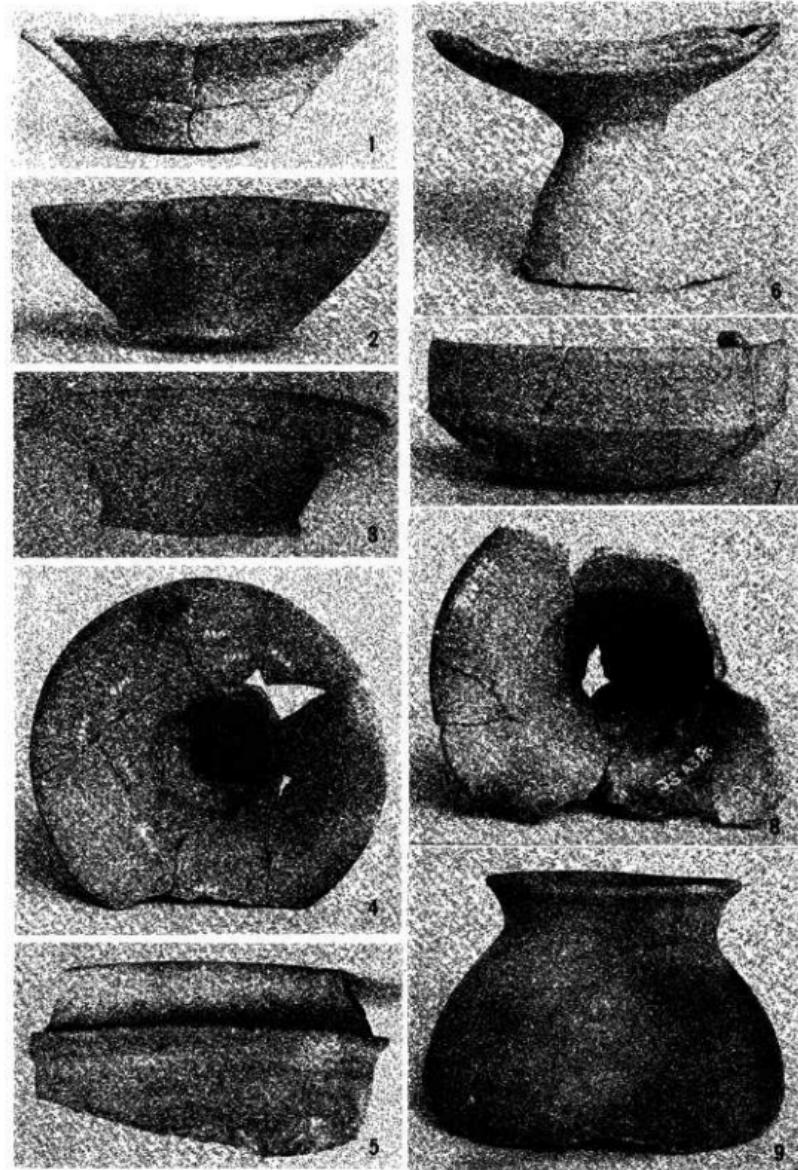
3

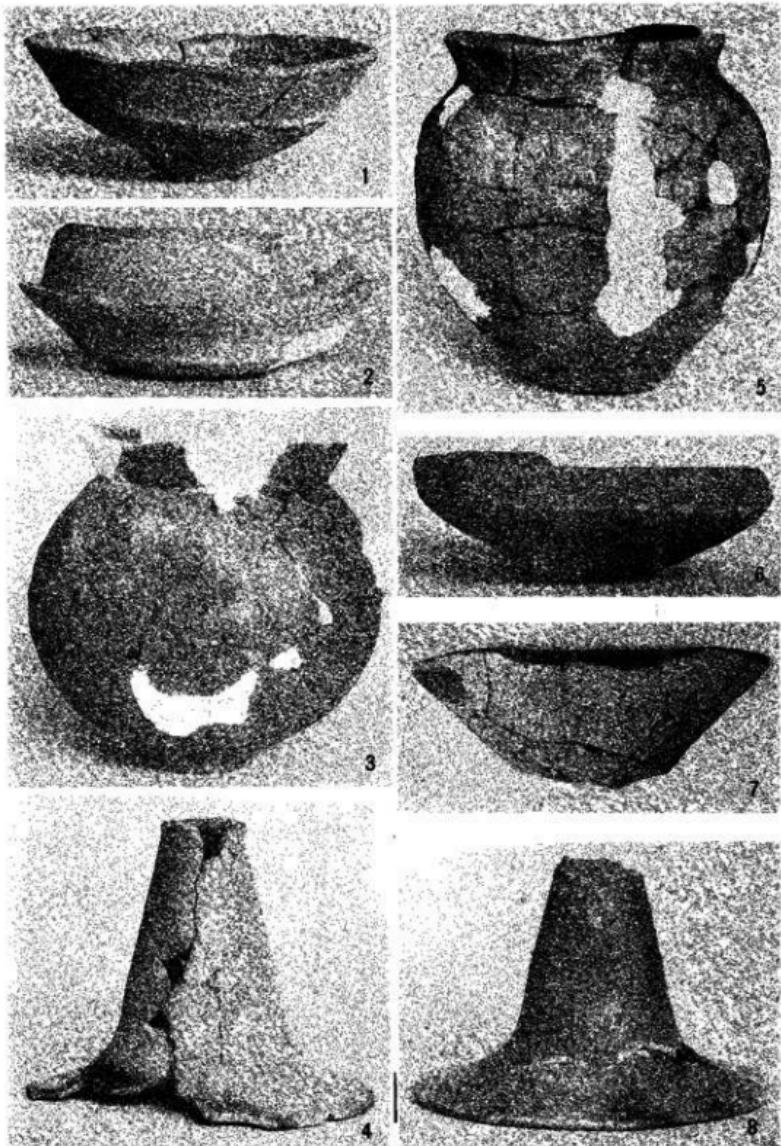


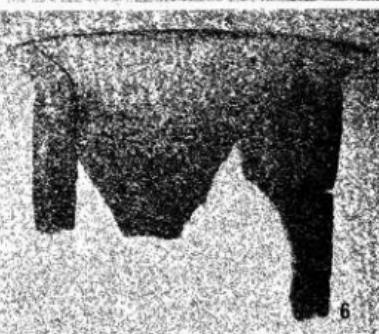
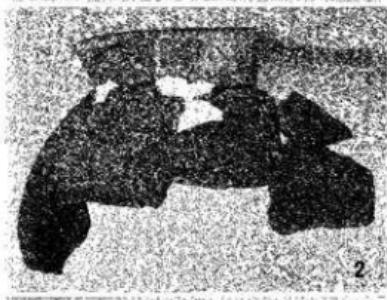
4

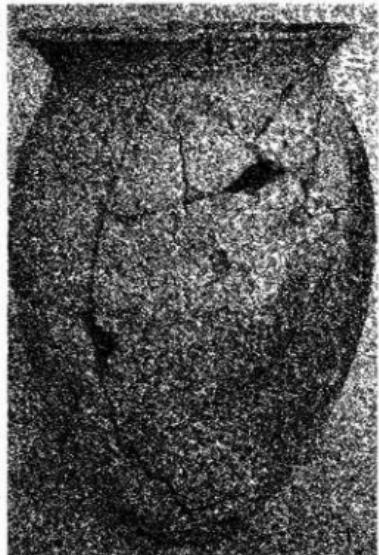


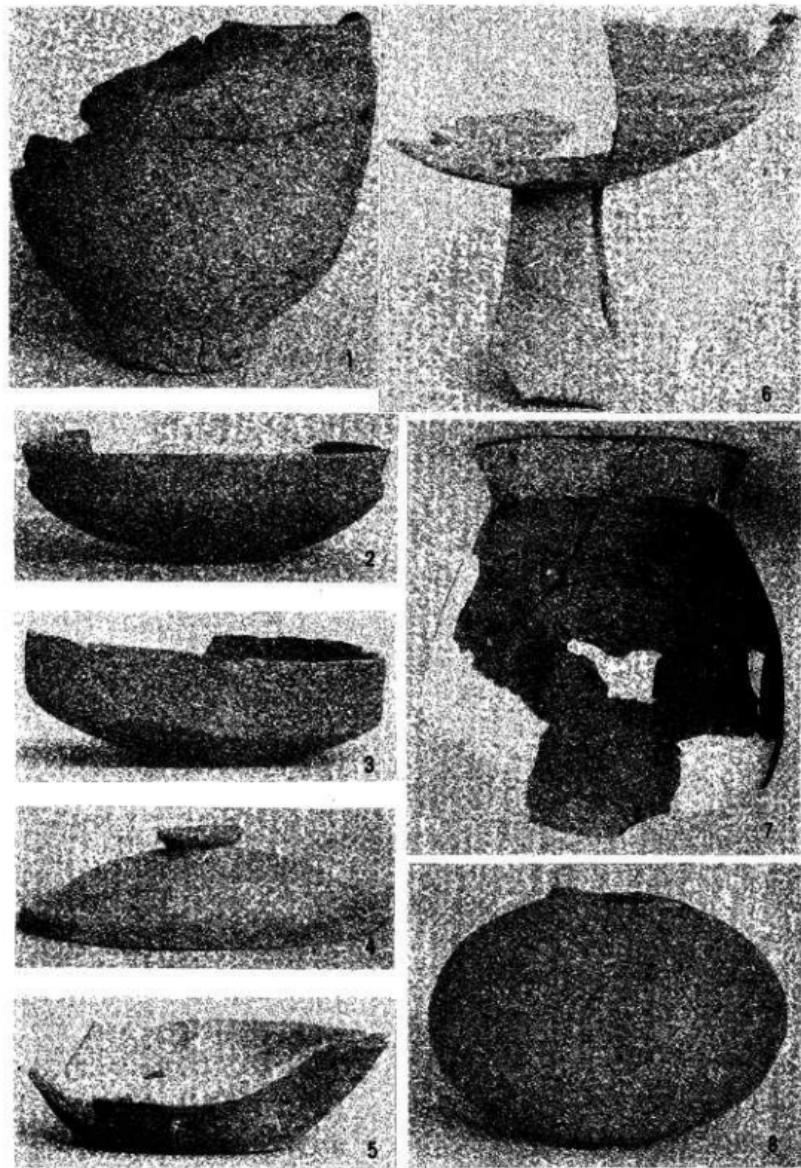


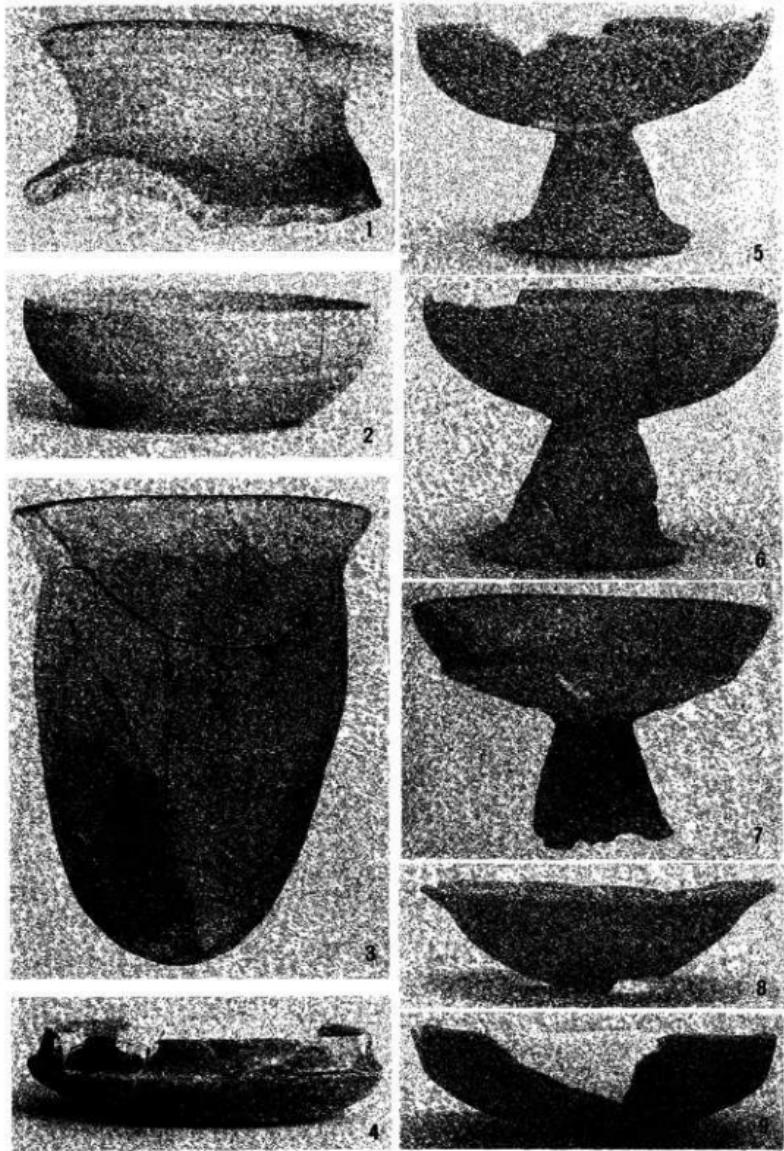


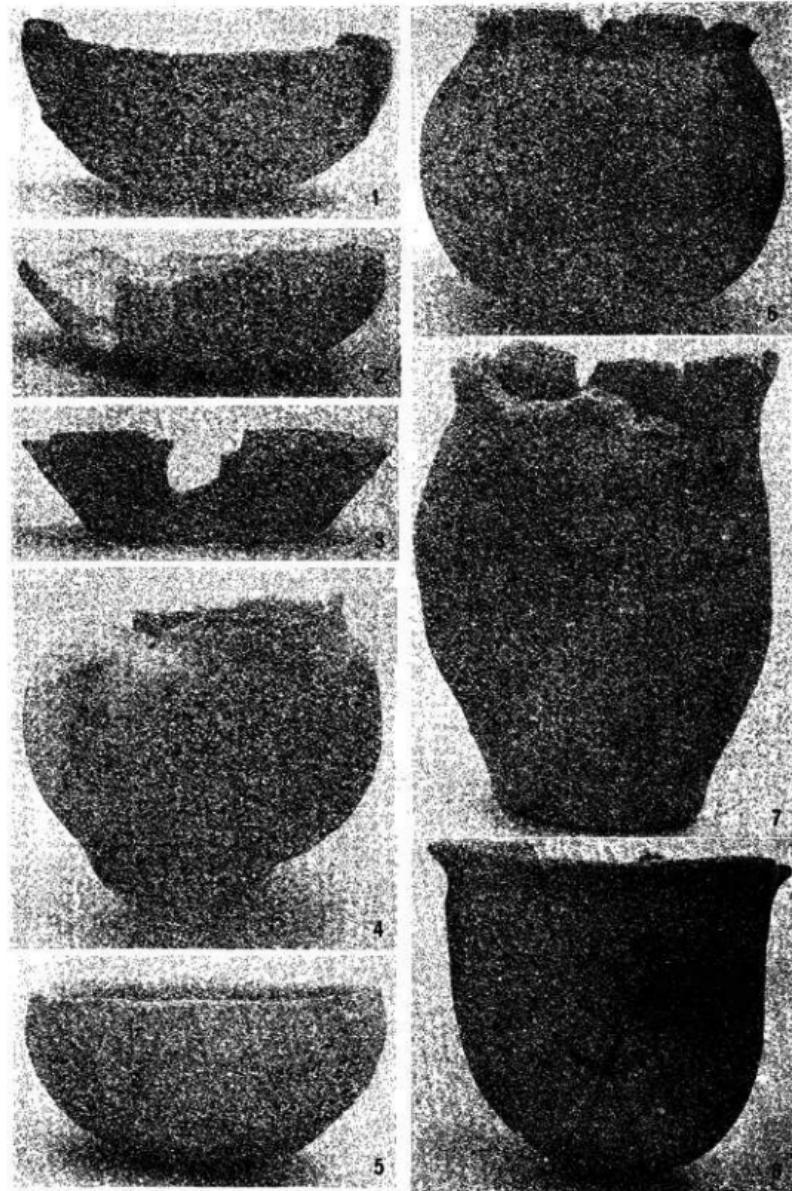


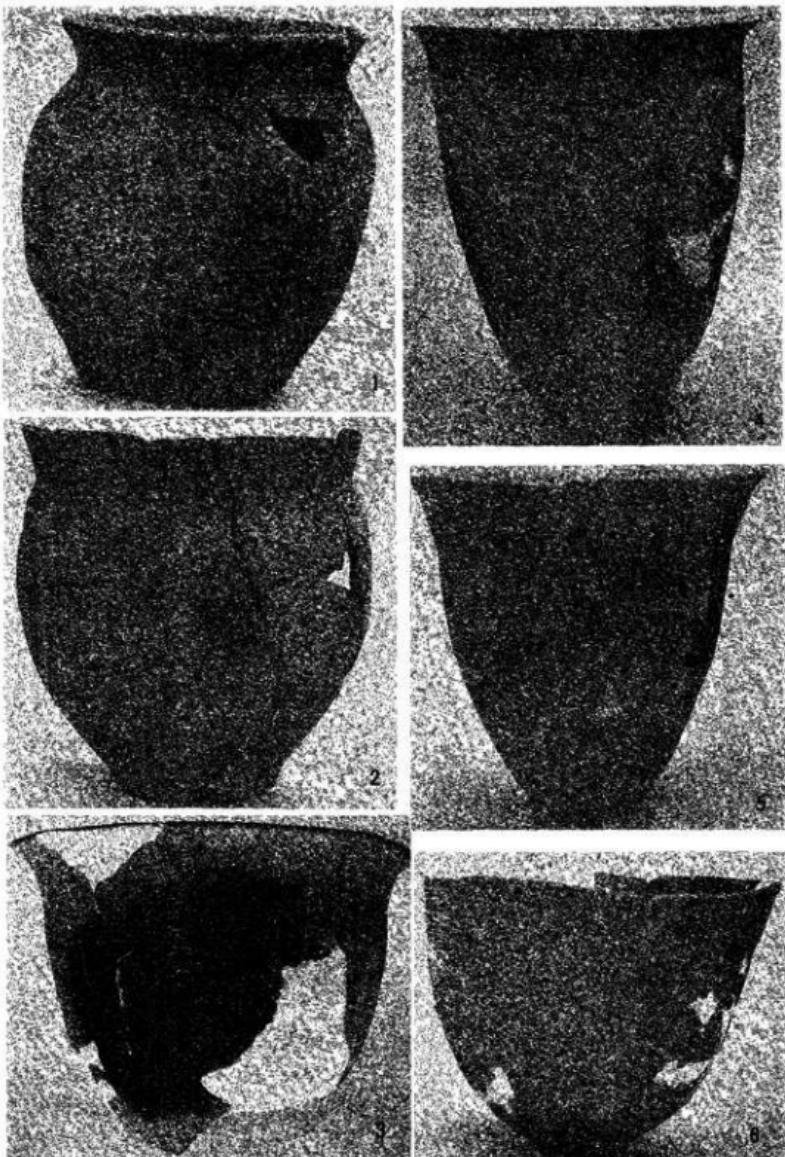


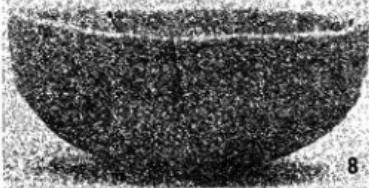
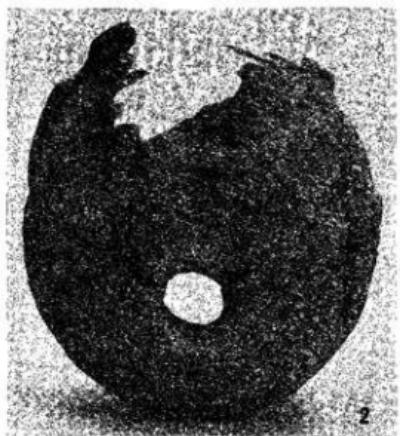
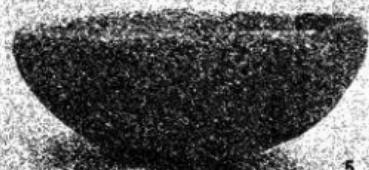


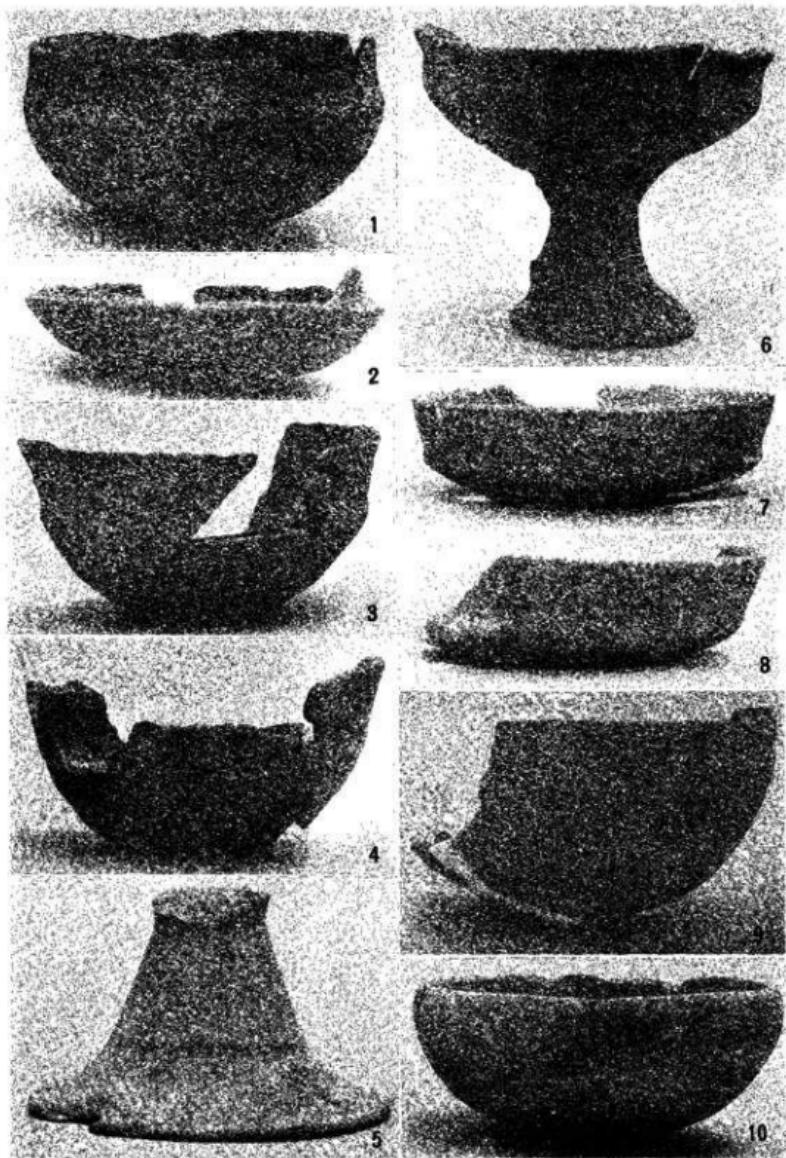




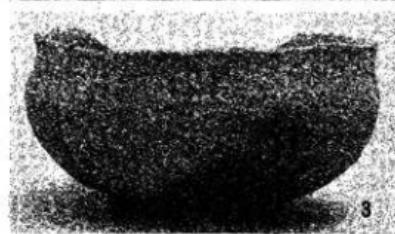
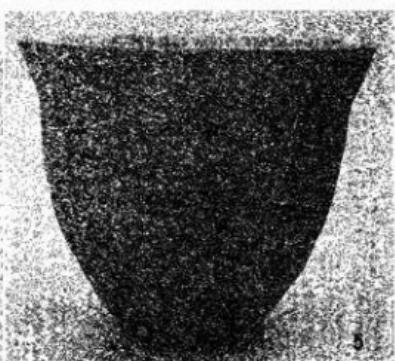
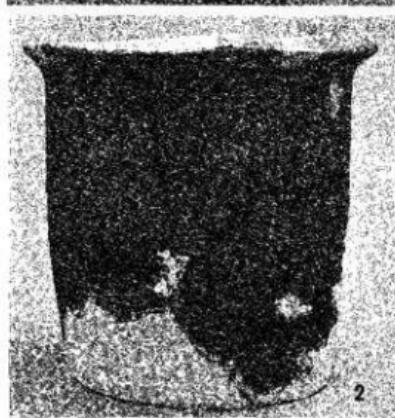
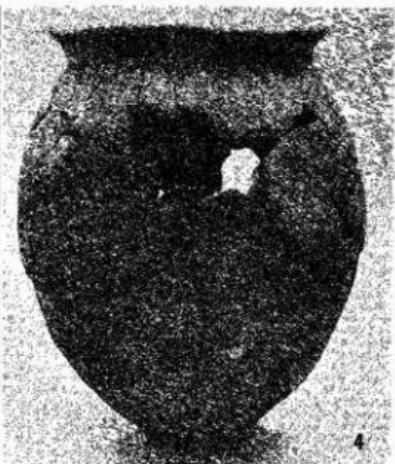






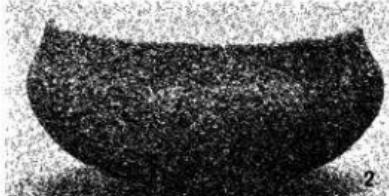




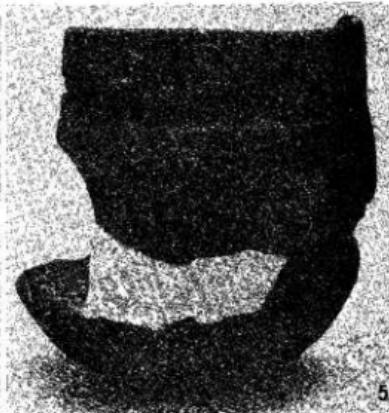




1



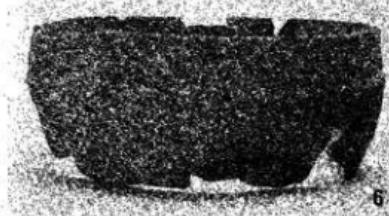
2



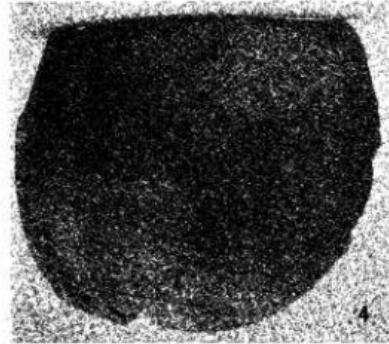
5



3



6



4

上敷遺跡

(栃木県埋蔵文化財報告書第19集)

発行 昭和52年3月

編集者 栃木県教育委員会事務局文化課

発行者 栃木県教育委員会

印刷所 下野印刷株式会社